

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書IX

鳥取県西伯郡名和町

名和中畠遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところですが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある名和中畠遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡から竈形土器が使用時のまま出土するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただきたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田 博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着した大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡名和町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「名和中畠遺跡」、「名和飛田遺跡」、「門前上屋敷遺跡」、「門前第2遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「名和中畠遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うとともに、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い关心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所長 嘉本 昭夫

例　　言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが「一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」として平成16年度に実施した調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地、遺跡名、調査面積は、以下のとおりである。

所在地	鳥取県西伯郡名和町大字名和字中畠1083ほか
遺跡名	名和中畠遺跡
調査面積	9,340m ²
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、座標値は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の値である。また、レベルは海拔標高を表す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「淀江」「御来屋」「船上山」を縮小して使用した。
5. 本発掘調査にあたり出土した鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員穴澤義功氏に、土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏に、出土石器の石材鑑定を大山自然公園指導員の会顧問遠藤勝壽氏にお願いし、白石氏には玉稿を賜った。記して感謝いたします。
6. 本報告における出土炭化材樹種同定、遺跡の航空写真撮影、現地における基準点測量および地形測量をそれぞれ業者委託した。出土炭化材樹種同定については、同定結果報告を第4章に掲載している。
7. 遺物の実測・淨書、掲載図面の作成・淨書は文化財主事、調査員および整理作業員が行った。一部の石器実測・淨書は業者に委託した。
8. 現場および遺物の写真撮影は文化財主事、調査員が行った。
9. 本報告書の作成は加藤裕一、木山清貴、日置智が行い、編集は加藤が担当した。文責は目次および文末に記載している。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
11. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、下記の方々から御指導、御助言および御支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）
辻 信広（名和町教育委員会）、佐伯純也（米子市教育文化事業団）

凡例

1. 遺跡の略称はNNKとした。
2. 遺構図の基本的な縮尺は以下のとおりである。
堅穴住居・堅穴…1／60 挖立柱建物…1／80 土坑・溝…1／40
3. 本報告書における遺物番号は次のように記す。
番号のみ：土器・土製品 S：石器 F：鉄製品
4. 挿図、遺構・遺物にはそれぞれ通し番号をつけた。
5. 本文中、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗りし、それ以外は白抜きで表した。
7. 遺物には遺跡名略称、グリッド名、遺構名、取上げ番号、取上げ年月日を基本的に注記した。
8. 遺物観察表は各挿図に付して掲載した。基本的に法量は、土器は口径・器高を、石器は最大長・最大幅・最大厚・重量を記載した。法量記載における*は推定復元値、△は現存値を示す。
9. 発掘調査時における遺構名・番号は報告書作成時に一部変更した。新旧の対照は下記に示す。
10. 遺構・遺物の時期決定には主に下記の文献を参照した。
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』(山陽・山陰編)』木耳社
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集
松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態』『古代吉備』19集
牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ、園第6遺跡』鳥取県教育文化財団
濱田竜彦 2003「大山山麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晚田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
岡野雅則 2004「古墳時代中期後葉から後期の土器について」『茶畑遺跡群 第3分冊 古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団

新旧遺構名対応表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
堅穴住居 1	SI 2	掘立柱建物 6	SB10	土坑 7	SK49	土坑16	SK51
堅穴住居 2	SI 4	掘立柱建物 7	SB 9	土坑 8	SK52	土坑17	SK53
堅穴住居 3	SI 5	堅穴 1	SI 3	土坑 9	SK50	土坑18	SX 1
堅穴住居 4	SI 1	土坑 1	SK67	土坑10	SK55	溝 1	SD 2
掘立柱建物 1	SB 2	土坑 2	SK57	土坑11	SK56	溝 2	SD 3
掘立柱建物 2	SB 7	土坑 3	SK66	土坑12	SK62	溝 3	SD 4
掘立柱建物 3	SB 4	土坑 4	SK60	土坑13	SK59		
掘立柱建物 4	SB 5	土坑 5	SK61	土坑14	SK64		
掘立柱建物 5	SB 6	土坑 6	SK65	土坑15	SK63		

目 次

序

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	（加藤）	1
第2章 位置と環境	（木山）	3
第3章 調査の内容		6
1. 調査の概要と土層堆積	（加藤）	6
2. 繩文時代の遺構と遺物		11
土坑	（加藤）	11
遺構外出土土器	（加藤）	12
遺構外出土石器	（加藤）	13
3. 弥生時代の遺構と遺物		19
竪穴住居1	（日置）	19
竪穴住居2	（加藤）	23
竪穴住居3	（加藤）	23
4. 古墳時代の遺構と遺物		31
竪穴住居4	（加藤）	31
5. その他の遺構と遺物		32
掘立柱建物	（日置）	33
竪穴	（日置）	35
溝	（木山）	36
土坑	（木山）	39
遺構外出土石器	（加藤）	44
ピット計測表		46
第4章 特論		49
1. 名和中畠遺跡出土土器胎土分析	白石 純	49
2. 名和中畠遺跡出土炭化材の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社	52
第5章まとめ		54
1. 調査のまとめ	（加藤）	54
2. 移動式竈について	（加藤）	55

挿図目次

図1 調査地位置	1	図6 調査地土層断面（3）	9
図2 遺跡の分布	5	図7 調査地遺構配置	10
図3 調査前地形およびレンチ配置	6	図8 土坑1・2・3および出土遺物	11
図4 調査地土層断面（1）	7	図9 遺構外出土土器	12
図5 調査地土層断面（2）	8	図10 グリッド別石器出土量概念図	13

図11 石材および器種別組成図	13	図31 挖立柱建物5・6	35
図12 石鐵（1）	14	図32 挖立柱建物7	36
図13 石鐵（2）	15	図33 壓穴1	36
図14 楕形石器、スケイバー	16	図34 溝1	37
図15 石核、剥片	17	図35 溝2・3	37
図16 石匙	18	図36 土坑4・5	38
図17 弘生時代・古墳時代遺構分布	19	図37 土坑6・7	39
図18 壓穴住居1（1）	20	図38 土坑8・9・10・11・12・13	40
図19 壓穴住居1（2）	21	図39 土坑14・15	41
図20 壓穴住居1出土遺物	22	図40 土坑16・17・18	43
図21 壓穴住居2	24	図41 遺構外出土石器（1）	44
図22 壓穴住居2出土遺物	25	図42 遺構外出土石器（2）	45
図23 壓穴住居3（1）	26	図43 遺跡内での時期別の胎土の比較（K-Ca）	50
図24 壓穴住居3（2）	27	図44 遺跡内での時期別の胎土の比較（Rb-Sr）	51
図25 壓穴住居3出土遺物	28	図45 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較（K-Ca）	51
図26 壓穴住居4	29	図46 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較（Rb-Sr）	51
図27 壓穴住居4出土遺物	30	図47 壓穴住居4開取り想定図	54
図28 その他の遺構配置	32	図48 移動式窯部位名稱（近澤1992をもとに作図）	55
図29 挖立柱建物1・2	33	図49 山陰地域の移動式窯変遷図	56
図30 挖立柱建物3・4	34		

図版目次

（カラー図版）

- 1-1 調査地周辺の地形（東から）
 1-2 調査後調査地全景（左が北西方向）
 2 調査地完掘状況（南から）
 3-1 壓穴住居4遺物出土状況（西から）
 3-2 移動式窯出土状況（北西から）
 4-1 壓穴住居4完掘状況（南西から）
 4-2 壓穴住居4壠下検土検出状況（北西から）
 4-3 壓穴住居4貼床除去後完掘状況（南西から）

（図版）

- 1-1 壓穴住居1土層断面状況（南から）
 1-2 壓穴住居1b完掘状況（西から）
 1-3 壓穴住居1bP13根石検出状況（南から）
 2-1 壓穴住居1a完掘状況（北西から）
 2-2 壓穴住居2遺物出土状況（西から）
 2-3 壓穴住居2完掘状況（西から）
 3-1 壓穴住居3遺物出土状況（南西から）
 3-2 壓穴住居3炭化材検出状況（東から）
 3-3 壓穴住居3完掘状況（西から）
 4-1 調査地中央部ピット群完掘状況（南東から）
 4-2 調査地南側ピット群完掘状況（北から）
 5-1 挖立柱建物1完掘状況（北西から）
 5-2 挖立柱建物2・3・4完掘状況（北から）
 5-3 挖立柱建物5完掘状況（北から）
 6-1 挖立柱建物6完掘状況（北から）
 6-2 挖立柱建物7完掘状況（南東から）
 6-3 壓穴1完掘状況（南東から）
 7-1 溝1完掘状況（東から）
 7-2 溝2土層断面状況（南西から）
 7-3 溝3完掘状況（西から）
 8-1 土坑1・2・3土層断面状況（東から）
 8-2 土坑2完掘状況（東から）
 8-3 土坑1完掘状況（南東から）

- 8-4 土坑4完掘状況（西から）
 8-5 土坑5完掘状況（北から）
 8-6 土坑6土層断面状況（南から）
 9-1 土坑7完掘状況（東から）
 9-2 土坑10・11完掘状況（南西から）
 9-3 土坑8土層断面状況（北から）
 9-4 土坑8・9完掘状況（北東から）
 9-5 土坑12完掘状況（西から）
 9-6 土坑13土層断面状況（東から）
 10-1 土坑15炭化材検出状況（北から）
 10-2 土坑14土層断面状況（東から）
 10-3 土坑14完掘状況（北東から）
 10-4 土坑16底部炭・燒土検出状況（南から）
 10-5 土坑17底面炭検出状況（西から）
 10-6 土坑18土層断面状況（西から）
 11 壓穴住居4出土遺物
 12-1 壓穴住居4出土移動式窯（1）
 12-2 壓穴住居4出土移動式窯（2）
 12-3 壓穴住居2・4出土鉄製品
 12-4 壓穴住居4出土鉄製品
 12-5 壓穴住居4出土鉄製品X線写真
 13-1 壓穴住居1出土土器
 13-2 壓穴住居1出土石器
 13-3 壓穴住居2出土土器
 13-4 壓穴住居2出土石器
 14-1 壓穴住居2出土鉄製品
 14-2 壓穴住居2出土鉄製品X線写真
 14-3 壓穴住居3出土土器
 14-4 壓穴住居3出土石器
 14-5 土坑1・2・3出土土器
 15-1 遺構外出土土器
 15-2 遺構外出土石器（1）
 15-3 遺構外出土石器（2）
 16 壓穴住居3出土炭化材樹種同定顯微鏡写真

第1章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯・経過

一般国道9号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く総延長691kmの幹線道路である。名和町内での道路建設計画地では多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。名和町大字名和字中畠に所在する名和中畠遺跡は名和淀江道路におけるインターチェンジ建設予定地に該当し、埋蔵文化財の存在が予測できたため、名和町教育委員会は鳥取県教育委員会文化課との協議により試掘調査を実施した。その結果、遺構・遺物の存在が確認された。これらを受けて、道路設営者である国土交通省倉吉河川国道事務所は文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘の通知を鳥取県教育委員会教育長に提出、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託し、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。調査面積は、9,340m²である。

調査に先立ち、調査前航空写真撮影、地形測量・基準点測量を実施した。4月21日から26日にかけて調査地南側に設定した廃土置場周辺以外の表土剥ぎを行い、4月26日から調査に着手した。調査は調査地北側から南側に向けてトレンチを随時設定して進めた（トレンチ配置、土層堆積の概要については第3章1を参照）。8月19日、20日には、調査地北側の調査が概ね終了したのに併せて調査地南側の表土剥ぎを行い、順次南側の調査にかかった。調査中に発生する掘削土は廃土置場から随時搬出した。調査終了に伴い、10月18日から調査後航空写真撮影、調査後地形測量を実施し、10月27日に調査全工程を終了した。

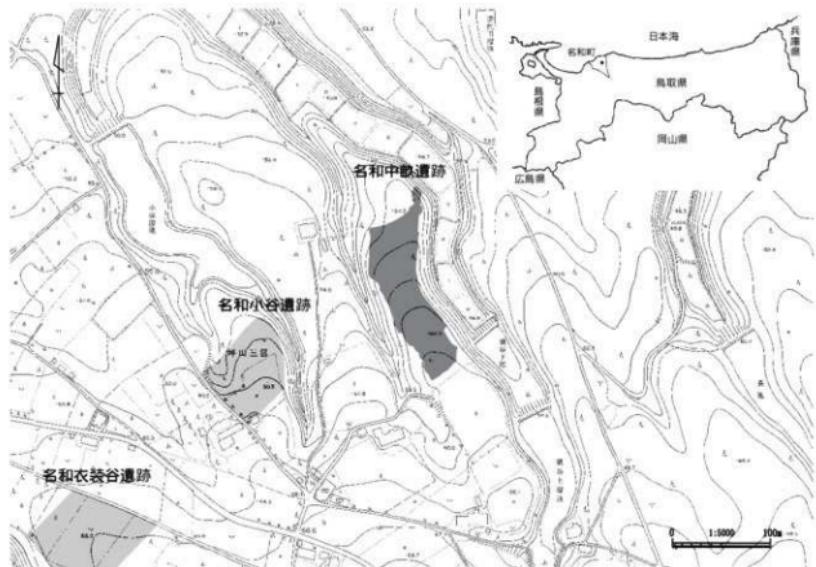


図1 調査地位置

また、10月2日に名和飛田遺跡と合同で現地説明会を開催した。あいにくの雨で天候に恵まれなかつたが、40人を超える方々の参加を得ることができた。

(加藤)

2. 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財團法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充

事 務 局 長 中村 登

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次 長（事 務） 竹内 茂

次 長（専 門） 加藤 隆昭

調 査 課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文 化 財 主 事 大野 哲二、下江 健太

庶 務 課

課長（兼次長） 竹内 茂

主 幹 福田 高之

事 務 職 員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 名和調査事務所

所 長 國田 俊雄

班 長 西川 徹

文 化 財 主 事 中森 祥、浜田 真人（門前第2遺跡担当）

森本 優弘（門前上屋敷遺跡担当）

加藤 裕一、木山 清貴（名和中畠遺跡担当）

北 浩明（名和飛田遺跡担当）

調 査 員 湯川 善一（門前第2遺跡担当）

日置 智（名和中畠遺跡担当）

三木 雅子（名和飛田遺跡担当）

調 査 补 助 員 遠藤万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭

事 務 补 助 員 金田 かおる

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 名和町教育委員会

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

名和町は鳥取県の西部、米子市の東方約20kmに位置し、東は中山町、南西は大山町に接している。北は日本海に臨み、北北西約70km先に位置する隱岐島を望む大山の裾野地帯にある。大山を水源とする真子川・名和川・阿弥陀川が北流して、日本海に注いでいる。名和町域の地形は弥山などから噴出した名和火碎流、弥山火碎流などを基盤とする。西部は阿弥陀川によって形成された県下最大級の阿弥陀川扇状地が広がる。東部は火山台地が発達し、真子川などの河川と、無数に派生する谷によって台地・丘陵・段丘が開削されている。いくつかの台地は広く緩やかな傾斜が続き、名和中畠遺跡はこのような台地上に立地している。

2. 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代

旧石器時代は、門前第2遺跡（西畠地区）で、2万5千年前の地層から黒曜石製のナイフ形石器を主体とする石器群が確認されている。ほかに名和小谷遺跡、押平尾無遺跡で、黒曜石製石器が出土している。

縄文時代は、草創期の有舌尖頭器が、下大山第6遺跡、陣構第3遺跡で出土している。早期は、門前第2遺跡（菖蒲田地区）で配石造構群と押型文土器、古御堂金ヶ平遺跡、上大山第1遺跡、角塚遺跡、高田第4遺跡、高田第10遺跡で押型文土器、茶畠山道遺跡で撚糸文土器が出土している。名和飛田遺跡では、早期末の隆蒂文土器や黒曜石製石器をはじめとする多量の遺物が出土している。前期は大山町の中高遺跡、中期は名和衣装谷遺跡、中山町の細工塚遺跡で土坑や遺物が出土している。後期は、古御堂遺跡や名和飛田遺跡、南川遺跡がある。南川遺跡では、西日本では珍しい五角形の石組炉をもつ後期初頭の住居跡が確認されている。晩期は、大塚第3遺跡、高田第10遺跡、文殊領屋敷遺跡などがある。

弥生時代

前期は、大塚岩田遺跡で環濠らしきV字状の断面をもつ溝が検出されている。名和飛田遺跡、茶畠山道遺跡で土器片が出土している。中期は、茶畠山道遺跡で独立棟持柱付掘立柱建物跡や線刻絵画土器が検出されており、中期中葉～後葉頃にかけ、この地域の拠点集落であったと推測されている。南側に位置する茶畠六反田遺跡で竪穴住居跡と小型の掘立柱建物跡、蛇ノ川を隔て東側に位置する茶畠第1遺跡で竪穴住居跡や独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡、南西側に位置する押平弘法堂遺跡で土壙墓9基が検出されている。北東に約2km離れた名和飛田遺跡では竪穴住居跡とシカの線刻絵画土器が確認されている。後期は、大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、東高田遺跡、茶畠第2遺跡、茶畠六反田遺跡、名和飛田遺跡、大山町の塚田遺跡で集落跡が確認されている。東高田遺跡と名和飛田遺跡で、竪穴住居跡からガラス玉が出土している。大山町から淀江町にかけての丘陵上に位置する妻木晚田遺跡では、多数の竪穴住居跡のほか、四隅突出型墳丘墓や環濠などが検出されている。終末期から古墳時代前期にかけて、茶畠第1遺跡、押平尾無遺跡、古御堂笛尾山遺跡で、竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代

ハンボ塚古墳は、径33mを測る中期後半の円墳で、円筒埴輪や人物形や水鳥形の形象埴輪が出土している。中山町の高塚古墳も同時期である。後期の古墳群として、茶畠古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群などがある。押平尾無遺跡で前・中期の竪穴住居跡、大塚塚根遺跡と古御堂笹尾山遺跡で中～後期の竪穴住居跡、名和飛田遺跡で中期末の竪穴住居跡、後期末の竪穴住居跡と大型の掘立柱建物跡、彩色記号の施された須恵器が確認されている。

奈良～平安時代

奈良時代は、高田原廃寺で乱石積基壇や溝が検出され、淀江町の上淀廃寺跡と同型式の単弁十二葉蓮華文の軒丸瓦が出土している。阿弥陀川河口近くの大塚屋敷遺跡は、7世紀後半から8世紀にかけての掘立柱建物跡が検出されており、倉庫群と推測されている。生産遺跡では、柄原窯跡で穴窯跡を確認している。

平安時代は、茶畠六反田遺跡で綠釉陶器や墨書き土器を含む条里区画とみられる溝が検出されている。主軸はほぼ南北方向をとる。また、小規模な区画の水田跡が確認されている。名和乙ヶ谷遺跡で鉄滓と鉄生産に関係すると推測される道路跡、名和衣装谷遺跡で大型の掘立柱建物跡と綠釉陶器や灰釉陶器を検出している。生産遺跡では、上寺谷遺跡で製鉄炉跡を確認している。

鎌倉～室町時代

茶畠六反田遺跡、文殊領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡は、いずれも鎌倉時代後半に集落が廃絶したと考えられる。その後形成されたと思われる耕作痕跡が茶畠六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡で検出しており、集落から煙作地へ土地利用の変換があったことが推測されている。押平弘法堂遺跡で掘立柱建物跡のほか土壤墓から青磁皿が出土している。門前上屋敷遺跡では、堀と推測される大溝が検出されている。

名和町には元弘3（1333）年、隱岐島を脱出した後醍醐天皇を迎えた名和長年ゆかりとされる旧跡が多数存在するが、考古学的にその事を裏付ける遺跡は今のところ確認されていない。しかし、名和氏とつながりのあった荒松氏によって築かれたという伝承のある富長城跡や長野城跡が残っている。門前礎石群で礎石建物跡を検出、白磁・青磁・染付などが出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。浜ノ坂遺跡で室町期とみられる和鏡が土壤墓に副葬されている。

近世以降

寛永9（1632）年に岡山藩主であった池田光仲が鳥取藩主となる。御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占め、汎入郡の中心地であった。明治35年、鉄道が境～御来屋間を結ぶ。昭和29年に光徳村、御来屋村、名和村、庄内村が合併し、今日の名和町となった。さらに、2005年3月には中山町、大山町と3町合併し、新しい町大山町として歴史を歩みだそうとしている。

（木山）

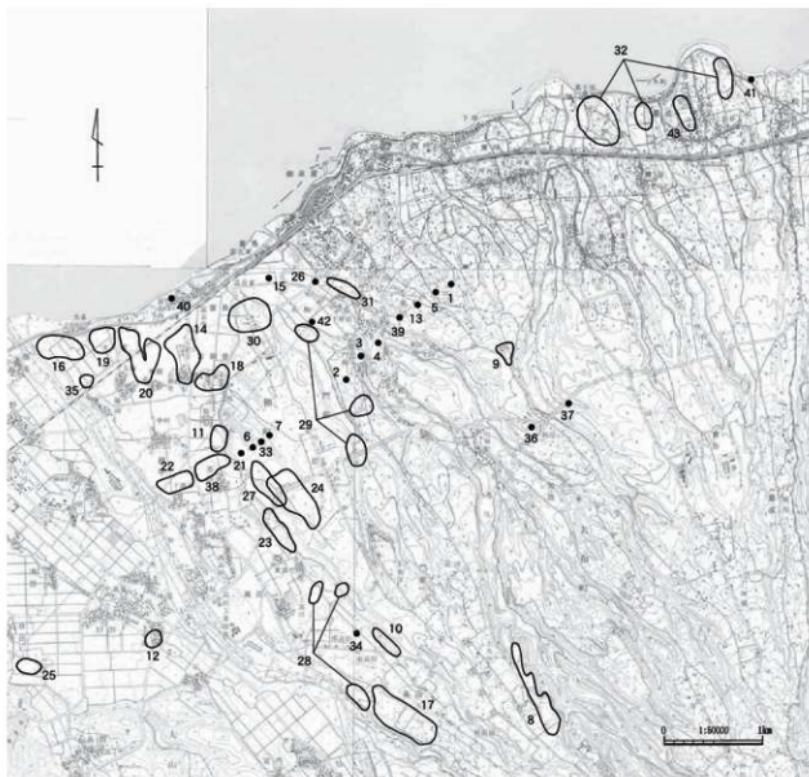


図2 遺跡の分布

遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名
1 名和中村遺跡	12 中村遺跡	23 東高田遺跡	34 高田宿今
2 門田第2号遺跡	13 北和田糸谷遺跡	24 西御深2遺跡	35 大保田糸谷遺跡
3 門田上塙遺跡	14 吉岡立衛遺跡	25 保田遺跡	36 新羽室遺跡
4 名和廢田遺跡	15 南川遺跡	26 ハンボ保田遺跡	37 上寺谷遺跡
5 名和小谷遺跡	16 大保田3遺跡	27 斎藤大埴跡	38 系原六度山遺跡
6 押平尾無田遺跡	17 高田第10遺跡	28 高田大埴跡	39 名和乙ヶ谷遺跡
7 古御堂山古墳・平道跡	18 文殊別院敷地遺跡	29 門前大埴跡	40 宮長城跡
8 上大山第1遺跡	19 大保田前遺跡	30 富貴山村大埴跡	41 長野城跡
9 角坂遺跡	20 大保田松根遺跡	31 拝田古墳群	42 門前石臼
10 高田第4遺跡	21 西御第1遺跡	32 舊成木埴跡	43 長ノ坂遺跡
11 茶畠山道遺跡	22 押平坐山後尾山遺跡	33 古御空寺尾尾山遺跡	

【参考文献】

名和町誌編纂委員会 1978『名和町誌』

名和町教育委員会 2003『押平弘法堂遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第32集

鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』

鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』

竹内理三ほか 1982『角川日本地名大辞典31 烏取県』角川書店

第3章 調査の内容

1. 調査の概要と土層堆積（図3～7）

調査地は、大山より派生し日本海側へ放射状にのびる低丘陵上に位置する。丘陵上の平坦部は北方に向へゆるやかに傾斜しており、標高は調査前で南側が概ね62m、北側が55mを測る。ただし調査地北半は削平を受けていることが窺える。丘陵斜面部は北東部・西側が調査範囲に含まれている。表土剥ぎ実施前、調査地中央部北寄りに平面形がコの字状を呈する溝を確認した（図3・7）。コの字部分の長辺は約38m、短辺は約28mで、溝の幅は約2.5m、深さは約30～60cmを測る。表土が溝を埋めていることから古い時期のものではないようである。近隣に住む方によると、明治期頃当地は畠地として利用していたとのことで、その頃に掘削されたものかもしれない。表土剥ぎ完了後、図3のようにトレチを設定し、主要な土層堆積をI～IX層に分層した（図4～6）。以下、各層堆積状況の概要を述べる。

調査地には樹木が繁茂していたため、根による搅乱を著しく受けている。表土下に堆積するI層（にぶい褐色土：Hue10YR 5/3）上から掘り込まれる遺構の存在は想定できたが、土壤化が進行しており、遺構検出が困難であった。そのため遺構検出はI層下のII層（黄橙色土：Hue10YR 7/8）、III層（明黄褐色土：Hue10YR 6/6）、V層（黄橙色土：Hue7.5YR 7/8）上面において行った。しかしII層・III層は調査地中央部付近で部分的な堆積が認められるにとどまり（図7）、調査地北側・南側や丘陵縁辺部は表土及びI層直下が基盤層であるV層となる。そのため遺構の多くがV層上面で

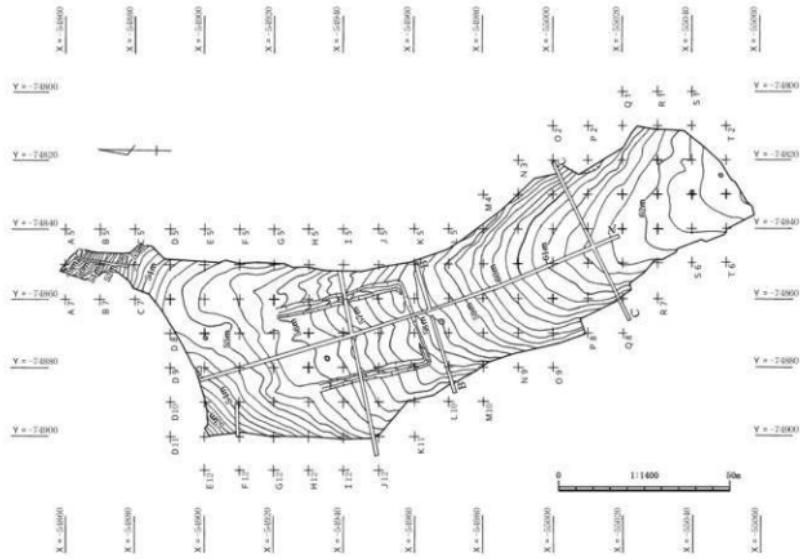


図3 調査前地形およびトレチ配置

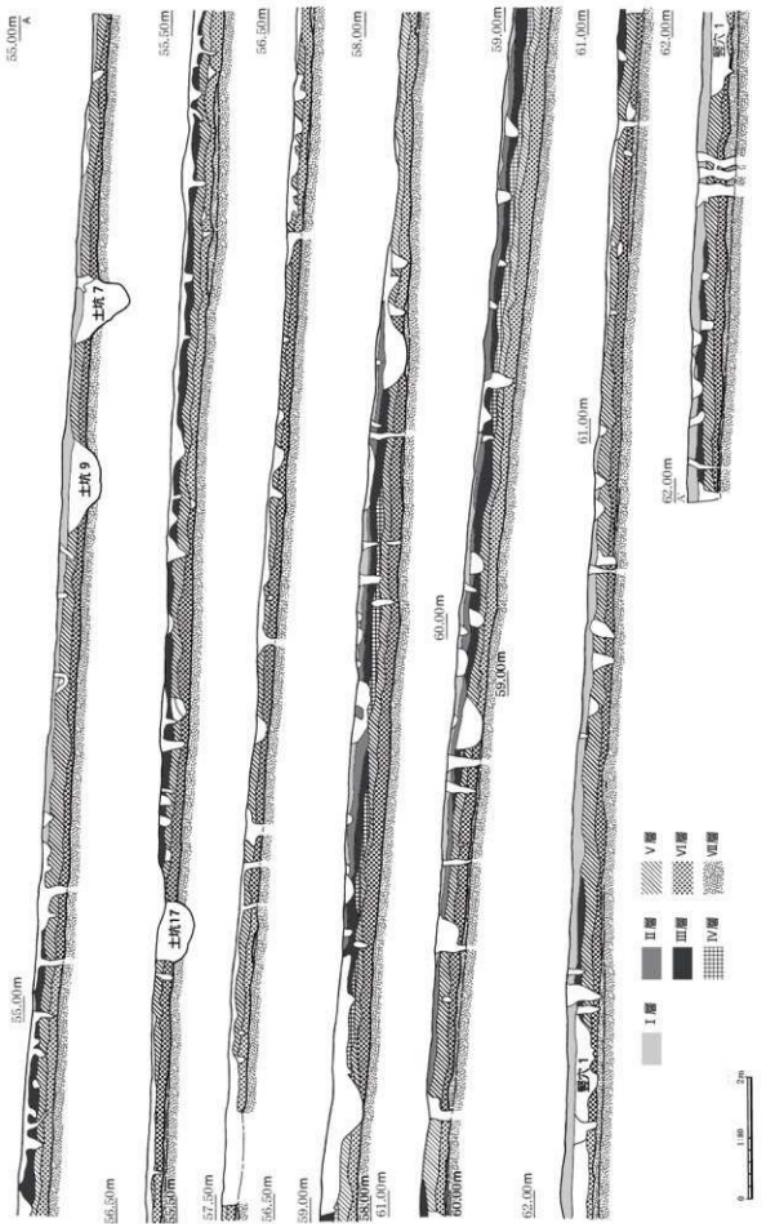
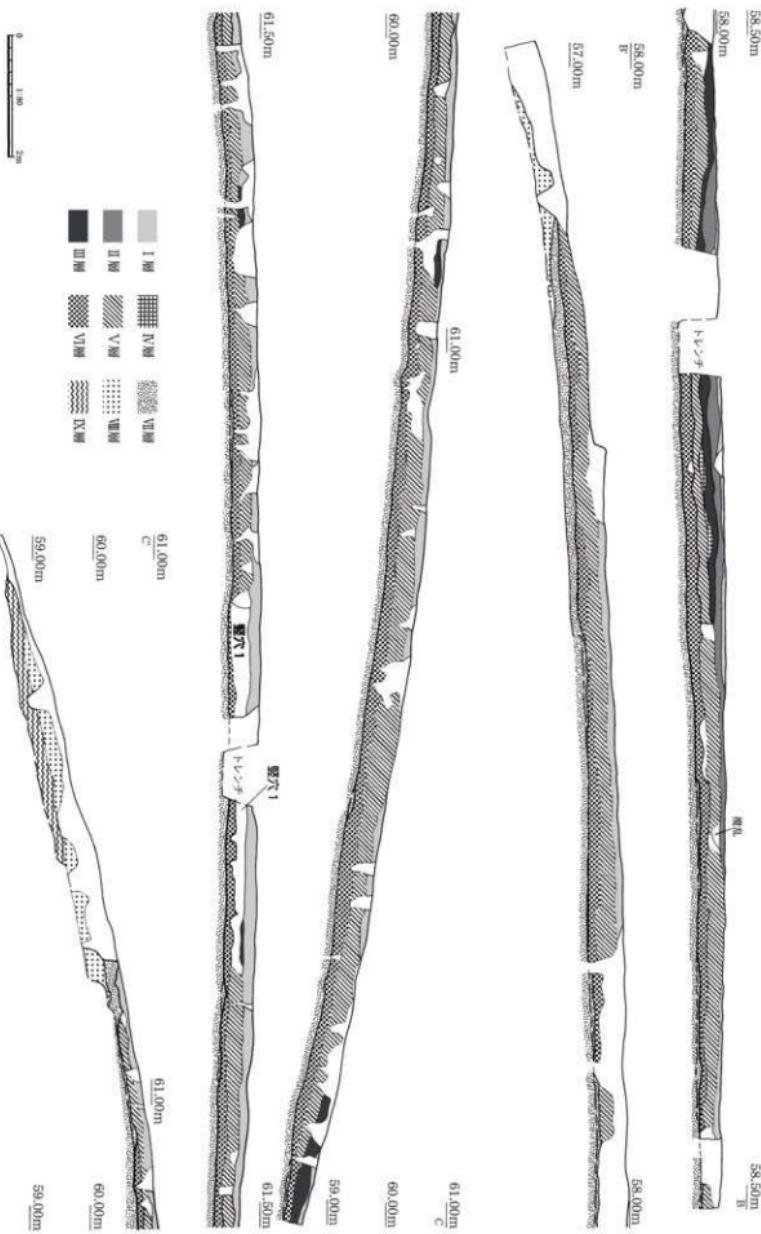


図 4 調査地土層断面 (1)

図5 調査地土層断面（2）

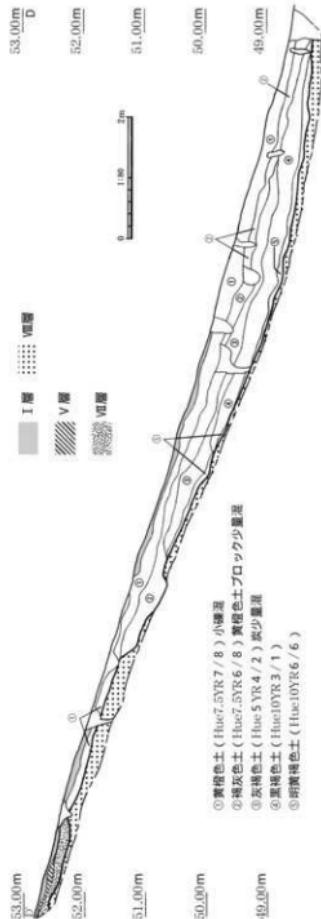


の検出となり、遺構の層位的な検討が十分にできなかった。ビット等遺構埋土の土色は黒褐色、灰褐色、明褐色、黄褐色に大別されるが、時期との対応関係ははっきりしない。IV層（橙色土：Hue7.5YR 7 / 6）はⅢ層・V層間に堆積が認められたが、面的な広がりはほとんど無かった。

遺物の出土量は全体的に希薄で、表土・搅乱土、I層からの出土がほとんどを占める。II・III・IV層中からは微量の土器小片、黒曜石・安山岩製石器片が出土した。樹木の根による搅乱や土壤化の進行もあり、層位毎の遺物相の把握ができなかった。出土土器の主な時期は縄文早期～中期、弥生時代終末期、古墳時代後期であり、縄文期と考えられる土坑や弥生時代終末期・古墳時代後期の竪穴住居が確認されていることから、本来は各時期の遺構面が存在したと考えられる。緩傾斜地とはいえ、土砂の流失が顕著であったのだろう。調査地北東部斜面に設定したトレンチ（図6）では、黒褐色系のクロボクと思われる堆積（図6：②～④層）を確認した。竪穴住居埋土の最上層と類似することから、丘陵上から流出し堆積したものと思われるが、出土遺物は無く詳細は不明である。

V層以下は無遺物であったため基盤層と判断した。V層は黃橙色を呈するローム層で、斜面部下位を除き調査地ほぼ全域に堆積する。VI層（黄色土：Hue2.5YR 8 / 6）はしまりが少なく、姶良丹沢火山灰（以下ATと略す）ブロックを包含する。ATブロックの含量が齊一でないため、再堆積層の可能性がある。その下のVII層（浅黃橙色土：Hue7.5YR 8 / 4）は乳白色を呈するローム層で、名和町の門前第2遺跡（西畠地区）における試掘調査において当該層中から後期旧石器が確認されているが、本遺跡での出土はない。VII層より下位のVIII層（橙色土：Hue7.5YR 6 / 8）・IX層（橙色土：Hue7.5YR 8 / 6）もローム層で、丘陵斜面部下位で確認した。IX層は小礫が混じる。その下はいわゆる御来屋疊層で、固く凝結している。約10万年前の河川堆積層と考えられている。

図6 調査地土層断面（3）



(加藤)

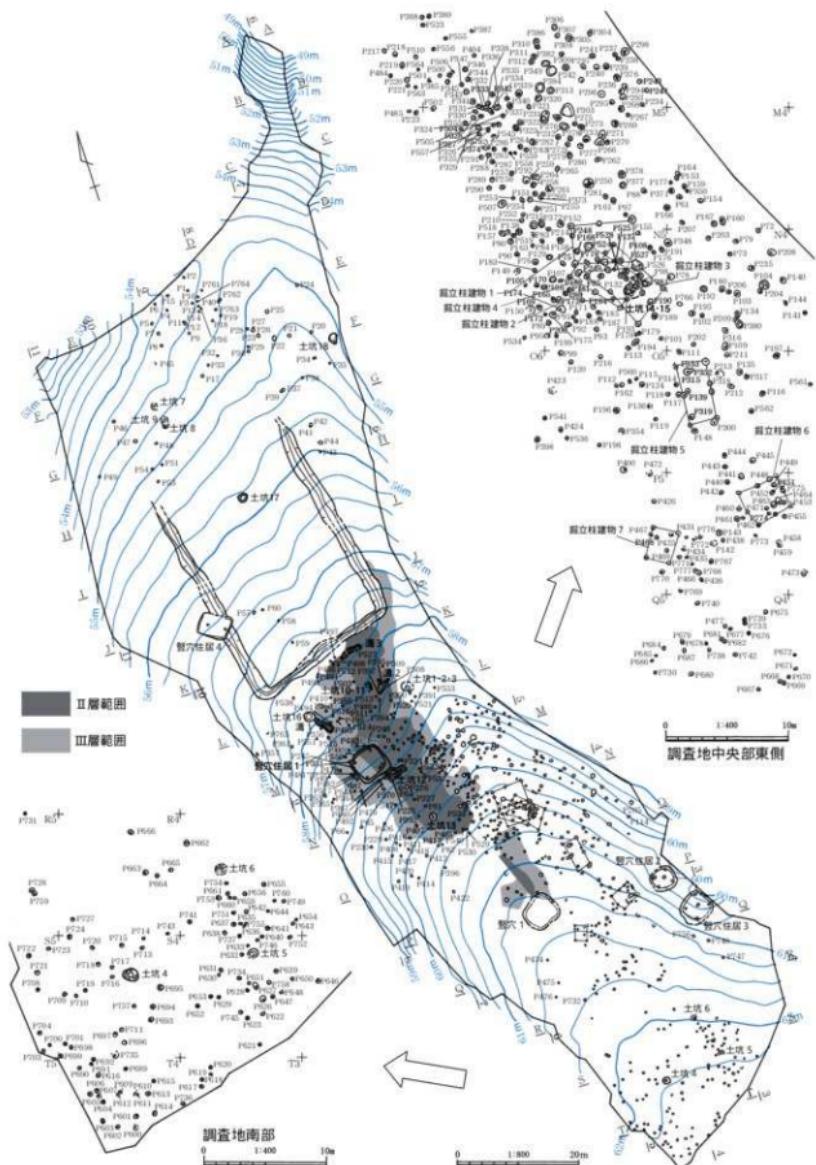


図7 調査地遺構配置

2. 繩文時代の遺構と遺物

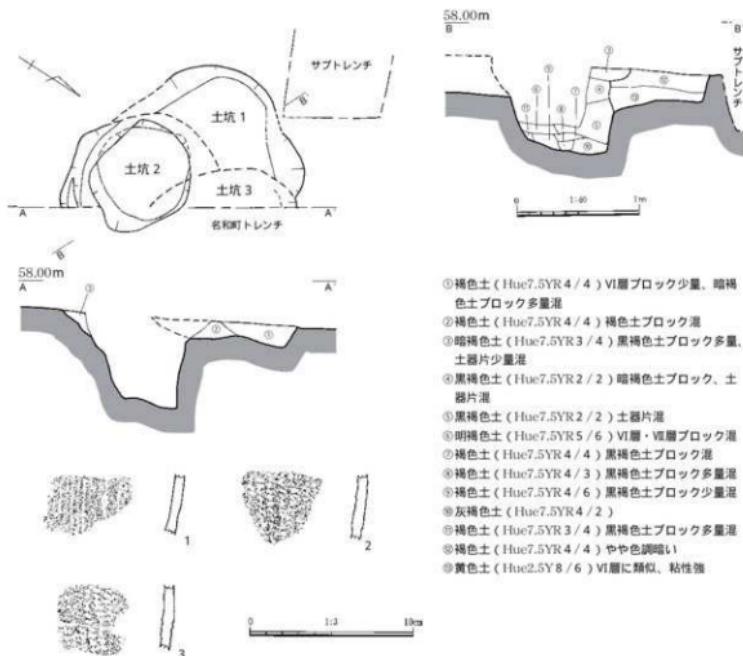
本遺跡では表土・搅乱土中や包含層中より縄文土器片、黒曜石・安山岩製石器が出土しているが、当該期の遺構と想定できるのは土坑3基に留まる。

(加藤)

土坑1・2・3 (図7、8 図版8-1・2・3、14-5)

K6グリッドに位置しI層下のV層上面において検出した。3基の土坑が重複しており、土層断面での切り合い関係の観察から、古い方より1、2、3と呼称する。いずれも埋土中に縄文土器片を含み、特に土坑2の④・⑤層から多数出土した。土器は小片で磨耗が著しいが、胎土や焼成、施文された縄文の相違から少なくとも4個体分あると思われる。土坑2は検出面からの深さ約40cmを測り、しっかりと掘り込まれている性格は不明である。土坑1～3出土土器は重複していることから、埋没の時期差は無いと思われ、概ね縄文時代中期と考えている。

(加藤)



遺物 番号	堆積 層番号	遺 構 層 位	種 別	器 種	口徑(cm) (底)	器 高 (cm)	特 徴	施 工 状 況	色 調	備 考
1	8	土坑2 不明	縄文	—	—	△3.7	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒少 良	褐色	
2	8	土坑2 不明	縄文	—	—	△4.1	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒少 良	浅黃褐色	
3	8	土坑2 ③層	縄文	—	—	△4.0	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多 良	浅黃褐色	

遺構外出土土器(図9 図版15-1)

遺構外で出土した土器のうち、特徴的なものを列挙した。小片が多く、磨耗が著しい資料もみられるが、本遺跡出土の縄文土器の時期は早期～中期に収まると考えている。4は山形の押型文が外面に施文される。黄島式併行の可能性がある。5は撚糸文が外面に施される。節が不明瞭で撚りが甘い。6も磨耗が進行しているが、外面に撚糸文を確認できる。5・6について時期比定は難しい。7は里木I式に類似しており、縄文時代前期後葉に属すると考えている。8～19は縄文時代中期と判断した。9・10は外面に目殻腹線による条痕と円形列点文が施される。船元I式A類。8・11～15も爪形文等の特徴から船元I式A類と思われる。16は地が縄文、貼付突带上に刻目を施す。船元II式B類か。17

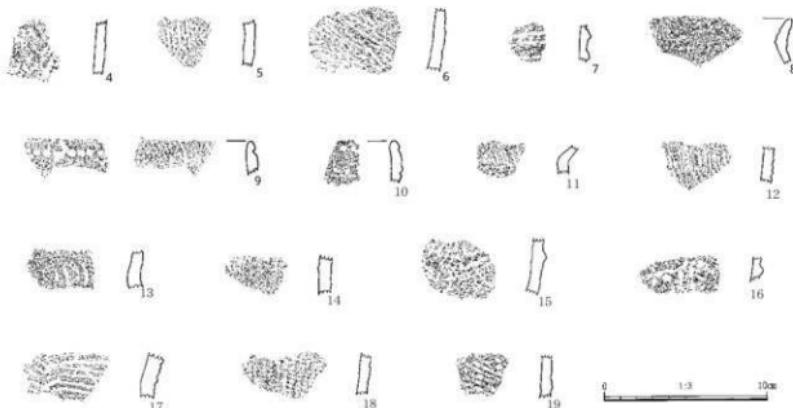


図9 遺構外出土土器

遺物 番号	発 現 場 名	遺 構 名	種 類	器 種	口径(cm) (底)	脚 高 (cm)	特 徴	施 工 模 様	色 調	備 考
4 9	R 2	V 壁上面	縄文	深鉢	—	△3.4	外面：押型文（山形文、横位方向） 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：浅黄色 内面：灰黄色	山形の板幅大、 鋸角
5 9	M 6	壁上面	縄文	深鉢	—	△2.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	橙色	
6 9	L 7 表土下	縄文	深鉢	—	△3.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：褐色 内面：褐色		
7 9	H 8 表土下	縄文	深鉢	—	△2.3	外面：貼付突突 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	褐色		
8 9	H 8 表土下	縄文	深鉢	—	△2.8	外面：口縁部下部以下文？ 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	ないし黃褐色、 黒褐色	口縁部	
9 9	調査地中央 表土下	縄文	深鉢	—	△2.1	外面：目殻腹線による条痕 円形列点文	砂粒多量 良	ないし黃褐色	口縁部	
10 9	K 6 表土下	縄文	深鉢	—	△2.6	外面：目殻腹線による条痕 円形列点文	砂粒多量 不明	ないし黃褐色	口縁部	
11 9	J 9 表土下	縄文	深鉢	—	△1.8	外面：目殻腹線による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	ないし褐色	胴部細部?	
12 9	K 7 壁上面	縄文	深鉢	—	△2.3	外面：目殻腹線による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	褐色		
13 9	G 9 表土下	縄文	深鉢	—	△2.4	外面：爪形文 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	ないし褐色、 黒褐色	胴部細曲面	
14 9	F 6 表土下	縄文	深鉢	—	△2.5	外面：爪形文 内面：磨耗のため不明	砂粒少量 良	ないし褐色	胴部細曲面?	
15 9	L 8 表土下	縄文	深鉢	—	△3.6	外面：貼付突突、突帶上に刻み 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	ないし褐色		
16 9	J 6 表土下	縄文	深鉢	—	△1.6	外面：貼付突突、突帶上に刻目 縦文 内面：ナデ	砂粒少量 良	ないし褐色		
17 9	G 10 表土下	縄文	深鉢	—	△2.8	外面：半薪竹管状工具による押し引き擦痕 内面：ナデ	砂粒少量 良	ないし褐色		
18 9	L 6 壁上面	縄文	深鉢	—	△2.6	外面：縦文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	ないし褐色 内面：ない褐色		
19 9	K 7 壁上面	縄文	深鉢	—	△2.7	外面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	ないし褐色		

は半截竹管状工具による押引き沈線が特徴的で、船元II式C類に類似する。

(加藤)

*本遺跡出土の縄文土器について、鳥取県教育委員会事務局 久保権二朗妻木晚田遺跡現地事務所長の助言を得た。

遺構外出土石器

(図10～16 図版15-3)

遺構外出土石器は表土や土壤化の進行した層からの出土が多く、層位的な検討が不十分だが、石材や器種など縄文時代石器の特徴を備えているものを本項で扱った。出土石器のうち、石錐、磨石、砥石等弥生時代以降出土する可能性がある石器群については本章「5. その他の遺構と遺物 遺構外出土石器」に掲載している。

本項で扱う石器類は石錐、楔形石器、スクレイバー、加工痕・使用痕のある剥片、局部磨製石斧、石匙、石核、剥片、碎片、素材が認められる(図11)。総数は569点である。石材は黒曜石がほとんどを占め、552点を数える(約97%)。残り17点が安山岩製である。これらを器種別にみると、楔形石器が40点と多いのが目を引く。また、碎片が420点と全体の約74%を占めるのも特徴である。石核、

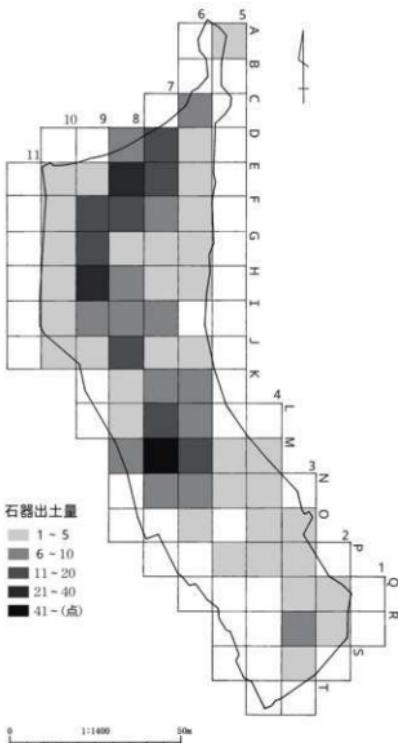
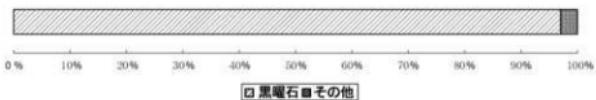


図10 グリッド別石器出土量概念図

石材別組成



器種別組成

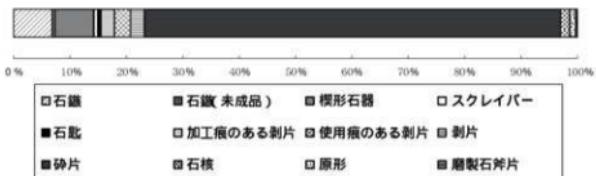


図11 石材および器種別組成図

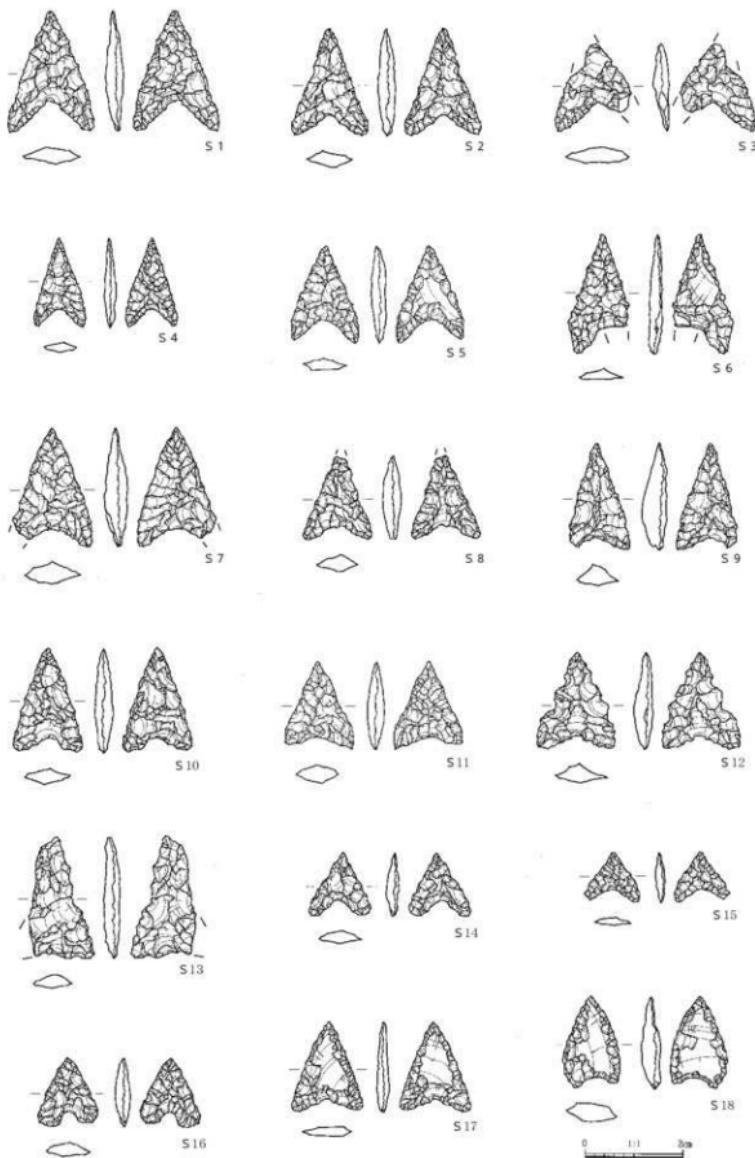


図12 石器（1）

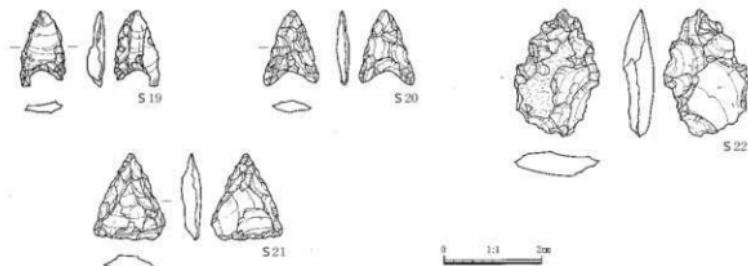


図13 石器(2)

遺物番号	標図番号	地層区分	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S 1	12	I 9 表土下	石器	黒曜石	2.5	1.8	0.4	0.5	
S 2	12	M 7 I 層	石器	黒曜石	2.2	1.55	0.35	0.7	
S 3	12	F 8 表土下	石器	黒曜石	△1.8	△1.55	0.35	0.5	
S 4	12	F 8 不明	石器	黒曜石	1.85	1.05	0.25	0.2	
S 5	12	K 8 Ⅷ層上面	石器	黒曜石	2.0	1.35	0.3	0.4	
S 6	12	P 4 表土中	石器	黒曜石	2.45	△1.25	0.3	0.5	
S 7	12	I 10 V層上面	石器	黒曜石	2.45	1.6	0.5	1.1	
S 8	12	M 7 I 層	石器	黒曜石	△1.7	1.45	0.4	0.5	
S 9	12	M 7 根掛乱土中	石器	黒曜石	2.2	1.25	0.5	0.8	
S 10	12	不明	石器	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.7	
S 11	12	F 8 表土下	石器	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
S 12	12	M 5 表土下	石器	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.7	
S 13	12	M 7 I 層	石器	黒曜石	2.5	△1.35	0.35	0.8	
S 14	12	H 9 表土下	石器	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.2	
S 15	12	H 9 表土下	石器	黒曜石	1.0	1.15	0.2	0.1	
S 16	12	不明	石器	黒曜石	1.4	1.25	0.3	0.3	
S 17	12	M 7 I 層	石器	黒曜石	1.85	1.45	0.25	0.4	両面に素材剥離面残存
S 18	12	M 7 I 層	石器	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.7	両面に素材剥離面残存
S 19	13	J 7 V層上面	石器	黒曜石	1.55	0.9	0.35	0.3	両面に素材剥離面残存
S 20	13	H 9 表土下	石器	安山岩	1.5	1.1	0.25	0.3	
S 21	13	M 4 V層上面	石器	安山岩	1.8	1.45	0.4	0.8	平基無茎器
S 22	13	N 7 根掛乱土中	石器	黒曜石	2.6	1.7	0.6	2.1	未成品

剥片が一定数出土し、素材もわずかながら認められることから、当地で石器製作が行われていたことは明白である。

次に調査地内に設定したグリッド別（1グリッド：10m×10m）の石器出土量を算出した（図10）。M 7 グリッドにおける78点（うち碎片62点）を筆頭に、E 8 グリッドで35点（碎片28点）、H 9 グリッドで24点（碎片17点）、F 8 グリッドで20点（碎片18点）等、調査地中央～北半の数箇所に石器出土量の突出したグリッドがあり、その周辺グリッドにおいても一定の出土量がある様子が窺える。碎片

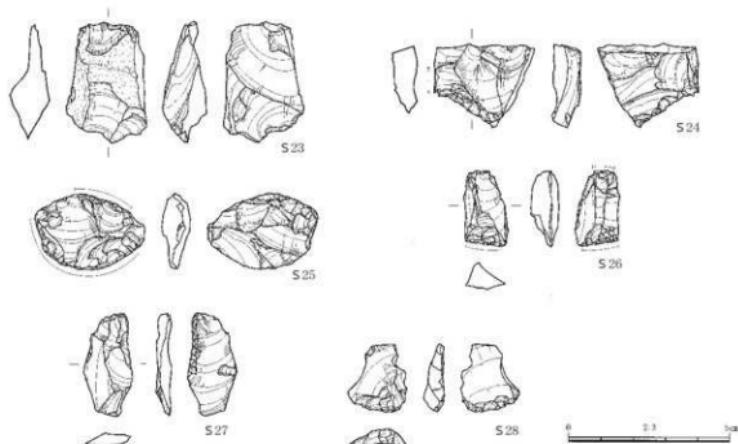


図14 楔形石器、スクレイパー

遺物 番号	標団 番号	地 区 位	断面	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S23	14	不明	楔形石器	黒曜石	3.7	2.5	1.35	9.5	
S24	14	H 9 表土下	楔形石器	黒曜石	2.6	3.1	0.9	6.3	
S25	14	F 10 表土下	楔形石器	黒曜石	2.35	3.4	0.9	5.3	
S26	14	K 7 根擾乱土中	楔形石器	黒曜石	2.4	1.4	0.9	2.0	
S27	14	N 5 I層	スクレイパー	黒曜石	3.2	1.5	0.5	1.3	
S28	14	N 7 I層	スクレイパー	黒曜石	2.1	1.8	0.6	1.7	

の占める多さを考えれば石器製作跡を想定する上で重要であるが、上記グリッドにおいて当該期の関連構造は検出されていない。また、本遺跡は傾斜地で根擾乱や土壤化が進み、土砂の流失が想定されるため、後世の資料移動に留意する必要がある。以下、器種別に概要を述べる。

石鏃は41点出土しており（未成品2点含む）、石材別に見ると黒曜石製38点、安山岩製3点である。このうち、22点を図示した（図12・13）。S 1～20は基部に抉入を持つ四基無茎鏃である。S 1～6の抉入は比較的深めの逆V字形を呈する。S 7～16は逆U字形で浅めの抉りを持つ。先端部・抉入部間が短く、ブーメラン形をしたもの（S 14・15）がみられる。S 17～19は両面に素材剥離面を残す。S 20・21は安山岩製で、S 21は平基無茎鏃である。S 22は縁辺の一部に粗い調整がみられ、未成品とした。

楔形石器は40点出土し全て黒曜石製である。そのうち4点を図示した（図14 S 23～26）。両極打法による剥離痕を有する広義の楔形石器が大半で、そのうち1点を図示した（S 23）。S 24～26は楔本来の機能を持つと思われるものである。

スクレイパーは黒曜石製のものが4点出土し、2点を図示した（図14、S 27・28）。剥片縁辺に調整を施し、刃部をつくり出している。

石核は出土総数が9点を数える。石材はいずれも黒曜石で、6点を図示した（図15 S 29～34）。

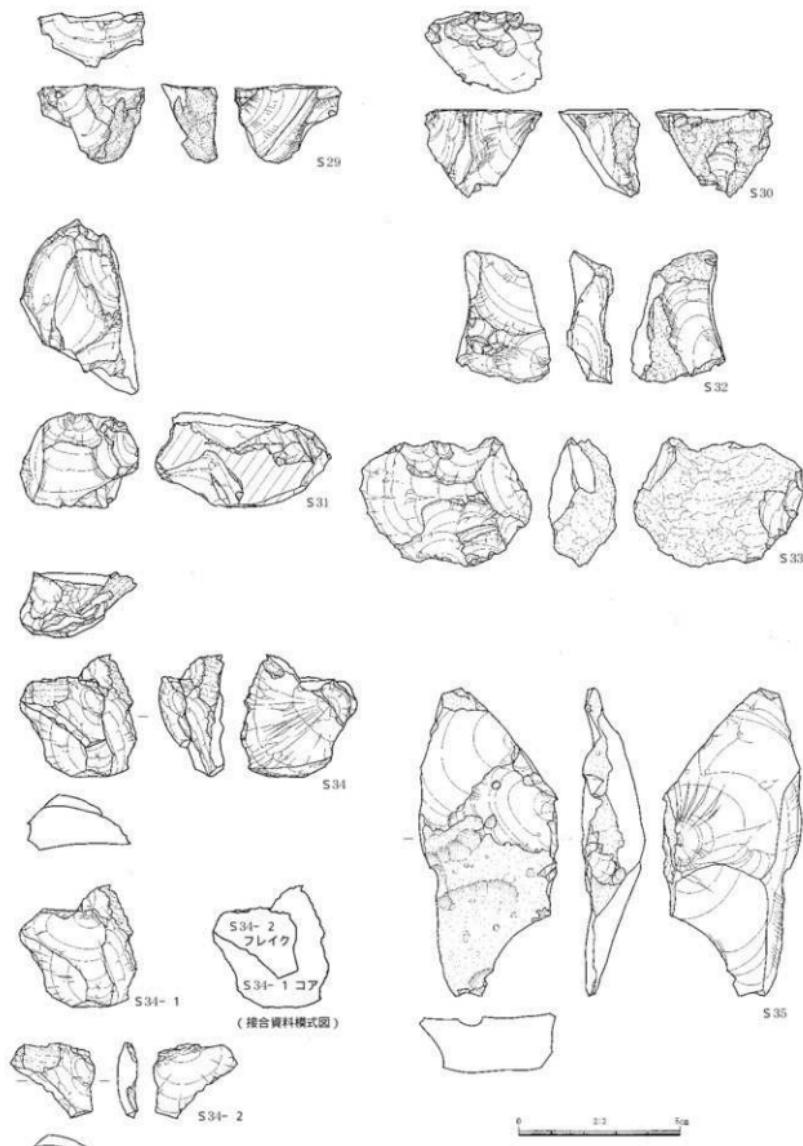


図15 石核、剥片

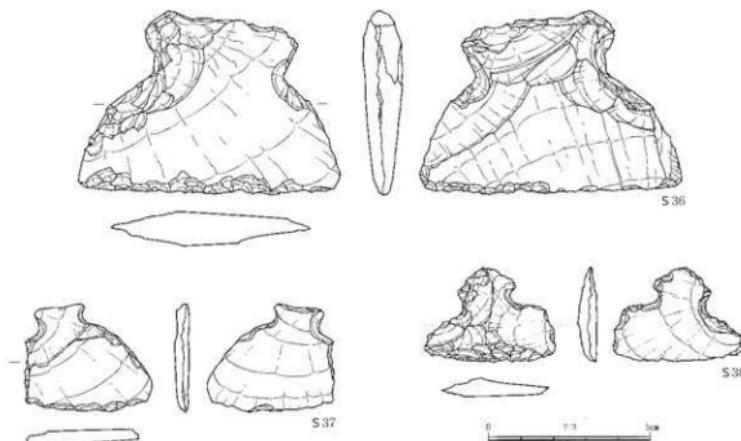


図16 石匙

遺物 番号	標図 番号	地 区 位 置	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S29	15	調査地北側 表土中	石核	黒曜石	2.4	3.25	1.7	8.7	
S30	15	不明	石核	黒曜石	2.75	3.6	2.5	17.3	
S31	15	M7 表土中	石核	黒曜石	2.9	3.65	5.4	49.5	
S32	15	N7 Ⅱ層上面	石核	黒曜石	4.1	2.9	1.4	14.6	
S33	15	L7 Ⅲ層上面	石核	黒曜石	4.0	5.2	2.1	33.9	
S34					3.8	3.6	2.0	17.3	接合資料（コア+フレイク）
S34-1					3.75	3.6	1.85	15.1	コア部
S34-2					2.2	2.6	0.6	2.2	フレイク部
S35	15	S3 Ⅷ層上面	剥片	黒曜石	4.3	9.5	1.95	60.0	
S36	16	K6 Ⅰ層	石匙	安山岩	5.7	8.1	1.2	48.6	
S37	16-35	K7 溝2埋土中	石匙	安山岩	3.3	△3.9	0.5	6.4	
S38	16	L7 P46埋土中	石匙	安山岩	2.9	4.05	0.6	0.4	

うち1点は接合資料である（S34）。いずれも不定形を呈する剥片を剥出している。原礫面の付着が大きく見られるものが多い。

S35は素材として利用しうる大型の剥片で、背面等に原礫面が大きく付着している。

S36～38は石匙で、3点出土した。S37・38は遺構からの出土であるがこの項に記載した。いずれも横型で、S36・37は平面形が三角形状を呈する。S36は両面加撃により刃部を作り出し、S37・38は片面加撃によるものである。

（加藤）

3. 弥生時代の遺構と遺物

当該期の遺構は、弥生時代終末期の竪穴住居を3棟確認した（図17 竪穴住居1～3）。うち、竪穴住居1は建て替えが為されている。また、古墳時代後期の竪穴住居を1棟（竪穴住居4）検出した。調査区中央部東側と南側にかけて検出したピット群の一部からは、埋土中から当該期や古墳時代の土器片が出土しているが、埋土の土色や掘立柱建物等遺構との対応関係が明確でないため、本節では扱わないこととする。

(加藤)

竪穴住居1（図18～20 図版1、2-1、13-1・2）

台地のほぼ中央に位置し、調査地内においてもほぼ中央、M7・8グリッドにある。表土下のII層上面で検出した。2基の竪穴住居が平面入れ子状に重複している。埋土を観察すると、内側の住居の埋土⑧層・⑩層・⑫層・⑯層が、外側の住居の埋土⑨～㉙層を切っていた。加えて、内側の住居の周壁溝が外側の住居の柱穴であるピット5を切っていた。これらのことから外側の住居の方が古く、これを竪穴住居1aとし、内側の住居を竪穴住居1bとして順に報告する。

竪穴住居1aは平面方形を呈し、長軸・短軸とも5.4m、検出面からの深さ約36cm、床面積は約21.4m²である。住居1aの床面は住居1bの掘り方に切られ、縁辺部が遺存するのみである。遺存部分はほぼ平坦であるが、地形と同様に北半部がやや低い。床面は基盤層であるV層とVI層の境界上にあり、VI層上面が露出する住居北辺を除く南側に貼床（㉖・㉗層）が施してあった。周壁下に1条の周壁溝を検出したが（㉛層）、住居北辺の一部は搅乱を受け全周しない。遺存する床面からピット1～5を検出した。ピット1・3～5はほぼ同規模で、掘り方の四隅に位置することから主柱穴に該当する。ピット1・3・4の埋土はいずれも2層に分けられ、㉙層は柱痕、㉚層は掘り方埋土に相当する。㉛層の幅から、柱材の径は12～15cmであったと考えられる。ピット5は柱材を抜き取ったものと考えられ、埋土㉛層中から桃核が出土した。桃核の出土状況は住居廃絶時の祭祀の可能性がある。いわゆる中央ピットの有無については不明である。



図17 弥生時代・古墳時代遺構分布

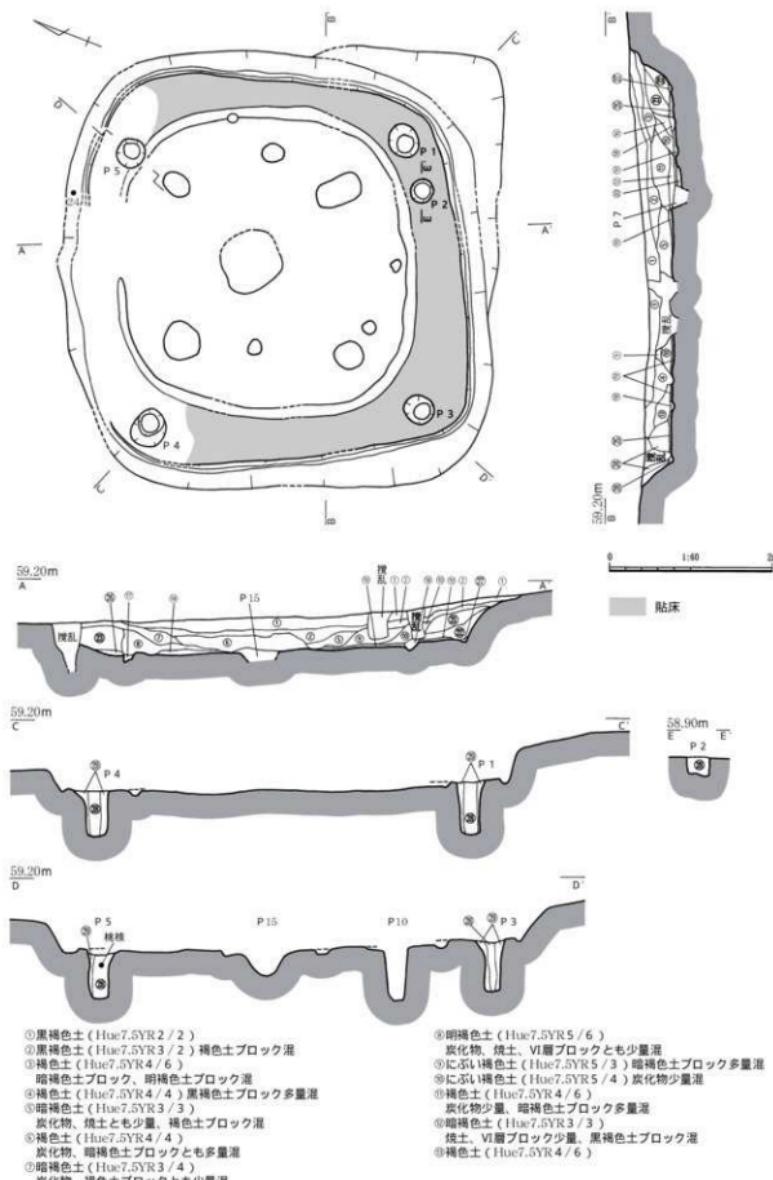


図18 壁穴住居1 (1)

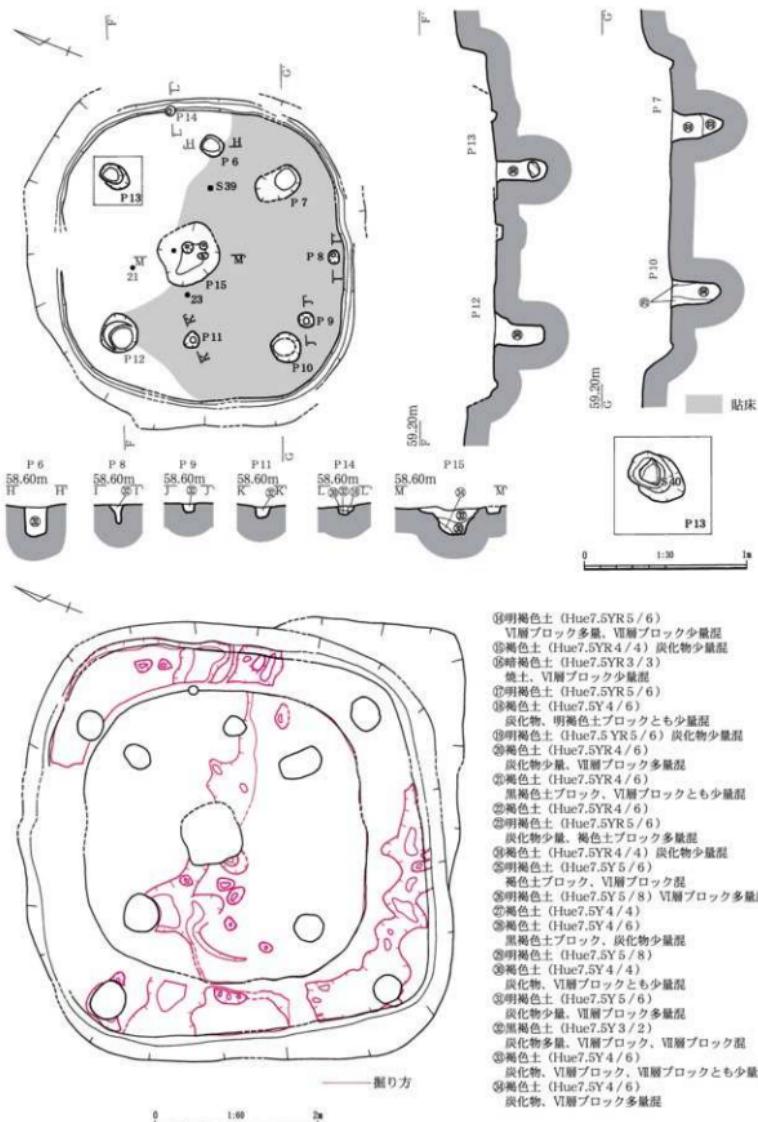


図19 積穴住居1(2)

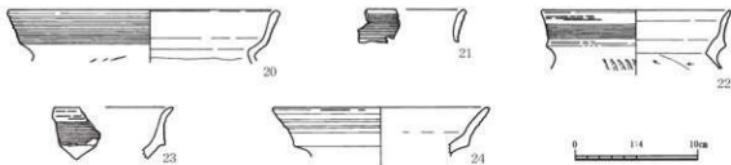


図20 壁穴住居1出土遺物

遺物番号	埋蔵番号	遺構部位	種別	器種	口径(cm) (底)	高さ (cm)	特徴	出土状況	色調	備考
20	20	壁穴住居1 床面直上	弥生	甕	* 21.0	△4.3	外面部: 口縁部平行弦文、頭部ナデ 内面部: 口縁部ナデ、頭部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	に赤い黄褐色	
21	20	壁穴住居1	弥生	-	-	△2.7	外面部: 口縁部平行弦文	砂粒少量 良	外面部: に赤い黄褐色 内面部: 浅黄褐色	
22	20	壁穴住居1 (頂部)	弥生	甕	* 15.6	△4.8	外面部: 口縁部平行弦文後ナデ 頭部-肩部ナデ、削突文 内面部: 口縁部ナデ、頭部以下ケズリ	砂粒多量 良	褐色	
23	20	壁穴住居1	弥生	-	-	△4.2	外面部: 口縁部平行弦文後ナデ、頭部ナデ 内面部: 口縁部ナデ	細砂粒、礫少量 良	に赤い黄褐色	
24	20	壁穴住居1	弥生	甕?	* 17.8	△4.0	外面部: 口縁部平行弦文後ナデ、頭部ナデ 内面部: 口縁部ナデ	細砂粒少量 良	浅黄褐色	

遺物番号	埋蔵番号	地層部位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S39	-	壁穴住居1	砾石	角閃石安山岩	11.0	9.0	5.5	641.0	図版13-2
S40	19	壁穴住居1 P13厘米±中	砾石	角閃石黒雲母安山岩	20.0	12.3	8.6	1893.0	図版13-2

壁穴住居1aの埋土は、明褐色土と褐色土に大別でき、前者は褐色土をブロック状に含むため、人為的に埋められた可能性がある。

出土した遺物は少なく、図化できたのは口縁部24のみである。24は住居の北辺壁際、いわゆる三角堆積層中で、床面からやや浮いた状態で出土した。壁穴住居1aの時期は、資料に乏しいが口縁部24の年代観から、弥生時代終末期のものと考える。

壁穴住居1bは調査当初、住居1aとの新旧関係を誤認し、周壁の全体を検出し得なかった。おそらく平面形は不整な方形で、床面の規模は長軸4.1m、短軸3.7m、検出面からの深さ40cm、床面積は約12.3m²である。住居1bの掘り方は住居1aの掘り方よりもわずかに深く穿たれていた。床面はほぼ平坦で、貼床は住居1aと同様に南側のV層上に施されており、周壁下に1条の周壁溝(17・18層)を検出した。住居北辺は攪乱を受けており、周壁溝が全周していたかどうかは不明である。床面からピット6~15を検出した。ピット7・10・12・13は住居の四隅に位置し、近似した規模であることから主柱穴に相当する。ピット7・12・13は柱痕が遺存せず、柱材を抜き取ったものと考えられる。ピット13では面をもった扁平な石(S40)が出土した。根石と考えられる。ピット10の跡層は柱痕に相当し、この幅から柱材の径は18cm前後であったと考えられる。ピット14は周壁溝の埋土を切っていた。ピット15は住居内のほぼ中央に位置し、いわゆる中央ピットに相当する。平面形は上端、下端共に不整形を呈し、底面には凹凸がある。埋土には炭が含まれるが、出土遺物は微量で機能等は不明である。

壁穴住居1bの埋土は大きく明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土に大別できる。黒褐色土①層は自然堆積である。中層以下の明褐色土、褐色土、暗褐色土は人為的に埋められた可能性がある。

遺物は少量で、図化できたのは4点である。口縁部21は床面直上で出土した。甕の口縁部22は③層から出土した。少量ながら出土した遺物の年代観から、壁穴住居1bの時期は弥生時代終末期と考え

られる。2基の住居は、時期を大きく隔てる遺物が出土していないため、時期幅はさほどないと考える。

(日置)

堅穴住居2 (図21・22 図版2-2・3、12-3・4、13-3・4、14-1・2)

調査地南東側の丘陵縁辺部緩斜面上に立地する。O・P3グリッドに位置し、I層下のV層上面で検出した。住居の東隣には近世以降に掘削されたと思われる採土坑があり、住居東側の一部が搅乱を受けて流失している。平面形はいびつな隅丸方形状を呈し、床面の規模は長軸3.4m、短軸2.8m、面積は約10.8m²で、検出面からの深さは最大で68cmを測る。

床面には南西隅を除いて貼床が施される(⑥層)。また、被熱により硬化した焼土の広がりを4箇所で確認した。ピットは総数10基を検出した。住居内の四隅付近に位置するピット1~4は径約30cm、深さ60~70cmを測り、主柱穴と考える。ピット2には柱の痕跡を確認できるが、ピット1・3・4には柱痕が遺存しておらず、抜き取られたと考えられる。ピット5は、位置から中央ピットに該当すると思われる。断面形は下端が突出する形状を呈するが、突出部分(⑧層)は根による搅乱の可能性がある。ピット6~10は褐色系の埋土をもち、いずれも浅い。深さ3cm程度の細い溝がピット5を切って北方向にのび、ピット6・8が溝を切って重複する。堅穴部内を仕切る溝の可能性を考えている。周壁溝は東側、南側で搅乱のため途切れる箇所が認められるが、本来は全周していたものと思われる。ピット11は黄褐色土を埋土に持ち、周壁溝を切っている。貼床を除去すると底面には不整な凹凸がみられ、掘り方と考えている。

堅穴部埋土のうち、①層は自然堆積と思われるが、その下に堆積する②~⑤層には基盤土・焼土ブロックが混じり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

埋土中からは少量の土器片のほか、鉄製品片(F1)が床面から浮いた状態であるが出土しており、銹化が著しいが刀子の可能性がある。床面直上では土器(25、26)、台石等の石器類(S41~43)を検出した。S42には被熱痕跡が認められる。

床面直上で出土した土器の年代観から、本遺構は弥生時代終末期に属すると考える。

(加藤)

堅穴住居3 (図23~25 図版3、14-3・4、16)

P2・3グリッドにまたがり、堅穴住居2の南東隣に位置する。I層下のV層上面で検出した。堅穴住居2と同様、近世以降の掘削と思われる採土坑により住居の北東~東側を一部失っている。また、竹等樹木の細かい根が密に埋土中に入り込み、床面にも若干その影響が及んでいる。平面形はいびつな隅丸方形状を呈し、検出面からの深さは最大で70cmを測る。床面の規模は長軸4.1m、短軸3.9m、面積は約16.8m²である。

床面にはほぼ全面に貼床が施され(⑩・⑪・⑫層)、硬化した焼土の広がりを4箇所で確認した。住居内四隅に位置するピット1~4は主柱穴であろう。埋土は部分的に根搅乱を受けているが、いずれも柱痕が遺存せず、抜き取られたと考えられる。住居中央付近検出のピット5は中央ピットに該当しよう。埋土は炭を少量含むが、搅乱のためかしまりが悪い。周壁溝は東・南側で一部途切れるが、本来は全周していた可能性が高い。床面の北東辺では周壁溝の内側約0.1mに細い溝がほぼ並行して掘られる。規模は周壁溝に近似し、堅穴部の拡張の痕跡もしくは、住居内を仕切る床溝と考えている。その他床面上では、褐色系の埋土を持ち深さ15cm程度の深いピット(ピット6~9)を検出している。

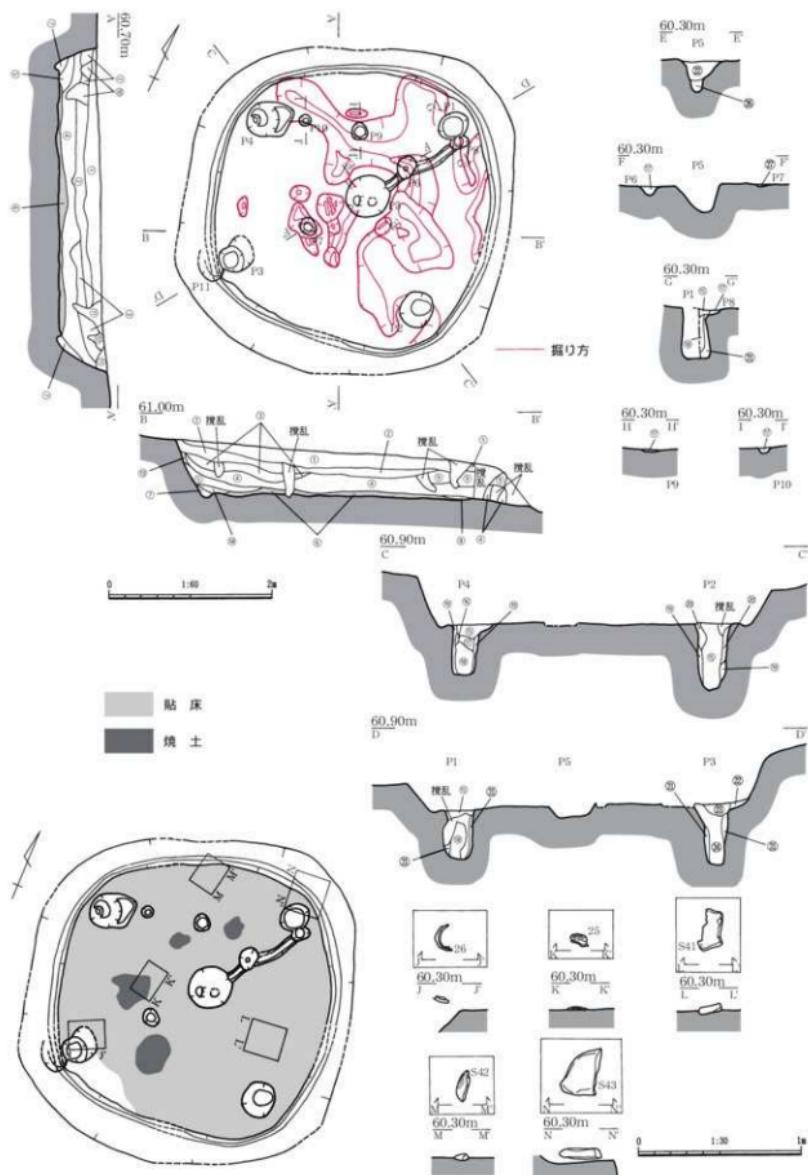


図21 積穴住居2

竪穴住居 2 の土層堆積 (図21)

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3 / 2)		15	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	VII層 ブロック、炭少量混
②	褐色土	(Hue10YR 4 / 6)	VII層 ブロック、炭少量混	16	黄褐色土	(Hue10YR 5 / 8)	粘性強
③	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 8)	VII層 ブロック、炭少量混	17	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	炭少量混
④	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 6)	炭、燒土少量混	18	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4 / 3)	炭少量混
⑤	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	炭、燒土少量混	19	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 6 / 4)	炭少量混、粘性強
⑥	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4 / 3)	炭、燒土少量混	20	黄褐色土	(Hue2.5Y 4 / 4)	炭少量混、粘性強
⑦	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4 / 5)	VII層 ブロック、炭少量混	21	橙褐色土	(Hue7.5YR 6 / 6)	炭少量混、粘性強
⑧	橙褐色土	(Hue7.5YR 7 / 6)	粘性強	22	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	VII層 ブロック、炭少量混
⑨	黄褐色土	(Hue10YR 5 / 6)	VII層 ブロック少量混	23	オーリーパ褐色土	(Hue2.5Y 4 / 6)	炭少量混
⑩	灰黄褐色土	(Hue10YR 4 / 2)		24	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4 / 3)	VII層 ブロック、炭少量混
⑪	黑褐色土	(Hue10YR 3 / 2)	炭混	25	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 6)	炭少量混
⑫	黄褐色土	(Hue10YR 5 / 6)		26	にぶい褐色土	(Hue7.5YR 5 / 4)	粘性強
⑬	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 8)	③層と類似、色調や暗	27	褐色土	(Hue10YR 4 / 4)	炭少量混
⑭	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	VII層 ブロック少量混				

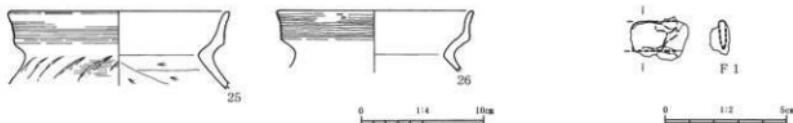


図22 竪穴住居 2 出土遺物

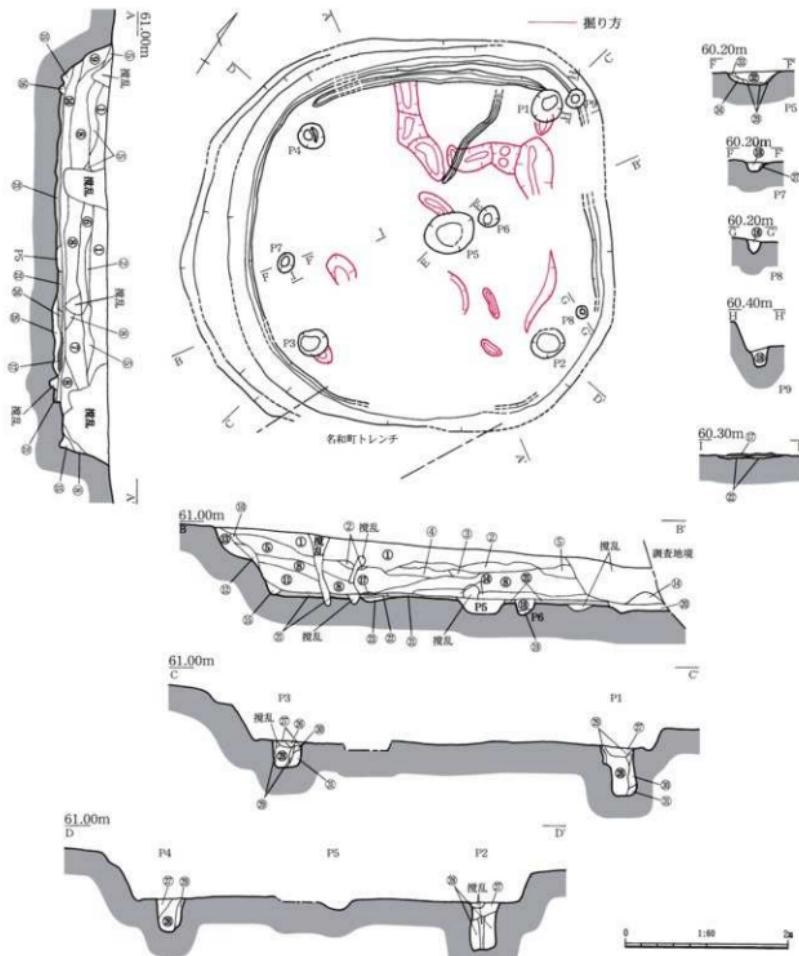
遺物番号	埋蔵番号	遺 墓 位	種別	器種	口径(cm) (底径)	器高 (cm)	特徴	粘土 焼成	色調	備考
25	22	竪穴住居 2 床底	弥生	甕	* 18.4	△6.3	外側：口縁部平行弦線文様ナメ 腹部～肩部カマドテ・輪郭文 内面：口縁部ナメ、腹部以下ケツメ	砂粒多量 良	にぶい黄褐色	粘土分析試料 7
26	22	竪穴住居 2 床底	弥生	甕	* 16.3	△5.0	外側：口縁部平行弦線文様ナメ 腹部～肩部カマドテ 内面：口縁部ナメ、腹部以下ケツメ	細砂粒・砂粒少量 良	浅黄褐色	粘土分析試料 6

遺物番号	埋蔵番号	遺 墓 位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁道度	メタル度	特徴
F 1	22	竪穴住居 2 (手前)	鉄製品(鍛造品) 刀子?	2.4	1.6	0.8	4.3	2	鈍化(△)	約1.2cm強を削る薄板状の鉄製品破片。 鋸形が進み下面から下手には酸化土沙が厚い。 刀子の刃部部分欠か。

遺物番号	埋蔵番号	地 区	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 41	21	竪穴住居 2 床底	苔石	角閃石安山岩	27.5	14.2	6.2	3595.0	図版13-4
S 42	21	竪穴住居 2 床底	不明	角閃石安山岩	19.5	7.2	5.8	940.0	被熱痕跡有り、図版13-4
S 43	21	竪穴住居 2 床底	苔石	角閃石安山岩	32.2	22.5	11.0	10500.0	図版13-4

ピット 9 は周壁溝を切っている。貼床除去後、底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。

住居の南西～北壁は二段に掘り込まれ、狭いテラス状となっている。竪穴部の埋土はテラス状部分を埋める⑬層を切って堆積していることから、竪穴掘削後テラス状の部分を程なく埋め戻し、周壁とした可能性がある。埋土下位の⑦・⑧層中では炭化材を検出した。これらの樹種同定を実施したことろ(図24 樹種同定試料1～10)、スダジイ、クリ、ヤマグワ等の結果を得た。これらの樹種は、焼失住居内で出土した住居構造材の樹種同定において頻繁にみられるもので、当地域の他遺跡でも数多く報告されている(詳細については第4章2を参照)。ただ本遺構出土の炭化材は、出土位置が床面からやや浮いていること、一般的な焼失住居と比較して出土量が少なく、周壁等に被熱した痕跡がみられないことから、埋没時に混入した可能性が高いと考えている。竪穴部埋土の堆積状況は水平に近く、人為的に埋め戻されたものであろう。竪穴部埋土上位の②～⑤層は炭や焼土が混じり、④層は焼



- ① 黒褐色土 (Hue10YR 2 / 3) 炭、燒土混
- ② 棕色土 (Hue10YR 4 / 6) 炭、燒土混
- ③ 棕色土 (Hue10YR 4 / 6) ②より炭多量混
- ④ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 炭、燒土多量混
- ⑤ にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭、燒土少量混
- ⑥ 棕色土 (Hue10YR 4 / 4) 炭、燒土ブロック混
- ⑦ オリーブ褐色土 (Hue2.5Y 4 / 6) 炭、燒土少量混
- ⑧ 黄褐色土 (Hue2.5Y 5 / 4) 炭少量混
- ⑨ 黄褐色土 (Hue10YR 5 / 8) 炭少量混
- ⑩ 明黄褐色土 (Hue10YR 6 / 6)
- ⑪ 黄褐色土 (Hue10YR 5 / 6) 炭少量混
- ⑫ 明黄褐色土 (Hue10YR 6 / 6) VI層ブロック混
- ⑬ 黄褐色土 (Hue7.5YR 7 / 8) V層翻動、炭少量混
- ⑭ 黄褐色土 (Hue2.5Y 5 / 3) 炭、燒土少量混
- ⑮ にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 周壁溝埋土
- ⑯ にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭少量混 四壁溝埋土
- ⑰ 赤褐色土 (Hue 5 YR 4 / 6) 烧土、被熱により硬化
- ⑱ にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭少量混
- ⑲ にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 3) 炭少量混
- ⑳ 明黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) VI層に類似
- ㉑ 黄褐色土 (Hue7.5YR 7 / 8) 炭、燒土少量混、粘性強 貼床
- ㉒ 明黄褐色土 (Hue10YR 7 / 6) 粘性強 貼床

図23 積穴住居3 (1)

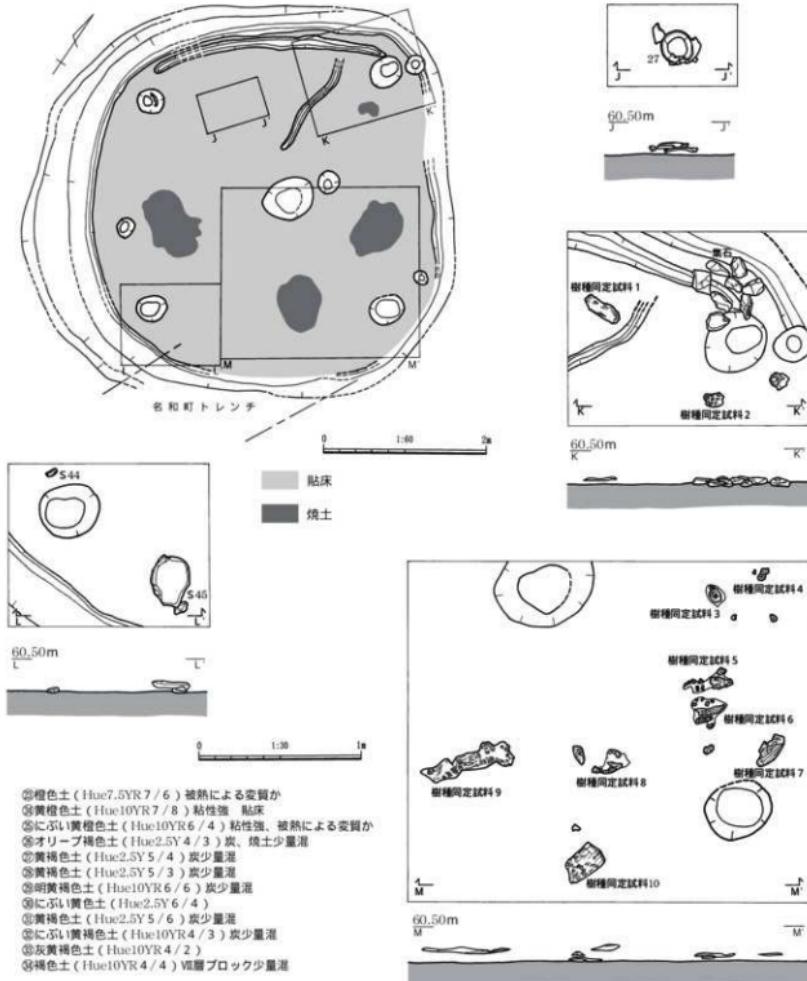


図24 穫穴住居3(2)

土ブロックを多量に包含する。自然堆積と考えられる①層が堆積する以前、本住居は廃絶後、廃棄土坑として使用されたと考えられる。

埋土上・中層からは土器片が出土しているが、床面直上出土分のみ図示した(27・28)。そのほか床面上では砥石(S44)、台石(S45)、竪穴部北東隅に集石を確認した(図24)。拳大の礫群で石材は角閃石黒雲母安山岩である。

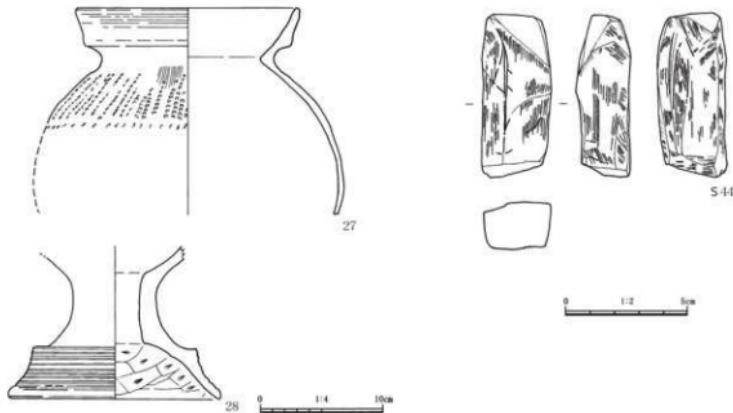


図25 竪穴住居3出土遺物

遺物番号	縄目番号	遺構部位	種別	器種	口径(cm)	標高(cm)	特徴	粘土構成	色調	備考
27	25	竪穴住居3 床底	寄生	甕	* 18.6	△16.8	外面：口縁部平行沈み文後ナデ。頭部ナデ 内部：口縁部ハケ・ナデ・刺突文	砂粒多量、礫少量 良	外面：浅黄褐色、 一部褐色 内部：に深い黄褐色	粘土分析試料10
28	25	竪穴住居3 床底	寄生	基台	* 12.5	△17.2	外面：脚柱部ナデ、脚部部平行沈み文後ナデ 内部：脚部・脚柱部ナデ、脚部部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	に深い褐色、 部分的に赤褐色 (赤色擦剥)	粘土分析試料8

遺物番号	縄目番号	地盤部位	岩種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S 44	24-25	竪穴住居3床底	磁石	粘板岩	6.7	2.95	2.35	64.0	
S 45	24	竪穴住居3床底	台石	角閃石安山岩	30.0	24.8	10.9	12500.0	図版14-4

竪穴住居4の土層堆積(図26)

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3 / 2) 炭混		⑯	に深い黄褐色土	(Hue10YR 7 / 3)	
②	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 4 / 2)		⑰	に深い黄褐色土	(Hue10YR 4 / 3)	炭、VI・VII層ブロック少量混
③	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 5 / 2)		⑯	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 6)	炭、VI・VII層ブロック少量混
④	に深い黄褐色土	(Hue10YR 6 / 4)	炭少量混	⑰	黄褐色土	(Hue10YR 5 / 8)	炭、VI層ブロック少量混
⑤	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	炭少量混	⑯	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	
⑥	明褐色土	(Hue7.5YR 5 / 6)	炭、VI層ブロック少量混	⑰	黒褐色土	(Hue10YR 3 / 3)	炭少量混
⑦	明赤褐色土	(Hue2.5YR 5 / 6)	炭、炭混	⑯	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	VII層・黄褐色土ブロック少量混
⑧	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	炭、VI層ブロック、焼土少量混	⑰	に深い黄褐色土	(Hue10YR 4 / 4)	
⑨		炭、床跡		⑯	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	
⑩	明黄褐色土	(Hue10YR 6 / 6)	炭少量、VI層ブロック多量混	⑰	黄褐色土	(Hue10YR 5 / 6)	
⑪	に深い黄褐色土	(Hue10YR 6 / 3)		⑯	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	炭、VI層ブロック少量混
⑫	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 3)	炭、焼土少量混	⑰	褐色土	(Hue10YR 4 / 4)	VII層ブロック少量混
⑬	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)		⑯	黄褐色	(Hue10YR 7 / 8)	
⑭	褐灰色土	(Hue10YR 4 / 1)	VI・VII層ブロック少量混				
⑮	に深い黄褐色土	(Hue10YR 5 / 4)	炭少量混				

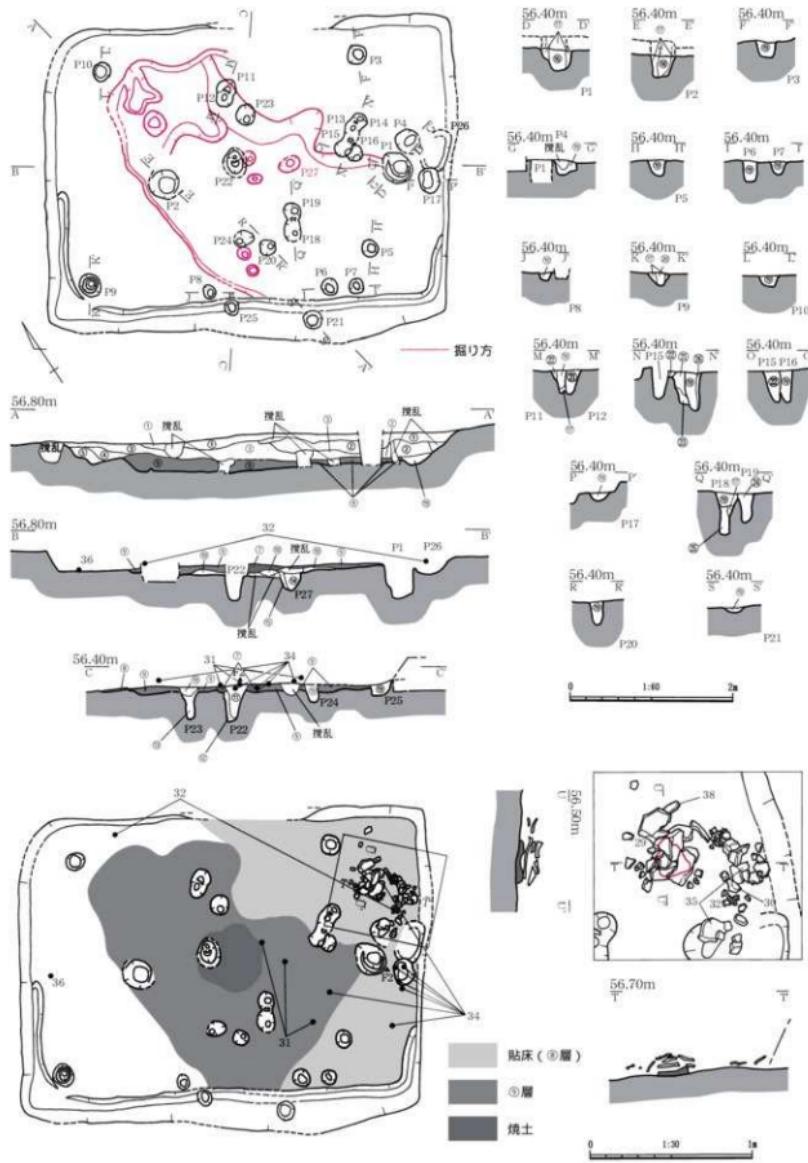


図26 竪穴住居4

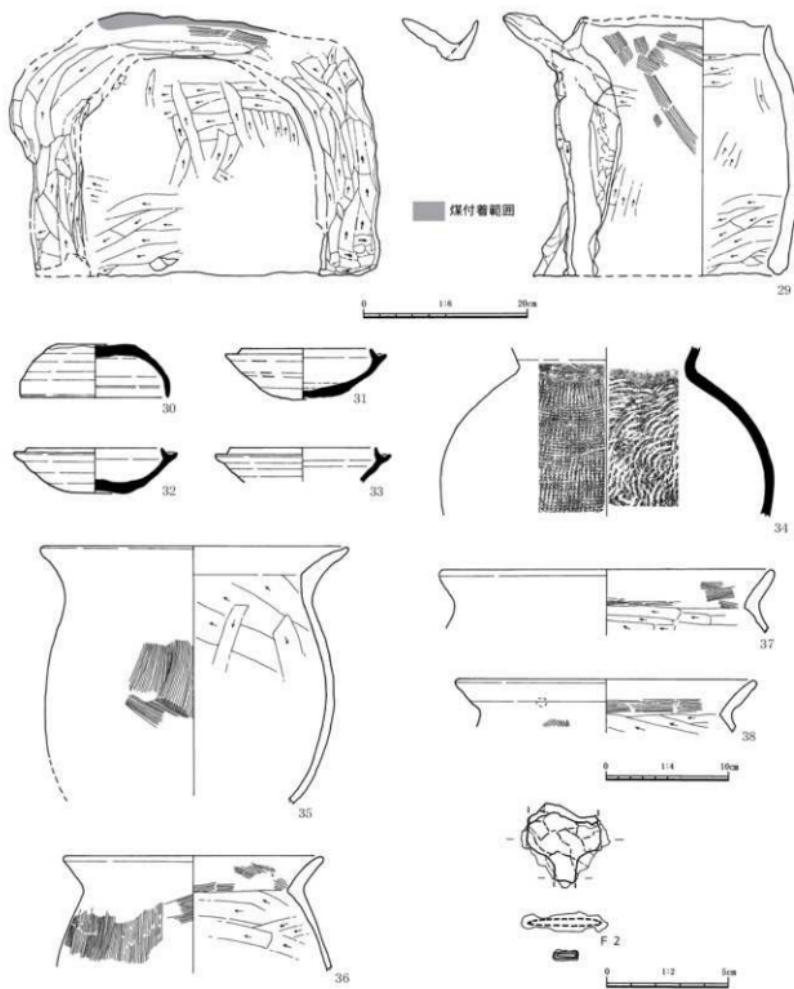


図27 竪穴住居4出土遺物

床面直上より出土した土器が示す時期から、本遺構は弥生時代終末期に属するを考える。隣接する竪穴住居2との時期差はほとんど認められないが、先後関係についてははっきりしない。

(加藤)

遺物 番号	種 類	道 構 位	種 別	器種	口徑(cm)	高 さ (cm)	特 徴	地 土 成 分	色 調	備 考
29	27	堅穴住居4 床底	土器品	移動式竈	* 24.0	33.25	底部外側：ハケナダ・ケズリ 内面：ケズリ・ナデ 底部内側：ハバ接ナダ・ケズリ、保付着面所有り 底部外側：ハケ・ナダ・ケズリ	砂粒多量 良	橙色	焚口縁に庇貼付 粘土分析試料11
30	27	堅穴住居4 床底	須恵 環甕	甕	* 12.8 (*5.5)	4.4	外面：口縁部・体面部切打ナデ 内面：口縁部・体面部切打ナデ 底部内側：天井留頭付ナデ後・不整方向ナテ	砂粒少量 良	灰黃褐色	粘土分析試料19 ロコ回転方向右
31	27	堅穴住居4 床底	須恵 环身	甕	* 11.0 (4.9)	4.1	外面：口縁部・体面部切打ナデ 内面：口縁部・体面部切打ナデ 底部内側：天井留頭付ナデ後・不整方向ナテ	砂粒少量 良	灰色	粘土分析試料18 ロコ回転方向左
32	27	堅穴住居4 床底	須恵 环身	甕	* 11.2 (*7.7)	3.7	外面：口縁部切打ナデ 内面：口縁部・体面部切打ナデ 底部内側：天井留頭付ナデ後・不整方向ナテ	砂粒少量 良	灰黃褐色	粘土分析試料16 ロコ回転方向左
33	27	堅穴住居4 床底	須恵 环身	甕	* 12.2	△3.0	外面：口縁部・体面部切打ナデ 内面：口縁部・体面部切打ナデ	砂粒少量 良	灰黃褐色	粘土分析試料17
34	27	堅穴住居4 床底	須恵 甕	甕	-	△13.8	外面：口縁部切打ナデ、体面部ナデ・タキ 内面：口縁部切打ナデ、体面部ナデ、而て麻痕	砂粒少量 良	灰褐色 内面：明灰色	粘土分析試料20
35	27	堅穴住居4 床底	土師 甕	甕	* 25.6	△22.0	外面：口縁部ナデ、脚部ナ・ナデ 内面：口縁部ナデ、脚部ナズリ	砂粒 微量	灰黃褐色 内面：にない褐色	粘土分析試料14
36	27	堅穴住居4 床底	土師 甕	甕	* 21.0	△9.4	外面：口縁部切打著しくノリ付、脚部ハケ・ナデ 内面：口縁部・ケ・ナデ、脚部ナケズリ	砂粒多量、 難少量	にない黃褐色	粘土分析試料13
37	27	堅穴住居4 土師 甕	甕	甕	* 27.2	△5.2	外面：口縁部・脚部上半強化のため不明 内面：口縁部・ケ・ナデ、脚部ナケズリ	砂粒多量、 難少量	灰黃褐色 内面：にない黃褐色 にない褐色	粘土分析試料12
38	27	堅穴住居4 床底	土師 甕	甕	* 34.2	△4.2	外面：口縁部ナデ・ユビキサギ、脚部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、脚部ケズリ	砂粒多量、 難少量	灰黃褐色 内色	粘土分析試料15

遺物 番号	道 構 位	遺物名	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	礫度	メタル度	特 徴
F 2	27	堅穴住居4 (正規)	鉄製品(鍛造品) 種、有茎三角足?	3.5	3.7	1.05	7.8	2	結化(△) 脚身部は大半が硬面で元の形狀を読みとりにくい。右側の側部はわずかに生きている可能性あり。両側の返りは失落する。

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構は堅穴住居1棟に留まる(図17)。土器片・須恵器片を表土・搅乱土中で確認したが、I層中に包含しているかどうかは判然としない。先述したように、調査地中央部東側～南側にかけて検出したピット群のいずれかは当該期に属する可能性がある。

(加藤)

堅穴住居4 (図26・27 カラー図版3・4 図版11・12)

I・J 9グリッドに位置し、表土下V層上面で検出した。平面形が長方形状を呈する堅穴住居である。床面の長軸4.7m、短軸3.5m、床面積は約16.6m²、検出面からの深さは最大で33cmを測る。住居北東部は後世に掘削された溝により削平を受け(図7)、残存状況は不良である。

床面には住居北東～東側にかけて貼床(⑧層)が施され、表面が固く締まる。中央部は一段深く掘り込まれ、基盤土に類似し若干の炭が混じる⑨層が充填され、西～西南側は基盤層(VI層)をそのまま床面としている。周壁溝は住居南側を中心に認められた。住居北半は残存状態が悪いため全周していたかどうかは不明である。ピットは多数検出され、27基を数える。埋土は概ね褐・黄褐色系土で基盤土ブロックや炭を少量包含する。他に黒褐色系土を埋土とするものを多数検出したが、断面観察から大方が根擾乱と判断し除外している。ピット1・2は共に径約35cm、床面からの深さは40cm強を測り、位置と規模から主柱穴と考えられる。いずれも柱痕が遺存している(⑩・⑪層)。また、ピット3・5・9・10は深さ15～21cmと浅いが住居四隅に位置することから、上屋構造を支える補助柱の可能性を考えている。貼床除去後の底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。貼床下ではピット27を検出している。

出土遺物は埋土上・中層から土器片が少量出土しているが、床面直上出土遺物について図示した(図26・27)。29は移動式竈である。焚口の周縁に庇を貼り付けるタイプで、底部裏側に煤の付着が確認できる。住居内北東端においてつぶれた状況で出土した。直下には硬化した焼土が遺存しており、

その厚さは約9cmである。焼土の平面的な広がりが竈の基部径とほぼ一致することから、竈の使用痕跡と思われ、竈は原位置を留めていると考える(図26中拡大図)。また、焼土位置とその周辺にかけてわずかな窪みが認められる。竈をしっかりと据えるためと推測するが、竈周辺は根攪乱の影響が認められ、明確ではないため可能性に留める。一方、住居のほぼ中央で平面形が不整な円形を呈する焼土の広がりを確認した。断面形は浅く椀状に窪み、炭混じりの焼土(⑦層)が堆積する。地床炉と思われるが、ピット22に切られている。ピット22の埋土は他のピットと同様に黄褐色系を呈するため、床面から掘り込んだものと判断した。住居を建てた後、ある段階で炉の使用を止めた可能性を考えられる。竈との併用の有無等、両者の使用について関係性が窺われるが、判然としない。竈の近辺には土師器甕(35・37・38)、須恵器甕(34)・坏蓋(30)・坏身(32)が出土しており、竈付近に置かれていたものと考えられる。また、鉄製品が一点出土し(F2)、残存状態が不良だが有茎三角式鉄鑓の可能性がある。

床面直上出土の須恵器坏蓋・坏身(30~33)は出雲編年5期、陶邑編年TK217型式に併行するとと思われ、これらの年代観から本遺構は古墳時代終末期に属すると考える。

(加藤)

奈良製鉄関連遺物調査表中の「磁着度」とは鉄滓分類用の標準磁石を用いて資料との反応を1~8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。「メタル度」とは小型金属探知機により判定された金属鉄の残留度を示し、H・M・L・特Lの4段階で表される。後者ほど残留度が高い。本遺跡竪穴住居2・4出土鉄製品はいずれも「錆化」で、金属鉄が残していなことを示す。

5. その他の遺構と遺物

調査地では前述の遺構に加えて、掘立柱建物7棟、竪穴1基、土坑15基、溝3条、多数のピットを確認した(図7・28)。多くの遺構は地山面のV層上面で検出し遺物もほとんど出土せず、時期が不明なものである。調査地中央部~南側、竪穴住居の分布域に掘立柱建物も概ね位置するが、竪穴住居



図28 その他の遺構配置

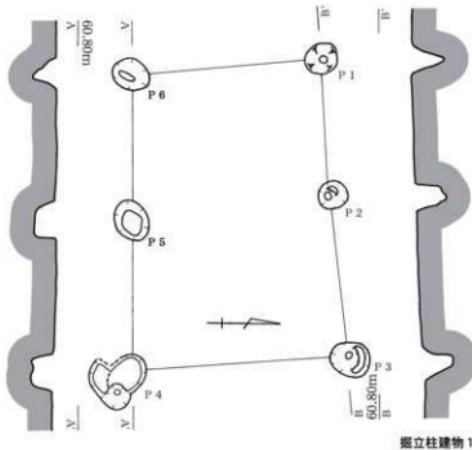
とのセット関係は不明である。製炭土坑と考えられる遺構は調査地北半に分布する。ピットは664基を確認し、調査地中央部～南側に多く分布する。柱痕が遺存しないものが大半である。ピット個々の詳細については、本節末尾に計測表を掲げているので参照されたい。

(加藤・日置)

掘立柱建物 1 (図29 図版5-1)

台地上中軸よりやや東側のM・N 5 グリッド、I層下のIII層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.5m、桁行平均2.4m、床面積は16.3m²である。方位は約3度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。なおピット4は掘立柱建物2ピット3と掘立柱建物3ピット2と重複する。図示できなかったが埋土の観察から、掘立柱建物1～掘立柱建物2～掘立柱建物3の順に建てられたと考える。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。柱穴からは遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)



掘立柱建物 2

(図29 図版5-2)

N 5 グリッドにおいて、I層下のIII層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.1m、桁行平均2.4mである。床面積は11.04m²である。方位は7度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。前述したようにピット3は、掘立柱建物1ピット4と掘立柱建物3ピット2と重複する。これらの新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色であった。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

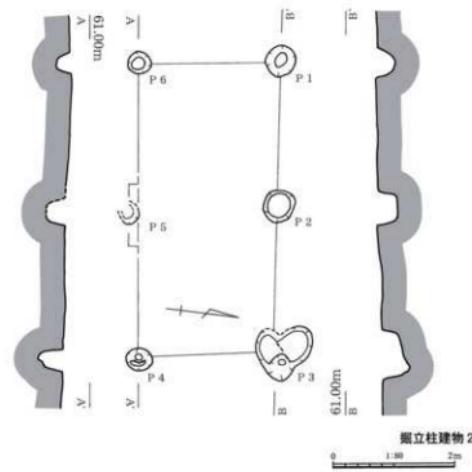


図29 掘立柱建物1・2

掘立柱建物3(図30 図版5-2)

N5グリッド、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.4m、桁行は平均2.8mである。床面積は19.3m²である。方位は42度西に傾いた南北棟である。前述のように、ピット2は掘立柱建物1ピット4と、掘立柱建物2ピット3と重複する。新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系

であった。遺物は出土しなかった。
建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物4

(図30 図版5-2)

N5グリッドにおいて、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3m、桁行平均2.4m、床面積15.8m²である。方位は32度北に傾いた東西棟である。掘立柱建物1～3と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物5

(図31 図版5-3)

台地の中軸よりやや東側、平坦に近い部分に位置する。O4グリッドにおいて、1層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.4m、桁行平均2.5mである。床面積は11.8m²である。方位は12度西に傾いた南北棟である。棟は等高線に平行する。柱穴の埋土は黒褐色系を呈する。柱穴から遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物6

(図31 図版6-1)

台地の東側に位置する。現況地形

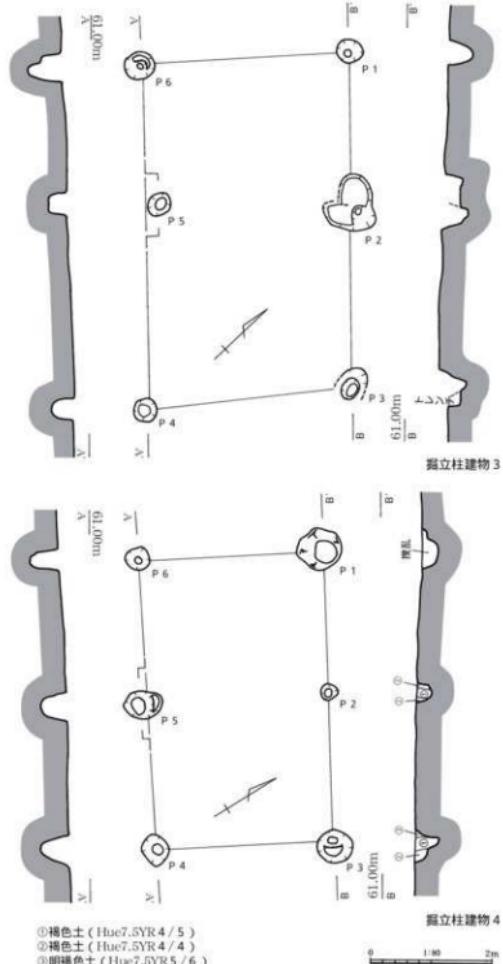


図30 掘立柱建物3・4

における縁辺に近く、堅穴住居2に隣接する。P4グリッドにおいて、I層下のV層上面で検出した。梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は、梁行平均1.4m、桁行平均1.5mである。床面積は7.5m²である。方位は30度北に傾いた東西棟である。ほかの建物に比べ、斜面に立地し、棟は等高線に対し直交する。柱穴の埋土は褐色を呈する。ピット5とピット7から弥生土器の細片が出土したが、図化できなかった。弥生時代終末期に属する建物の可能性がある。

(日置)

掘立柱建物7

(図32 図版6-2)

台地のはば中軸上に立地する。P5グリッドI層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行2.0m、桁行2.6mである。床面積は5.2m²である。方位は20度東に傾いた南北棟である。柱穴から遺物は出土せず、時期は不明である。

(日置)

堅穴1

(図33 図版6-3)

台地のはば中軸上に位置する。O・P5グリッドにおいて、I層下V層上面で検出した。上屋構造を復原できず、堅穴と呼称する。平面は不整な方形で、規模は長軸5.6m、短軸4.9mである。検出面からの深さは約24cm、床面の標高は約61.10mである。床面はVI層上面にあたり凹凸がみられる。周壁下に断続的な1条の周壁溝を検出した。この周壁溝を切るピット1を検出したが、柱痕は遺存せず、小型で位置的にも主柱穴ではない。床面にはこのほかに遺構を見出せなかった。また、掘り方の周囲でも堅穴1に伴うと推察できる柱穴や土坑は見出せず、焼土面や炭化物などの痕跡も認められなかった。

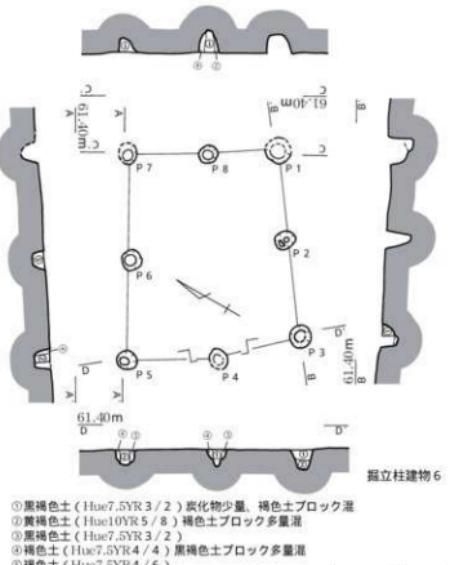
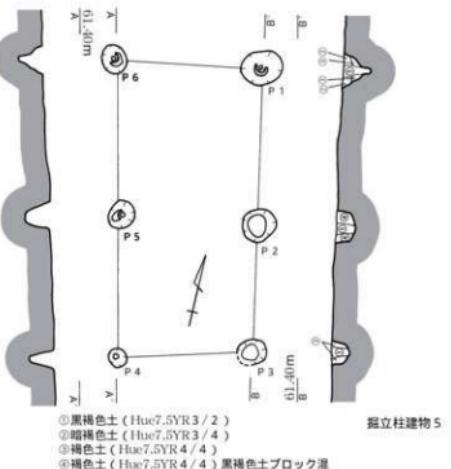


図31 掘立柱建物5・6

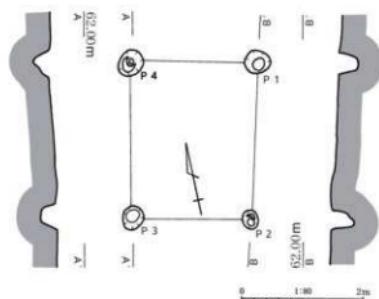


図32 掘立柱建物 7

擾乱のため境界が明確ではない。溝1が土坑16に先行すると考えられる。北西-南東方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にはほぼ直交する。幅は北西部0.8m、南東部1.0m、中央部0.6mである。底面の標高は、北西端57.7m、南東端57.8mであり、北西端がやや低い。検出面から底面までの

埋土は概ね褐色を呈し、地山土をブロック状に含むことから、人為的に埋められた可能性がある。①層は土坑と思われるが、大部分がトレンチ内にあって記録できなかった。本遺構から遺物の出土はなく、時期は不明である。

(位置)

溝1 (図34 図版7-1)

調査地中央部西側L8グリッド、標高57.9~58.1mの緩斜面上に位置し、Ⅲ層下、V層上面で検出した。北西端は土坑16に接するが、

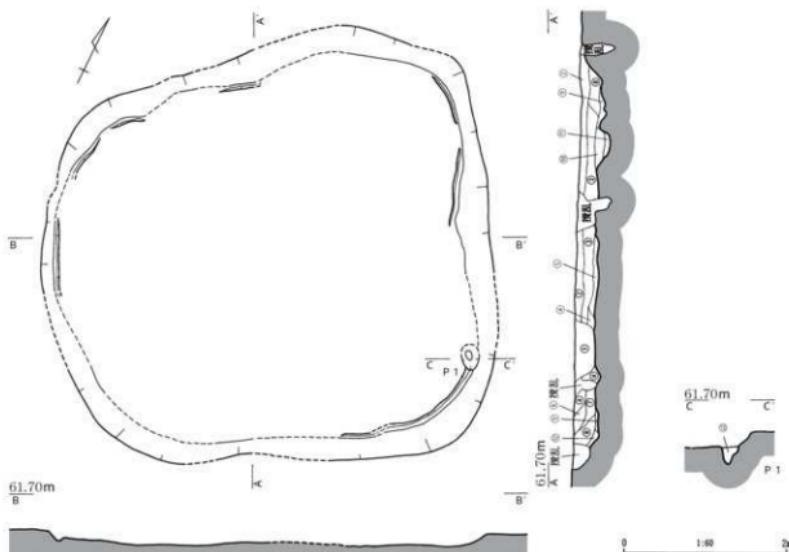


図33 豊穴 1

深さは20cmである。埋土は褐色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。

(木山)

溝2

(図16・35 図版7-2・15-3)

調査地中央部東側K 6・7グリッド、標高58.1~58.2mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出した。北東-南西方に向かって主軸をとり、平面形態は「y」字状を呈し、等高線にはほぼ平行する。幅は北東端0.3m、北西端0.3m、中央部1.1m、南西端0.8mである。底面の標高は、北東端58.1m、北西端58.0m、中央部58.0m、南西端58.1mであり、検出面から底面までの深さは10~20cmである。埋土は橙色土を主体

とし、溝3の埋土と類似している。流水の痕跡は窺えない。遺物は、安山岩を素材とする石匙(S37)が底面よりわずかに浮いた状態で出土しており、別項に図示した(図16)。土器片も出土しているが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

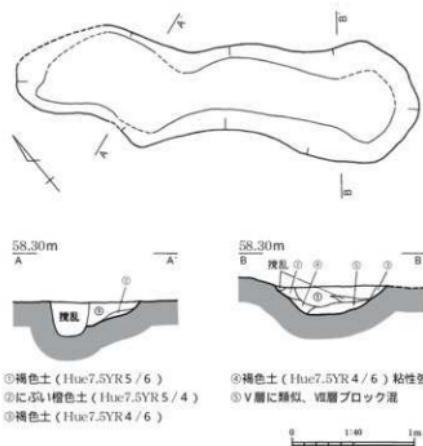


図34 溝1

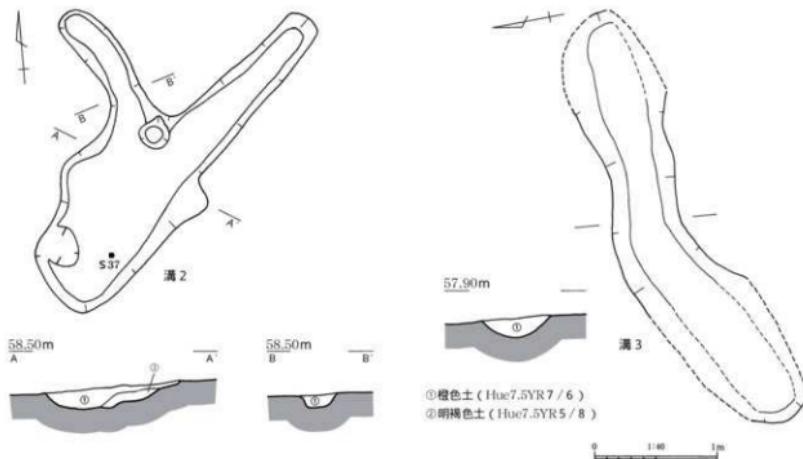


図35 溝2・3

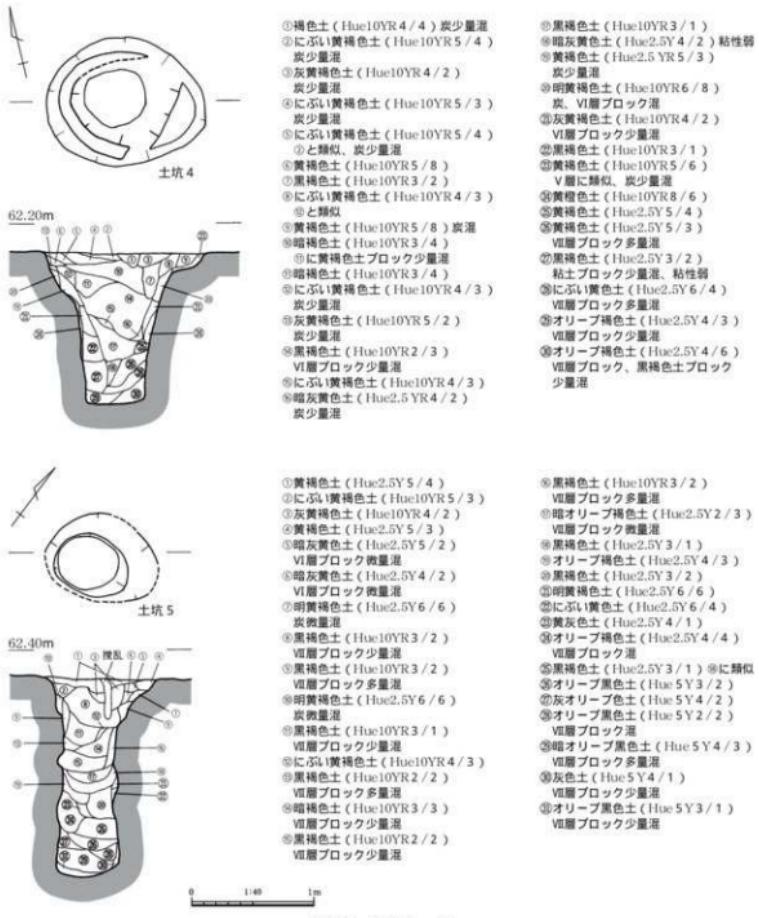


図36 土坑4・5

溝3(図35 図版7-3)

調査地中央部東側K7グリッド、標高57.6~57.7mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出し、西側部分がトレンチで切られている。南東側6mに溝2が位置している。東-西方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にほぼ平行する。幅は0.5~0.8mである。底面の標高は、東端57.6m、西端57.5mであり、西側がわずかに低い。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は橙色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物の出土はなく、造構の時期は不明である。

(木山)

土坑 4

(図36 図版8-4)

調査地南西側S4グリッド、標高62.0mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.3m、短軸1.1mの不整な楕円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、上方において開き気味に立ち上がる。底面は平坦で径0.5mのいびつな円形である。検出面から底面までの深さは120cmである。埋土上層は炭が少量混じる黄褐色系土、中層が黒褐色系土、下層が基盤層ブロックを包含する褐色系土である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落し穴の可能性がある。

(木山)

土坑 5

(図36 図版8-5)

調査地南東側S3グリッド、標高62.1mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.7mの不整な楕円形状を呈する。断面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はややくぼんだ平面径0.5mの楕円形である。検出面から底面までの深さは160cmである。埋土は黒褐色系土を主体とし、底面近くに基盤層ブロックが混じる黒色系土が堆積している。遺物は埋土上位より土器片が出土したが、残存状況が不良で、遺構の時期比定は難しい。底面にピットを持たないが、形態から落し穴であろう。

(木山)

土坑 6 (図37 図版8-6)

調査地南東側R3グリッド、標高61.9mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。南側上面部分はトレンチ内の検出である。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈すると思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はややくぼんだ平面径0.5mのいびつな楕円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は基盤層ブロックが混じる黄褐色系土を主体と

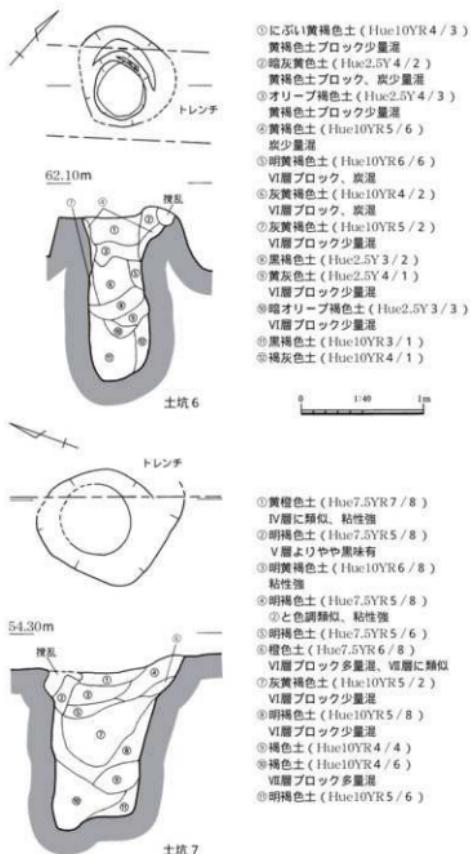
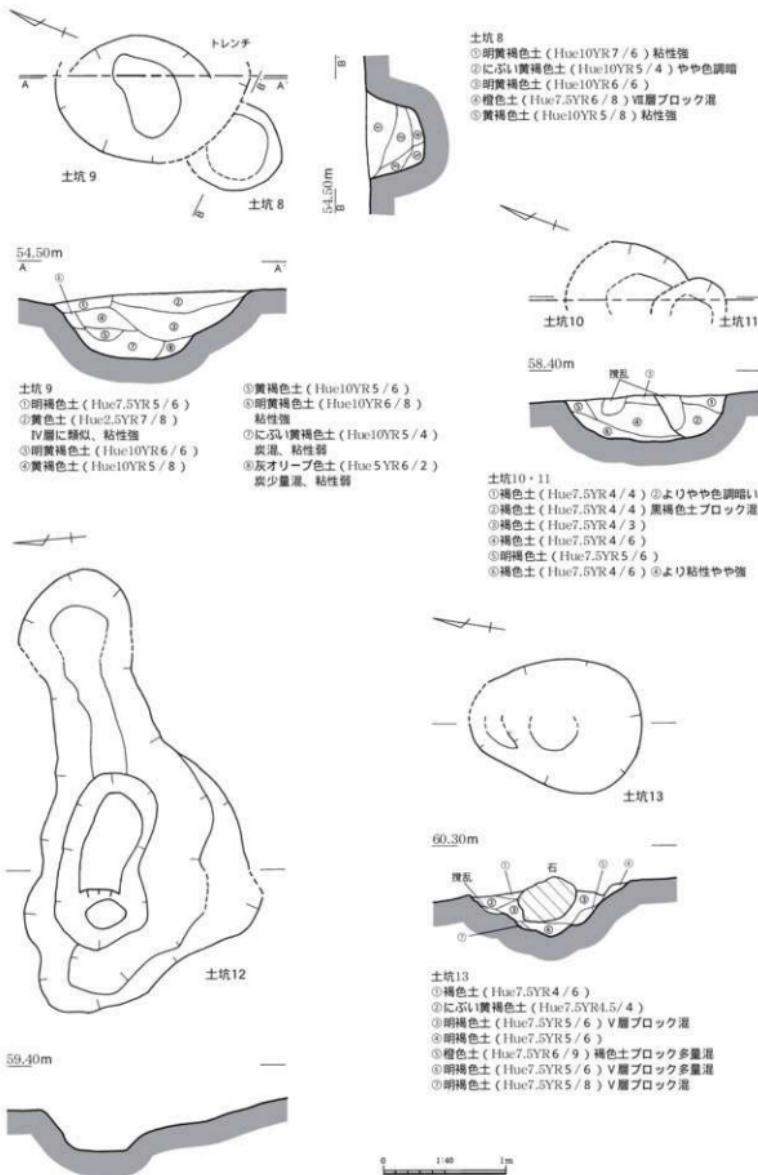


図37 土坑6・7



し、底面近くに黒褐色土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。底面にピットを持たないが、形態から落し穴と考える。

(木山)

土坑7 (図37 図版9-1)

調査地北西側F9 グリッド、標高54.1mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。北東側がトレチで切られている。平面形態は、長軸1.2mの隅丸方形と思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、上面においてやや開き気味となる。底面は北側がくぼむ径0.6mの不整な円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は上層に明褐色系土、中層に基盤層ブロックが混じる黄褐色系土、下層は基盤層ブロックが混じる褐色系土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落し穴の可能性がある。

(木山)

土坑8・9 (図38 図版9-3・4)

調査地北西側F9 グリッド、標高54.3mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。土坑8・9は重複しているが、土層断面の観察より、土坑9が土坑8を掘り込んでおり、土坑9は土坑8に後出する。また、土坑9は北東側がトレチと重複する。平面形態は土坑8が長軸0.7mの円形、土坑9が長軸1.6mの梢円形である。底面は土坑8が比較的平坦な円形、土坑9がレンズ状にくぼむ不整な梢円形である。検出面から底面までの深さは、土坑8が50cm、土坑9が60cmを測る。埋土は、土坑8・9ともに黄褐色系土を主体とし、土坑9の下層には炭が混じる。両遺構ともに出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑10・11 (図38 図版9-2)

調査地中央部東側K7 グリッド、標高58.2mの緩斜面上に位置する。III層下、V層上面で検出し、西側部分がトレチで切られている。土坑10・11は重複しているが、土坑11が土坑10を掘り込んでおり、土坑11は土坑10に後出する。平面形態は土坑10が長軸1.0mの円形、土坑11が長軸0.6mの円形を呈すると思われる。断面はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。検出面から底面までの深さはともに40cmを測る。埋土は褐色土を主体とし、土坑11には黒褐色土ブロックが混じる。遺物はいずれも土器片が出土したが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

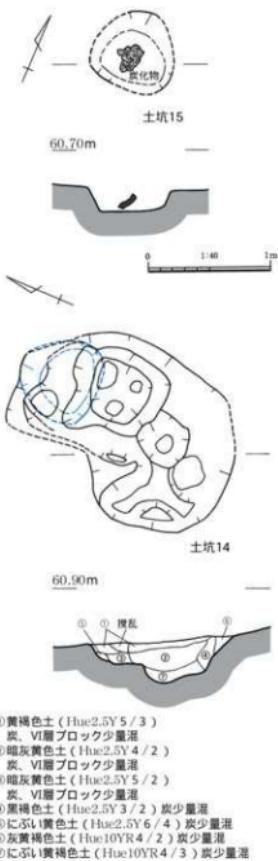


図39 土坑14・15

土坑12（図38 図版9-5）

調査地中央部西側M7グリッド、標高59.0～59.1mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出した。平面形態は長軸3.2m、短軸1.8mを測る不整形である。東側はテラス状の段を持ち、検出面から底面までの深さは40cmである。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

（木山）

土坑13（図38 図版9-6）

調査地中央部西側N6グリッド、標高59.9～60.0mの緩斜面上に位置する。Ⅱ層下、Ⅲ層上面で検出した。平面形態は、長軸1.4m、短軸1.1mの不整な楕円形である。底面は径0.4mの円形を呈するとと思われ、検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は基盤層ブロックの混じる明褐色土を主体として堆積している。縦47cm、横40cm、幅10cm、重さ25.0kgの平石が、立った状態で出土した。人為的な所作による可能性があるが、他に出土遺物はなく、遺構の性格や時期は不明である。

（木山）

土坑14・15（図39 図版10-1・2・3）

調査地中央部東側N5グリッド、標高60.3～60.5mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出した。土坑14・15は重複しており、土坑15が土坑14を掘り込み、土坑15は土坑14に後出する。土坑14は、平面形態は長軸2.0m、短軸1.4mの不整形、西側に1段テラスをもち、中心よりやや北東部を最深部として、レンズ状にくぼむ。検出面から底面までの深さは60cmである。埋土は炭が混じる暗灰黄色土を主体として堆積し、上層では基盤層ブロックが混じる。出土遺物はない。土坑15は、平面形態は径0.7mの不整な円形、底面は長軸0.5m、短軸0.4mの不整形の楕円形を呈するとと思われる。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は焼土と炭を含んだ褐色土が堆積し、中央付近で底部から少し浮いた状態で炭化材が出土した。土器片が出土したもののが残存状況が不良なため、遺構の時期は比定できなかった。

（木山）

土坑16（図40 図版10-4）

調査地中央部西側K8グリッド、標高57.9mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.8m、短軸1.5mの不整な隅丸方形形状を呈する。底面は長軸1.1m、短軸1.0mの隅丸方形で比較的平坦である。検出面から底面までの深さは40cmである。埋土は全体的に炭化物、焼土を含み、特に底面に炭化物・焼土を多量に包含する層（⑪層）がある。南・北・東壁面と底面は被熱しており、焼土塊が認められた。炭化物層（⑪層）には根が入り込み、搅乱を受けている。遺物は埋土中から弥生時代終末期の土器片と黒曜石の剥片が出土しているが、流入の可能性が高く、遺構の時期は特定できない。本遺構は諸特徴から、製炭土坑であろう。

（木山）

土坑17（図40 図版10-5）

調査地中央部北西側H8グリッド、標高55.7mの緩斜面上に位置する。表土下、V層上面で検出した。中央部がトレチで切られている。平面形態は、長軸1.7m、短軸1.3mの不整な楕円形で、底面は長軸1.1m、短軸1.0mのいびつな隅丸方形形状を呈する。検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は全体的に炭塊を含んでおり、根による搅乱を強く受ける。底部に炭化物を多量に含む層（⑧・⑨層）が堆積し、東・西壁面には被熱痕跡が認められた。底部より直径3.5cm、長さ10cm程度の炭化

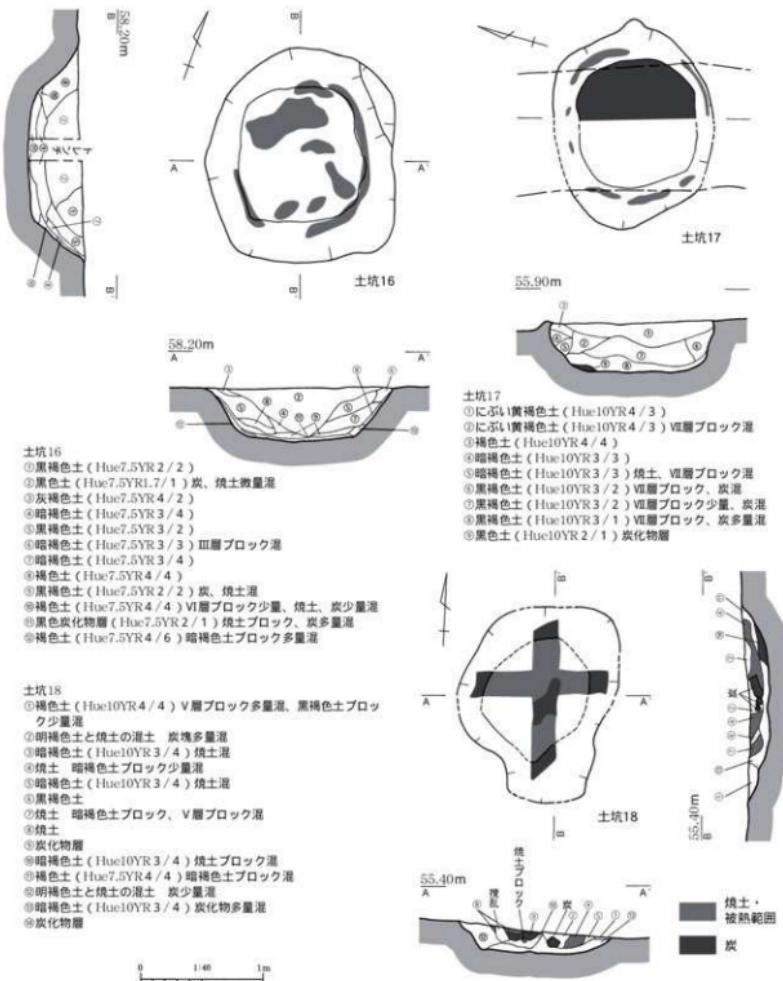


図40 土坑16・17・18

物が多数出土したが、他に出土遺物は認められず、遺構の時期は不明である。本遺構は諸特徴から、製炭土坑と考えられる。

(木山)

土坑18(図40 図版10-6)

調査地北東部側F6グリッド、標高55.1mの緩斜面上に位置する。表土下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.6m、短軸1.3mの不整な梢円形状を呈する。断面は緩やかに立ち上がり、底面は

長軸0.8mのいびつな楕円形で、検出面から底面までの深さは30cmである。埋土は全体的に炭と焼土を多量に含み、土坑中央の埋土上層に焼土塊が広がり、下層に炭化物を多く含む層(13・14層)が堆積している。土器等の出土遺物はなく遺構の時期は不明であるが、南側の凸部は焚口と考えられ、製炭土坑であろう。

(木山)

遺構外出土石器(図41・42 図版15-2)

本項では用途不明の石器を含め、12点を図示した。

S 46～S 53は石錘である。いずれも円礫を使用し、S 46～S 52は長軸両端を打ち欠く打欠石錘である。S 53は切目石錘に該当すると思われ、長軸両端の打ち欠きに加え、切り込みを入れている。本遺跡出土の石錘の重量は66.5g～143gで、200gを超える大型のものは出土していない。

S 54は砥石で長石斑岩の角礫を用いており、片面に平滑面が認められる。S 55は磨石で、円礫の片

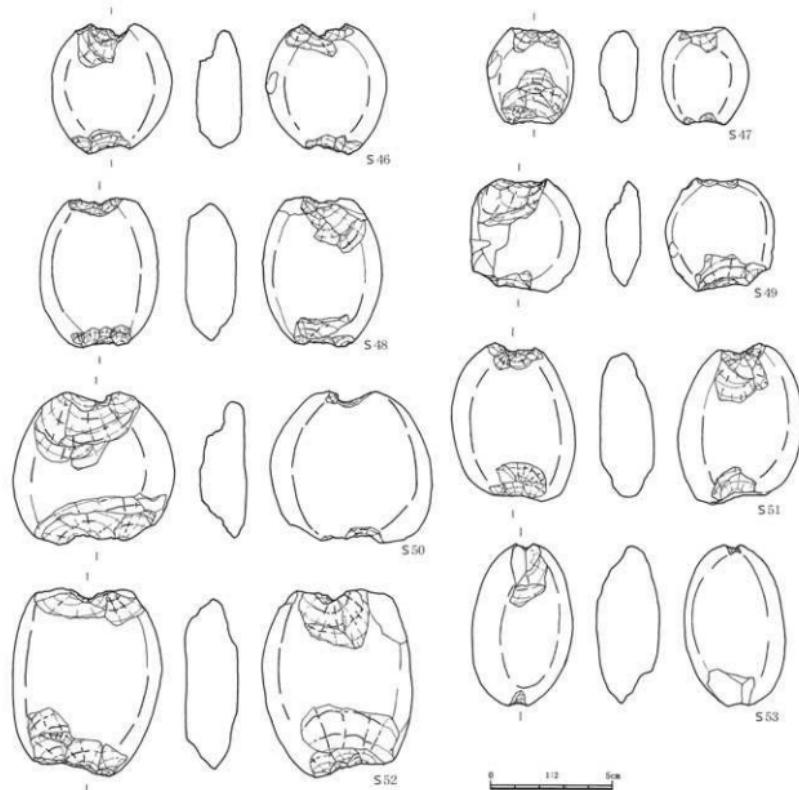


図41 遺構外出土石器(1)

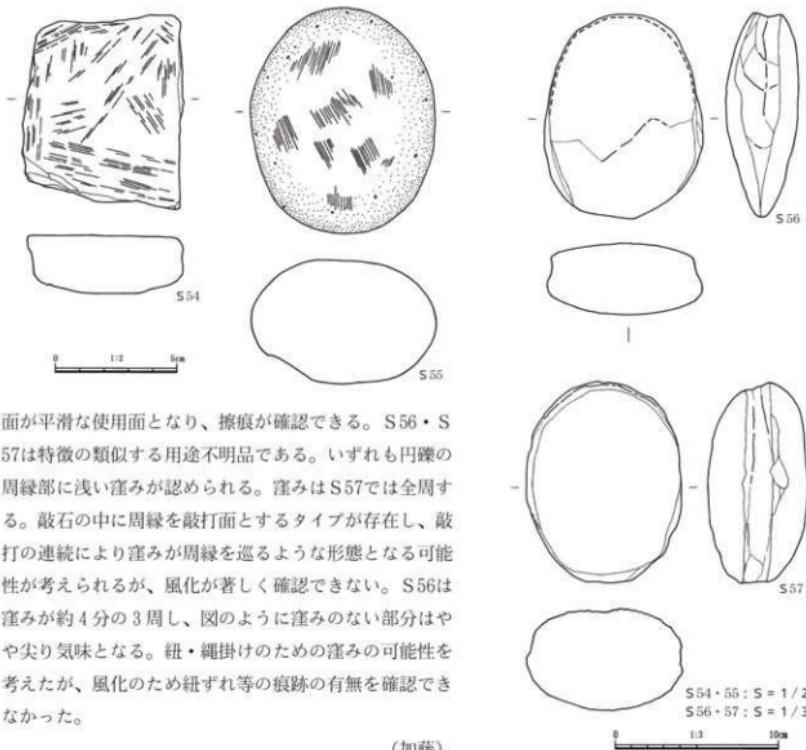


図42 遺構出土石器（2）

遺物 番号	標図 番号	地 区 位	目種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S46	41	I 10 表土下	石鍬	安山岩	5.3	4.95	1.85	66.5	円礫長軸の両端打欠
S47	41	H 9 表土中	石鍬	安山岩	3.95	3.55	1.6	32.4	円礫長軸の両端打欠
S48	41	G 7 V型上面	石鍬	安山岩	6.15	4.9	2.1	92.0	円礫長軸の両端打欠
S49	41	F 10 表土下	石鍬	安山岩	4.6	4.5	1.5	35.0	円礫長軸の両端打欠
S50	41	I 9 表土下	石鍬	安山岩	6.2	6.6	1.9	91.5	円礫長軸の両端打欠
S51	41	R 3 I 縫	石鍬	安山岩	6.5	5.1	2.15	94.5	円礫長軸の両端打欠
S52	41	F 8 表土下	石鍬	安山岩	7.7	6.1	2.2	143.0	円礫長軸の両端打欠
S53	41	G 7 表土下	石鍬	角閃石安山岩	6.6	4.1	2.6	94.0	円礫長軸の両端打欠・切込
S54	42	I 9 表土下	砥石	長石斑岩	7.9	6.7	2.5	209.0	
S55	42	F 8 表土下	磨石	安山岩	9.3	7.6	5.1	480.0	
S56	42	J 9 表土下	不明	安山岩	12.7	9.9	4.5	536.0	
S57	42	L 7 I 縫	不明	粗粒安山岩	12.5	9.7	6.3	849.0	

ピット計測表

No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
1	D 8	30	26	43	①		84	N 6	35	33	37	①		156	N 5	48	47	55	①	掘立柱建物 3 P 6
2	D 8	30	25	71	①		85	N 5	43	42	36	①		157	N 6	58	—	47	①	
3	D 8	30	28	29	①		86	N 5	64	45	44	①	掘立柱建物 4 P 5	158	N 5	55	59	34	①	
4	D 8	40	40	15	①		87	N 5	44	40	44	①		159	M 4	44	43	30	①	
5	D-E 8	50	43	25	①		88	M 5	52	44	52	①		160	M 4	70	45	33	①	
6	D 8	45	45	15	①	V面ブロック裏	89	N 5	37	36	50	①		161	M 5	53	48	40	①	
7	E 8	60	40	41	①		90	N 6	40	37	53	①		162	O 5	49	34	30	①	
8	E 8	53	45	21	①	V面ブロック裏	91	N 5	31	30	35	①		163	N 6	31	30	43	①	
9	E 8	40	35	42	①		92	N 5	30	30	33	①		164	M 4	59	42	46	①	
11	E 8	40	—	17	①		93	N 5	35	30	29	①		165	N 5	59	37	38	①	
12	E 8	45	—	21	①		94	N 5	50	45	48	①	掘立柱建物 4 P 4	166	M 4	48	44	39	①	
13	D 8	35	26	11	①		95	N 5	48	40	41	①	土器片	167	M 4	50	48	32	①	
14	E 8	40	28	19	①		96	N 5	33	33	31	①		168	N 5	42	39	24	①	
15	D 8	45	—	22	①		97	M 5	40	30	37	①		169	N 6	45	42	44	①	
16	D 8	30	22	36	①	V面ブロック裏	98	N 5	33	33	31	①		170	N 6	31	28	28	①	V面ブロック裏
17	F 8	42	40	20	①		99	N 5	45	35	36	①		171	N 5	37	35	38	①	
18	E 7	35	26	25	②	V面ブロック裏	100	N 5	40	37	39	①	掘立柱建物 3 P 4	172	N 5	26	23	34	①	
19	E 7	40	36	15	④		101	N 5	40	37	39	①		173	N 5	62	45	53	①	
20	E 6	42	35	20	⑤		102	N 5	40	37	39	①		174	N 5	70	59	44	①	
21	E 6	55	40	22	②		103	N 5	40	38	40	①		175	N 5	57	50	32	①	
22	E 7	73	55	16	①		104	N 4	40	34	35	①		176	N 5	32	30	22	①	
23	E 7	60	50	19	①	瓶か	105	N 4	50	40	47	①		177	M 4	33	30	39	①	
24	E 6	55	43	26	④	焼土塊裏	106	N 4	80	72	38	①		178	N 5	30	—	37	①	
25	E 7	56	54	31	①		107	N 6	32	28	27	①		179	N 5	30	—	25	①	
26	E 7	45	38	20	③	瓶か	108	N 6	38	35	54	①		180	N 4	44	35	37	①	
27	E 7	28	22	14	①		109	N 5	42	45	47	①		181	N 5	49	37	41	①	
28	E 7	56	38	18	①		110	N 5	40	38	49	①		182	N 5	49	37	53	①	
29	E 7	47	42	18	①		111	N 4	43	42	36	①	土器片	183	N 6	32	36	36	①	
30	E 7	55	48	29	①		112	N 4	67	47	55	①	焼土塊裏	184	N 5	45	35	32	①	
32	E 8	35	35	18	⑤	V面ブロック裏	113	N 5	40	38	49	①	掘立柱建物 4 P 6	185	N 5	33	27	42	①	
33	E 8	45	36	11	①	粘性弱	114	N 4	40	35	45	①		186	N 5	32	—	32	⑤	掘立柱建物 2 P 5
34	F 6	50	35	20	④	V面ブロック裏、 鶴文土器	115	N 4	52	45	45	①		187	N 5	37	35	41	①	
35	F 6	34	26	30	⑤	瓶か	116	N 5	39	33	32	①		188	N 5	35	36	44	①	
36	D-E 8	22	26	19	①		117	N 3	55	41	54	①		189	N 5	45	49	38	①	
37	F 7	45	—	29	②	P29+2切ら	118	O 4	48	49	48	①		190	N 5	62	26	32	①	V面ブロック裏
38	F 6	35	36	17	②	瓶か	119	O 4	45	49	40	①		191	N 5	48	37	36	①	
39	F 7	30	—	15	④	P47に切られる	120	O 4	36	30	41	①		192	N 4	63	53	29	①	
40	D 7	35	25	19	⑥	焼土塊裏	121	O 4	36	30	41	①		193	N 5	35	35	24	①	
41	G 6	25	—	15	③		122	O 5	30	31	41	②		194	N 5	60	45	37	①	
42	G 6	45	—	15	④	P41に切られる、 土器	123	O 4	48	40	46	①	掘立柱建物 5 P 5	195	N 4	55	—	52	①	V面ブロック裏
43	G 6	40	37	16	①		124	O 4	32	29	41	①	掘立柱建物 5 P 4	196	O 5	55	59	39	①	V面ブロック裏
44	G 6	67	61	23	②		125	O 4	30	30	42	①	掘立柱建物 5 P 5	197	O 4	60	54	45	①	
45	E 9	52	—	27	③		126	O 4	32	29	41	①	掘立柱建物 5 P 6	198	O 5	36	36	42	①	
46	F 9+10	61	50	46	③		127	O 4	50	38	40	①	土器片	199	N 5	31	27	43	①	掘立柱建物 5 P 5
47	F 9	55	45	36	②	瓶か	128	N 5	45	—	43	①	掘立柱建物 3 P 5	201	O 4	55	50	32	①	
48	F 9	50	55	19	③	V面ブロック裏	129	N 5	50	35	24	①	掘立柱建物 1 P 5	202	N 4	40	32	24	①	
49	G 10	45	33	19	③		130	N 5	70	55	39	①	掘立柱建物 1 P 4	203	N 4	44	38	37	①	
50	G 9	26	25	14	③		131	M 5	65	55	45	①	掘立柱建物 1 P 5	204	N 4	49	35	36	①	
51	G 9	42	27	20	③		132	N 5	45	45	31	①	土器片	205	N 3	75	79	45	①	
52	G 9	39	36	60	③		133	N 5	43	36	41	①	掘立柱建物 2 P 5	206	N 4	45	49	42	①	
53	J 8	62	39	19	①	瓶か、 生糞土塊	134	N 4	53	45	43	①	土器片	207	M 4	42	33	39	①	V面ブロック裏
54	J 8	35	32	40	③	瓶か	135	O 4	55	55	46	①	土器片	208	N 4	72	—	44	①	V面ブロック裏
55	J 8	45	40	42	③	瓶か	136	O 4	52	—	46	①	土器片	209	N 4	45	—	37	①	
56	J 8	24	25	27	③		137	N 5	41	40	45	①	土器片	210	M 6	42	36	38	①	
57	M 4	53	37	37	①		138	M-N 6	55	50	48	①	土器片	211	L 7	36	28	33	①	
58	M 5	52	50	50	①		139	O 4	52	—	46	①	土器片	212	O 4	43	42	22	①	土器片
59	M 7	30	36	49	①		140	N 4	55	50	39	①	土器片	213	O 4	54	—	60	①	
60	M 8	34	32	34	①		141	N 3	38	37	38	①	土器片	214	M-N 5	35	30	44	①	
61	M 7	52	50	50	①		142	P 4	45	45	16	①	土器片	215	M-N 6	82	74	37	①	
62	M 5	48	46	53	②		143	P 4	55	52	55	①	土器片	216	O 5	42	38	33	①	
63	M 7	67	55	44	①		144	N 3+4	43	33	36	①	掘立柱建物 5 P 1、 土器片	217	L 7	36	28	33	①	
64	M 7	30	26	49	①		145	O 4	70	55	50	①	掘立柱建物 5 P 1、 土器片	218	L 7	36	34	57	①	
65	M 7	30	—	49	①		146	N 5	53	50	34	①	掘立柱建物 2 P 5 1、 土器片	219	L 7	42	33	55	①	
66	M 8	34	32	34	①		147	O 4	48	40	28	①	掘立柱建物 5 P 3、 土器片	220	L 7	45	38	33	①	
67	M+N 5	52	50	50	①		148	O 4	52	45	30	①	掘立柱建物 5 P 3、 土器片	221	L 7	27	28	28	①	V面ブロック裏
68	N 4	30	30	53	①		149	N 6	48	—	40	①	土器片	222	M 7	37	32	57	①	
69	N 5	60	56	36	①		150	M 6	44	42	35	①	土器片	223	M 7	55	32	29	①	
70	N 5	40	40	54	①		151	M 5	55	55	42	①	土器片	224	M 7	55	32	29	①	
71	N 5	40	40	42	①		152	M 5	55	55	42	①	土器片	225	M 7	20	19	14	①	
72	M+N 4	40	57	61	①		153	M 4	42	37	31	①	土器片	226	M 7	65	65	63	①	
73	N 4	30	30	53	①		154	M 4	43	38	34	①	土器片	227	M 7	35	33	53	①	
74	N 5	60	56	36	①		155	N 5	35	30	24	①	土器片	228	N 7	34	34	38	④	
75	N 5	40	40	54	①		156	N 6	48	—	40	①	土器片	229	N 7	33	32	34	①	
76	N 6	43	42	37	①		157	N 6	70	—	56	①	土器片	230	N 7	33	32	34	①	
77	N 5	90	88	53	①	解立柱建物 I P 4 3、解立柱建物 I P 2、 解立柱建物 I P 3	158	O 4	48	40	28	①	解立柱建物 5 P 1、 土器片	231	M 5+6	62	—	58	①	
78	N 4	52	40	39	①	土器片	159	N 6	70	—	56	①	土器片	232	M 5	82	65	36	①	
79	N 4	55	47	53	①		160	M 6	44	42	35	①	土器片	233	M 5	62	57	45	①	
80	N 6	50	45	52	①		161	M 5	55	55	42									

No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
238	L 5	27	25	39	①		320	L 6	60	60	37	①		406	N 7	40	35	35	①	土器片
239	L 5	52	40	44	①		321	M 6	40	38	24	①		410	K 7	35	39	49	①	
240	L 5	42	36	54	①		322	M 6	36	35	36	①		411	N 7	53	34	39	①	
241	L 5	36	35	49	①		323	M 6	36	35	48	①		412	N 7	28	26	31	①	
242	L 5	47	44	68	① 石		324	M 6	39	37	41	①		413	N 6	43	39	39	①	
243	L 5	49	35	28	①		325	M 6	39	38	49	①	土器片	414	N 7	52	27	31	①	
244	L 5	42	32	43	①		326	M 6	36	30	59	①		415	N 7	57	35	39	①	
245	L 5	31	—	40	①		327	M 6	40	39	49	①		416	N 7	49	36	45	①	
246	L 5	7	21	—	44	⑤ 廃少量層	328	M 6	44	41	27	①		417	N 7	13	39	39	①	
248	N 5	40	35	30	①		329	M 6	39	37	33	①	土器片、灰	418	N 7	49	49	44	①	
249	N 5	53	49	44	①		330	M 6	36	36	43	①	⑤ブロック層	419	N 7	45	35	49	①	
250	M 5	87	76	42	①		331	L+M 6	65	—	26	①		420	N 7	40	35	35	①	
251	M 6	50	41	41	①		332	L+M 6	32	—	37	①	⑤ ブロック層	422	O 6	32	39	31	①	土器片
252	M 6	31	—	50	①		333	L+M 6	42	—	32	①		423	O 5	51	—	25	①	
253	M 6	25	25	31	①		334	M 6	40	—	43	①	P335に切られる、 ⑥ブロック層	424	O 5	29	37	47	①	⑤ブロック層
254	M 6	56	38	69	①		335	M 6	34	—	46	①	P334を切る、 ⑥ブロック層	425	P 4	35	39	34	①	⑤ブロック層
255	M 6	45	42	45	①	細か、⑥ブロッ ク層	336	L+M 6	60	48	38	①		426	P 5	36	36	25	①	⑤ブロック層
256	M 6	32	32	35	①		337	L+M 6	53	50	48	①	⑥ブロック層	427	P 4	33	27	27	①	⑥ブロック層
257	M 6	36	30	35	①		338	L 6	33	32	50	①	⑦ブロック層	428	P 4	28	27	27	①	⑦ブロック層
258	M 6	51	47	34	①		341	L 6	40	40	51	①	⑥ブロック層	429	P 4	33	—	39	①	
259	M 6	50	—	44	①		342	L 6	37	35	35	①	⑥ブロック層	430	P 4	28	24	24	①	
260	M 5	48	48	—	40	① P373に切られる	339	L 6	67	61	54	①		431	P 4	28	27	27	①	土器片
261	M 5	62	55	41	①		340	L 6	40	40	51	①		432	P 4	30	31	31	①	⑤ブロック層
262	M 5	50	37	39	①	④ 捕立柱建物 2 P	342	L 6	40	35	55	①		433	O 4	25	26	19	①	
263	M 5	55	50	33	②		343	L 6	41	40	52	①	⑥ブロック層	434	O 4	44	35	35	①	土器片
264	M 6	46	—	33	①		344	L 6	34	38	53	①		435	O 4	52	51	59	①	
265	M 5	34	34	26	①		345	L 6	32	29	43	①	土器片	436	P 4	45	37	40	①	
266	M 5	87	—	36	① P271に切られる		346	L 6	41	40	51	①	土器片	437	P 4	42	36	46	①	
267	M 5	36	25	27	①		347	L 6	34	34	51	①	P215、P363と切 りあり、⑥ブロッ ク層	438	P 4	41	35	38	①	
268	M 5	47	43	45	①		348	N 4+5	55	55	44	①		439	P 3+4	38	38	32	①	擬立柱建物 6 P
269	M 5	67	57	24	⑤ ⑥ブロック層		349	L 5	87	80	41	①		440	P 4	22	—	42	①	P452に切られる、 ⑥ブロック層
270	M 5	47	43	37	⑤ VI期ブロック層		350	M 4	38	27	38	①		441	P 4	25	—	39	①	P451を切る、⑥ ブロック層
271	M 5	77	60	27	①		351	L 7	32	30	41	—		442	P 4	33	28	32	①	
272	M 5	39	39	49	①		352	O 4	30	—	24	⑤	P215、P363と切 りあり、⑥ブロッ ク層	443	P 4	41	35	38	①	
273	M 5	58	40	44	①		353	O 4	30	—	24	⑤	⑥ブロック層	444	P 4	38	38	32	①	
275	M 5	33	32	35	①		354	O 5	35	—	35	①	細か	445	P 4	52	51	59	①	
276	M 5	70	50	43	①		355	M 6	37	36	17	⑤	⑥ブロック層	446	P 4	45	45	45	①	
277	M 5	46	45	37	⑤		356	L 8	32	31	34	①		447	P 4	38	36	40	①	
278	M 5	48	42	39	①	土器片	357	L 9	60	40	48	①		448	P 4	45	45	49	①	
279	M 5	40	36	36	①		359	K 7	30	28	38	①		449	P 4	27	26	36	①	
280	M 5	56	46	31	①		360	K 7+8	33	27	34	①		450	P 4	53	52	36	①	⑤ブロック層
281	M 5	43	35	51	①	⑥ブロック層	361	L 8	45	35	32	①		451	P 4	62	45	44	①	
282	M 6	67	58	44	①		363	M 8	50	45	56	①		452	P 4	35	35	30	①	灰、土器片
283	M 6	34	34	38	①		364	M 8	34	32	47	①		453	P 4	39	22	25	①	
284	M 6	40	34	48	①	土器片	365	M 8	35	34	39	①		454	P 4	38	38	32	①	擬立柱建物 6 P
285	M 6	36	28	48	①		366	M 8	45	35	32	①		455	P 4	31	31	22	①	
286	M 6	42	34	37	①		367	M 8	50	45	56	①		456	P 4	33	28	32	①	擬立柱建物 6 P
287	M 6	35	33	36	①		368	M 8	34	32	47	①		457	P 4	31	27	26	①	
288	M 6	40	36	39	①		369	M 8	35	34	39	①		458	P 4	30	—	23	①	⑤P459を切る
289	M 6	37	34	38	③		370	M 8	35	34	39	①		459	P 4	30	—	22	①	⑤P458に切られる
290	M 6	31	30	34	①		371	M 7	62	52	45	①		460	P 4	38	36	40	①	
291	M 6	36	32	39	①	帆か	372	M 6	70	50	29	②		461	P 4	45	45	49	①	
292	M 6	67	62	55	①		373	M 6	42	—	30	①		462	P 4	27	26	36	①	⑥ブロック層
293	L 5	50	43	56	①		374	M 6	45	42	52	①	P575を切る	463	P 4	53	52	36	①	⑤ブロック層
294	L 5	44	36	31	①		375	M 6	50	45	48	①	P574に切られる	464	P 4	62	45	44	①	
295	L 5	37	35	47	①		376	L 5	57	45	40	①		465	P 4	35	—	30	①	
296	L 5	54	43	42	①		377	M 6	60	60	28	①		466	P 5	25	—	25	①	
297	L 5	36	35	43	①		378	M 7	58	53	36	①	⑥ブロック層	467	P 4	27	26	31	①	⑥ブロック層
298	L 5	65	59	69	①		379	M 7	30	28	38	①		468	P 4	22	22	21	①	
299	M 6	32	32	39	①		380	N 4	53	—	35	①	⑥ブロック層	469	P 4	26	26	26	①	
300	O 4	56	—	48	① P147を切る		381	N 5	70	52	31	①		470	P 4	45	45	45	①	⑥ブロック層
301	N 5	41	36	29	①		382	L 5+6	70	55	36	①		471	P 7	33	30	9	①	擬立柱建物 3 P
302	N 5	32	32	22	①	擬立柱建物 2 P	384	L 6	76	70	38	①	⑥ブロック層	472	M 7	29	29	29	①	擬立柱建物 2 P
303	M 5	110	103	50	①	⑥ブロック層	386	L 6	45	40	29	⑤	灰、土器片	473	B 7	27	27	26	①	擬立柱建物 2 P
304	L 5	63	32	40	①	⑥ブロック層	387	L 6	22	20	26	①	VII期ブロック層	474	L 8	32	31	29	①	擬立柱建物 2 P
305	L 5	60	57	33	①		388	L 6+7	32	28	47	①		475	L 7	26	24	49	①	擬立柱建物 2 P
306	L 5	49	41	29	①		389	L 6	35	30	55	①	⑥ブロック多層	476	L 7	27	26	25	①	擬立柱建物 2 P
307	L 5	35	34	29	①		390	L 6	38	35	46	①		477	L 7	37	36	10	⑤	擬立柱建物 2 P
308	L 5	37	34	20	①		391	L 6	40	35	63	①		478	M 7	30	26	52	①	擬立柱建物 2 P
309	L 5	47	46	30	①		392	M+N 7	36	32	47	①		479	M 7	36	33	38	①	擬立柱建物 2 P
310	L 6	40	38	32	①		394	K+L 7	40	34	56	①		480	L 7	33	29	49	①	擬立柱建物 2 P
311	L 6	44	36	45	①		395	K 7	30	28	30	①	⑥ブロック層	481	K 7	30	27	23	①	⑥ブロック層
312	L 6	50	40	34	①		396	N 6	33	33	28	①	⑥ブロック層	482	M 7	30	25	33	①	⑥ブロック層
313	L 5	68	55	37	①		397	K 7	30	26	47	①	⑥ブロック層	483	M 7	30	25	44	①	⑥ブロック層
314	O 4	35	30	30	①		398	O 6	45	45	41	①	⑥ブロック多層	484	M 7	30	25	33	①	⑥ブロック多層
315	O 4	55	—	43	① P562、P563と切 りあり		399	O 5	45	44	45	①	⑥ブロック層	485	L 7	26	26	34	①	擬立柱建物 2 P
316	N 4	50	—	41	①		400	L 6	30	25	44	①								

No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No.	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
500	L 6	30	30	39	③	■■■■上部検出	607	T 4	38	30	32	②		697	S 4	45	36	43	④	
501	L 6	27	—	27	③	■■■上部検出	608	T 4	24	—	32	②		698	S 4	28	28	38	⑥	
502	L・M 6	40	37	69	③	■■■上部検出	609	T 4	35	28	33	②		699	S 4	36	25	31	⑥	
503	K 6	22	21	22	③	■■■上部検出	611	T 4	25	—	35	④		700	S 5	22	19	34	⑥	
504	M 6	27	28	38	③	■■■上部検出	612	T 4	23	—	33	②		701	S 4	36	27	38	⑥	
505	M 6	24	30	23	③	■■■上部検出	613	T 4	37	35	54	②		702	S 5	36	25	45	⑤	
506	L 6	33	25	14	③	■■■上部検出	614	T 4	40	32	45	②		703	S 5	29	27	29	⑥	
507	M 6	66	59	23	③	■■■上部検出	615	T 4	25	25	36	②		708	S 5	28	24	33	⑤	
508	K 6	29	25	33	①	■■■上部検出	616	T 4	29	25	32	②		709	S 4	40	35	39	②	
509	K 6	31	28	19	①	■■■上部検出	617	T 3	27	21	30	②		710	S 4	36	26	23	⑦	弥生終末土器片
510	L 7	33	32	38	①	■■■上部検出 ⑤プロック底	618	T 3	29	33	31	②		711	S 4	34	36	36	②	
511	L 7	37	36	44	①	■■■上部検出	619	T 3	27	35	32	②		713	S 4	39	39	34	②	
512	K 7	35	35	45	①	■■■上部検出	621	S 3	30	36	32	②		714	S 4	37	35	25	④	
513	K 7	30	25	49	①	■■■上部検出	622	S 3	30	29	29	②		715	S 4	37	37	26	④	
514	L 7	36	28	26	③	■■■上部検出 ⑤プロック底	623	S 3	32	29	35	②		716	S 4	23	23	29	④	
515	L 8	32	29	22	⑤	■■■上部検出 脚か、⑤プロック底	627	S 3	45	40	51	②		717	S 4	39	39	33	④	
516	L 7	26	25	35	③	■■■上部検出	629	S 3	36	26	41	④		718	S 4	35	35	31	④	
517	M 7	27	25	35	④	■■■上部検出 ⑤プロック底、少 量鉛	631	S 3	30	15	27	②		719	S 4	33	30	31	②	
518	N 6	40	35	17	③	■■■上部検出	632	S 3	30	27	37	④		720	S 4	34	30	29	②	
519	N 6	35	30	17	③	■■■上部検出	633	S 3	23	22	33	②		721	S 5	49	36	50	②	
520	L 6	28	26	21	①	■■■上部検出 ⑤プロック底	634	S 3	32	26	34	④		722	S 5	36	35	43	②	
521	L 6	36	34	33	③	■■■上部検出 ⑤プロック底	635	S 3	42	36	48	④		723	S 5	31	29	33	④	
522	K 7	30	29	21	⑨	②プロック底、 土器片	641	R 3	40	35	33	④		724	R+S 4	38	33	42	②	
523	L 6+7	32	30	33	①	■■■上部検出 ⑤プロック底	643	R 3	35	22	43	②		727	R 4	25	25	27	②	
524	N 5	33	30	38	①	■■■上部検出	644	R 3	21	30	38	④		728	R 5	27	27	31	④	
525	N 5	30	30	23	⑨	■■■上部検出 ⑤プロック底	646	S 2	33	32	51	①		729	Q+R 5	30	27	45	① ⑤プロック底	
526	N 5	38	35	38	④	■■■上部検出 ⑤プロック底	647	S 3	35	30	44	④		730	Q 5	35	43	43	① ⑤プロック底	
527	N 5	48	45	30	⑤	①プロック底	648	S 3	32	19	32	④		731	R 3	30	27	47	① ⑤プロック底	
528	N 5	51	42	63	④	⑤プロック、少 量鉛	650	S 3	23	23	35	④		732	Q 5	35	34	43	① ⑤プロック底	
529	N 6	31	29	34	①	■■■上部検出	651	S 3	30	25	60	④		733	Q 4	30	30	35	① ⑤プロック底	
530	N 6	30	27	33	③	⑤プロック底	652	S 3	30	30	46	④		734	T 3	45	35	49	① ⑤プロック底	
531	M 6	27	24	46	②	①プロック底	653	S 3	30	27	67	④		735	S 4	69	—	56	①	根か、⑤プロック底
532	N 6	30	27	31	①	■■■上部検出	654	R 3	23	20	42	④		737	R 3	30	27	47	① ⑤プロック底	
533	N 6	30	19	19	①	■■■上部検出	655	R 3	38	36	37	④		738	Q 4	27	25	39	① ⑤プロック底	
534	N 6	30	27	33	③	⑤プロック底	656	R 3	37	33	68	④		739	Q 4	27	22	28	③	
535	M 6	27	24	38	③	■■■上部検出	657	R 3	35	23	58	④		740	Q 4	34	32	41	① ⑤プロック底	
536	K 8	30	30	32	①	V面上部検出	660	R 3	34	27	39	④		741	R 3	32	28	38	① ⑤プロック底	
540	N 6	36	32	57	①	■■■上部検出	661	R 3	35	30	35	④		742	Q 4	36	33	39	① ⑤プロック底	
541	O 5+6	37	30	33	①	■■■上部検出	662	R 3	43	34	54	④		743	R 4	25	22	29	① ⑤プロック底	
545	M 6	50	—	12	③	V面上部検出、 石	664	R 4	38	35	33	①		744	Q 2	35	30	45	① ④少量鉛	
547	M 7	28	26	27	①	■■■上部検出	665	R 4	38	30	43	②		745	Q 3	50	40	42	② ④少量鉛	
548	M 7	31	31	36	①	■■■上部検出	666	R 4	40	35	54	①		746	S 3	27	20	26	① ⑤プロック底	
549	L 8	25	25	26	①	■■■上部検出	667	R 4	30	30	67	①		747	Q 2	35	30	45	① ④少量鉛	
550	L 7	30	30	43	③	■■■上部検出	668	R 4	40	33	36	①		748	Q 3	50	40	42	② ④少量鉛	
551	L 8	30	25	55	①	■■■上部検出	669	R 4	40	37	42	①		749	R 3	28	27	41	① ⑤プロック底	
552	L 6	35	28	22	③	■■■上部検出	670	R 3+4	35	32	52	④		750	R 1	30	30	30	① ⑤プロック底	
553	L 6	27	24	49	①	■■■上部検出	671	R 4	30	28	45	④		751	S 4	27	—	29	① ⑤プロック底	
554	L 6	35	33	35	⑤	■■■上部検出、 灰	672	R 3	27	24	34	②		752	R+S 3	38	32	38	① ⑤プロック底	
555	L 6	27	27	60	⑥	■■■上部検出	675	Q 4	30	27	31	④		753	R 3	33	32	45	① ⑤プロック底	
557	M 6	30	27	60	⑥	■■■上部検出	676	Q 4	37	34	44	④		754	R 3	27	24	24	① ⑤プロック底	
558	M 6	30	27	37	④	■■■上部検出	677	Q 4	32	28	40	②		755	R 3	22	20	36	① ⑤プロック底	
559	M 6	25	22	30	①	■■■上部検出	678	Q 3	33	30	39	④		756	Q 3	47	40	41	① ⑤プロック底	
560	O 5	33	25	30	①	■■■上部検出、 土器片	679	Q 4	32	28	43	②		757	S 4	27	—	29	① ⑤プロック底	
561	O 3	40	34	44	①	■■■上部検出、 ⑤プロック底	680	Q 4	45	34	38	④		758	S 3	40	35	52	② ⑤	
564	L 7	25	17	12	①	■■■上部検出、 灰	681	Q 4	34	28	25	④		759	R 5	35	—	21	—	
565	L 7	24	24	20	⑥	■■■上部検出	682	Q 4	32	28	29	④		760	R 3	26	22	46	—	
566	L 6	35	33	35	⑤	■■■上部検出、 灰	684	Q 5	30	28	27	②		769	P 4	30	—	21	① V面プロック底	
567	M 6	30	27	60	⑥	■■■上部検出	685	Q 5	23	22	23	④		770	P 5	35	32	46	—	
568	M 6	25	22	30	⑥	■■■上部検出	686	Q 5	21	20	25	④		771	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
569	L 7	24	24	20	⑥	■■■上部検出	687	Q 4	35	30	32	④		772	P 4	32	—	44	① V面プロック底	
570	P 4	30	27	40	④	■■■上部検出	688	Q 4	34	28	25	④		773	P 4	30	27	37	①	
571	O 4	38	37	67	①	■■■上部検出	689	Q 4	35	30	32	④		774	P 4	30	28	37	①	
572	O 4	38	37	67	①	■■■上部検出	690	T 4	30	28	35	④		775	P 4	39	—	33	①	
573	L 7	24	24	20	⑥	■■■上部検出	691	T 4	31	31	45	④		776	P 4	38	—	30	① ⑤プロック底	
574	L 7	25	17	12	①	■■■上部検出、 ⑤プロック底	692	T 4	25	25	35	④		777	P 4	30	—	31	①	
575	M 6	30	27	40	④	■■■上部検出	693	S 4	40	38	52	④		778	N 5	45	45	39	①	
576	T 4	35	35	35	②	■■■上部検出	694	S 4	45	42	29	④		779	P 4	42	—	15	⑤	
577	M 6	30	27	40	④	■■■上部検出	695	S 4	30	27	38	④		780	P 4	30	—	21	① V面プロック底	
578	M 6	27	22	32	④	■■■上部検出	696	S 4	30	27	38	④		781	P 5	35	32	46	—	
579	M 6	25	22	30	①	■■■上部検出	697	S 4	30	27	38	④		782	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
580	M 6	27	22	30	③	■■■上部検出	698	S 4	30	27	38	④		783	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
581	M 6	27	22	30	③	■■■上部検出	699	S 4	30	27	38	④		784	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
582	M 6	27	22	30	③	■■■上部検出	700	S 4	30	27	38	④		785	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
583	M 6	27	22	30	③	■■■上部検出	701	S 4	30	27	38	④		786	P 4	32	33	36	① V面プロック底	
5																				

第4章 特論

1. 名和中歛遺跡出土土器胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

分析の目的

名和中歛遺跡から出土した弥生時代終末、古墳時代後期の土器のあいだで時期が異なれば胎土がどうなるか検討した。また、古墳時代後期の土師器、須恵器、移動式壺と名和飛田遺跡の同時期の土器と比較し、胎土が類似しているかどうか調べた。

分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK(カリウム)、Ca(カルシウム)、Rb(リビウム)、Sr(ストロンチウム)などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、下表に示した弥生時代10点、古墳時代10点の合計20点である。

蛍光X線分析法による分析結果

図43 K-Ca、図44 Sr-Rbの散布図では、遺跡内での時期ごとに胎土に違いがあるかどうか検討した。すると弥生時代終末期の土器が3つにわかれた。それは、1・4と7・10と2・3・5・6・8・9である。また古墳時代後期の土師器も2つにわかれた。それは、14と12・13・15で、須恵器は1つに

名和中歛遺跡出土土器分析値一覧表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料番号	出土遺構	層位	種別	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時期
1	墾穴往辺1	砂壁上面	弥生土器	60.48	1.07	25.55	5.19	0.07	2.09	1.22	3.36	0.80	0.08	67	404	333	弥生終末期?
2	墾穴往辺1	砂壁上面	弥生土器	65.64	0.99	19.73	6.00	0.06	1.98	0.67	2.76	1.76	0.13	203	250	354	弥生終末期?
3	墾穴往辺1	砂壁上面	弥生土器	66.24	1.06	20.34	6.38	0.07	1.69	0.73	1.61	1.66	0.08	198	276	373	弥生終末期?
4	墾穴往辺2	床底	弥生土器	63.95	1.08	23.02	4.73	0.05	1.89	1.58	2.27	1.14	0.09	163	493	348	弥生終末期
5	墾穴往辺2	砂壁上面	弥生土器	65.55	1.08	20.81	6.65	0.07	1.95	0.55	1.06	1.93	0.05	235	193	336	弥生終末期
6	墾穴往辺2	床底	弥生土器 錐	64.92	1.10	20.94	6.42	0.07	1.82	0.63	1.92	1.90	0.06	196	197	416	弥生終末期
7	墾穴往辺2	床底	弥生土器 錐	66.55	1.01	19.23	5.34	0.07	1.89	1.30	2.38	1.93	0.08	256	424	333	弥生終末期
8	墾穴往辺3	床底	弥生土器 葵台	66.95	1.12	20.27	5.98	0.03	1.79	0.65	2.96	1.94	0.12	190	281	319	弥生終末期
9	墾穴往辺3	⑨腰	弥生土器 錐	64.21	0.99	22.07	5.00	0.05	1.89	0.80	3.14	1.58	0.09	201	295	336	弥生終末期
10	墾穴往辺3	床底	弥生土器 錐	66.46	1.16	19.64	4.74	0.05	1.88	1.29	2.02	2.43	0.12	258	423	291	弥生終末期
11	墾穴往辺4	床底	移動式壺	64.34	0.92	19.93	5.89	0.08	2.10	1.54	3.22	1.85	0.13	174	435	263	古墳時代後期
12	墾穴往辺4	床底	土師器 錐	65.99	1.16	20.92	6.10	0.07	1.96	1.19	0.52	1.82	0.08	223	327	428	古墳時代後期
13	墾穴往辺4	床底	土師器 錐	63.47	1.15	21.16	5.66	0.07	2.12	0.95	3.33	1.74	0.14	212	317	304	古墳時代後期
14	墾穴往辺4	床底	土師器 錐	63.66	1.08	22.60	4.72	0.06	2.03	1.88	2.67	1.10	0.11	101	533	284	古墳時代後期
15	墾穴往辺4	床底	土師器 錐	64.61	1.03	20.87	5.49	0.06	2.03	1.10	2.67	1.84	0.08	208	371	344	古墳時代後期
16	墾穴往辺4	床底	須恵器 身	68.72	0.88	18.32	4.76	0.05	2.01	0.40	2.89	1.66	0.11	179	126	358	古墳時代後期
17	墾穴往辺4	床底	須恵器 身	71.04	0.81	17.56	3.39	0.05	1.76	0.39	2.78	1.82	0.17	178	133	324	古墳時代後期
18	墾穴往辺4	床底	須恵器 身	69.35	0.83	18.60	3.80	0.04	1.97	0.35	2.96	1.73	0.16	198	127	311	古墳時代後期
19	墾穴往辺4	床底	須恵器 身	71.32	0.90	16.78	4.34	0.04	1.72	0.31	2.34	1.82	0.22	235	128	387	古墳時代後期
20	墾穴往辺4	床底	須恵器 身	67.51	1.45	18.62	5.81	0.08	2.00	0.32	2.39	1.43	0.14	166	143	536	古墳時代後期

まとまった。

図45 K-Ca、図46 Sr-Rbの散布図では、古墳時代後期の時期に限定して名和飛田遺跡と比較し、胎土に違いがあるか検討した。その結果、両遺跡とも土師器と須恵器で胎土に違いがみられ、識別できた。また、移動式竈も土師器の分布域に入った。なお、名和中畠遺跡の14のみが単独で分布した。

実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で隨時観察した。

弥生時代終末期および古墳時代後期の土器には3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石と3mm以下の安山岩が含まれていた。14の土師器は他の土器に比べ、石英などの砂粒が少なく角閃石が多く観察された。

まとめ

名和中畠遺跡出土土器の胎土分析(蛍光X線分析法・砂粒観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内で時期ごとに胎土に違いがあるかどうかでは、弥生時代終末期の土器が蛍光X線分析で3つに分類できたが、実体顕微鏡による砂粒観察では差はみられなかった。古墳時代後期では14が他の土器に比べ、角閃石の砂粒が多くみられ、識別できた。また、弥生時代終末期と古墳時代後期の砂粒観察では、弥生のほうが、石英などの砂粒が少ない傾向にあった。そして、須恵器では1つにまとまり同じ産地からもたらされた可能性がある。

以上のように、古墳時代後期の名和飛田遺跡との比較では、器種・質により分布域がほぼ似ていた。データ試料を蓄積し追認する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

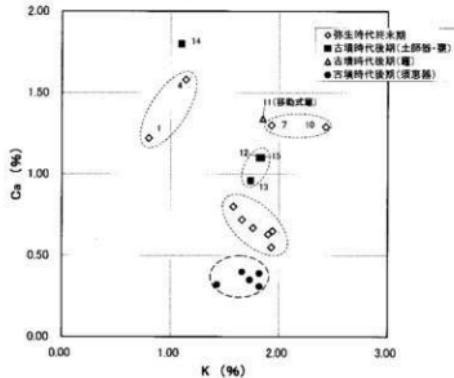


図43 遺跡内での時期別の胎土比較(K-Ca)

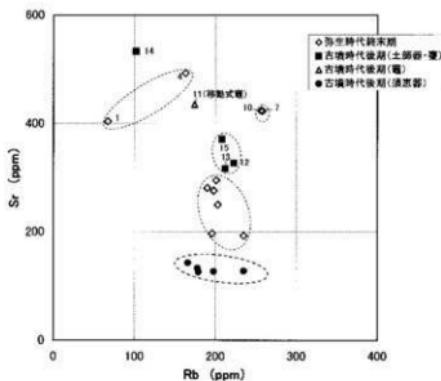


図44 遺跡内での時期別の胎土比較(Rb-Sr)

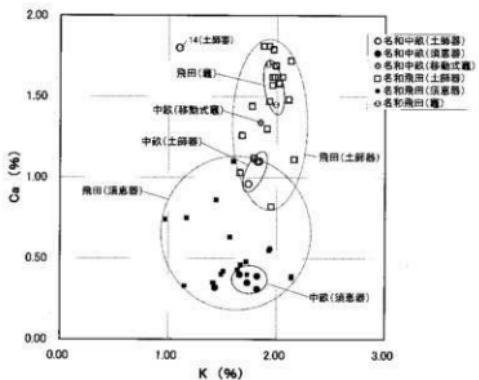


図45 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(K-Ca)

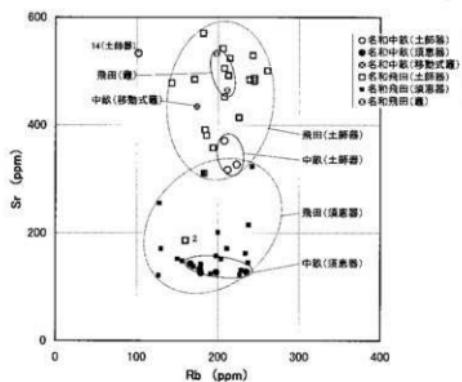


図46 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(Rb-Sr)

2. 名和中畠遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名和中畠遺跡は、大山北麓に位置し、縄文時代～古墳時代の遺構が検出されている。このうち、弥生時代終末期の竪穴住居3からは住居構築材の可能性がある炭化材が出土している。

本報告では、木材利用状況についての情報を得るために、出土炭化材の樹種同定を実施する。

試 料

試料は、竪穴住居3から出土した炭化材10点である。

分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

結果

樹種同定結果を右表に示す。炭化材は、広葉樹4種類（クリ・スダジイ・ヤマグワ・クスノキ科）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

- クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圈部は2-3列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

- スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2列幅で放射方向に配列する。孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は基本的に単穿孔であるが、小道管に階段穿孔が認められることがある。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高。

- ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

- クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

樹種同定結果			
遺構	年代	番号	樹種
竪穴 住居3	弥生時代終末期	1	スダジイ
		2	スダジイ
		3	クリ
		4	スダジイ
		5	スダジイ
		6	ヤマグワ
		7	スダジイ
		8	クスノキ科
		9	クスノキ科
		10	スダジイ

考 察

樹種同定を行った炭化材は、全て弥生時代終末期の竪穴住居3から出土したものである。合計4種類の木材が確認され、スダジイが6点で最も多く、他の3種類は1、2点であった。この結果から、スダジイを中心によくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。

確認された種類のうち、クスノキ科を除く3種類は、重硬で強度が高く、クリやヤマグワは比較的耐朽性も高い。クスノキ科は、大径木になる種類から低木まで多くの種類があり、材質も比較的重硬なものからやや軽軟なものまで幅広い。これらの結果から、基本的には硬く強度の高い木材を選択していることが推定される。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種となる常緑高木である。一方、クリやヤマグワは、二次林等の落葉広葉樹林中に生育する落葉高木である。クスノキ科は、常緑性の種類が多いが、落葉性の種類も含まれており、科としての生育範囲は広い。

本遺跡周辺では、押平尾無遺跡で弥生時代終末期・古墳時代前期前葉とされる3軒の竪穴住居跡から出土した炭化材について樹種同定が実施されており、コナラ属アカガシ亜属、クリ、スダジイ、ヤマグワ、クスノキ科、イネ科が確認されている⁽¹⁾。コナラ属アカガシ亜属とイネ科を除く4種類は、今回の樹種同定結果でも認められた種類である。コナラ属アカガシ亜属は、クリやスダジイ等と同様に重硬で強度の高い材質を有する。一方、イネ科は材質を考慮すれば、屋根材等の萱材として利用された可能性がある。今回の結果は、押平尾無遺跡の結果とも調和的である。また、古御堂新林遺跡の弥生時代終末期の住居構築材と考えられる炭化材でもクリ、スダジイ、クスノキ科が認められており⁽²⁾、今回の結果と類似する結果が得られている。これらの結果から、本地域では弥生時代末から古墳時代前期初頭頃の住居構築材にクリ、スダジイ、クスノキ科などが多く利用されていた可能性がある。こうした木材は、周辺から入手していたと考えられ、遺跡周辺に常緑広葉樹のスダジイや落葉広葉樹のクリ、ヤマグワ等が生育していたことが推定される。

今回の樹種同定では少なくとも4種類が利用されていることが明らかとなった。しかし、同定点数は、1軒の住居構築材の総数に比較すれば少ない。また、硬い木材は燃焼の際に燃え残り易いことが推定される。実際に弥生時代終末期の6軒の住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施した倉吉市下張坪遺跡では、合計12種類の木材が確認されている⁽³⁾。そのため、本地域においても確認された他にも木材が利用されていた可能性があり、今後の資料蓄積が課題である。

註

- (1) バリノ・サーヴェイ株式会社 2003「古御堂笠尾山遺跡・茶畠第1遺跡・押平尾無遺跡における出土炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書93 茶畠遺跡群第3分冊 古御堂笠尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団 3-187~3-191.
- (2) 前掲(1)文献
- (3) バリノ・サーヴェイ株式会社 1997「下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種」『倉吉市文化財調査報告書 第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 113-123.

第5章 まとめ

1. 調査のまとめ

この度の調査では、前述の通り縄文時代から古墳時代に至るまでの遺構や遺物を確認した。時期毎に留意点をいくつか述べ、まとめとしたい。

縄文時代

早期～中期に比定される土器片、黒曜石製を中心とした石器類を検出した。埋土から遺物の出土した土坑1・2・3を除いて、明確に当該期とする遺構は無いが、土坑4～7は形態から落し穴の可能性が高い。落し穴は縄文期の遺構として、大山北麓丘陵上に立地する近隣の遺跡からも数多く報告されている。また、多数確認された石器類の出土状況は、本遺跡周辺で石器製作が行われていたことを示している。今後は関連遺構の確認が課題といえよう。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は竪穴住居1～3である。いずれも弥生時代終末期に属し、当地域では一般的な住居といえよう。竪穴住居3の北東隅で確認した集石（図24）の石材は角閃石黒雲母安山岩である。きめが粗く、竪穴住居1ピット13埋土中出土資料（根石）や敲石等に同材を使用している。簡便な躰石器用石材として利用されていたことが窺える。

竪穴住居1から南東へ約48m離れて竪穴住居2・3が分布するが、両住居間に多数検出されたピット群・掘立柱建物群の帰属が問題となる。掘立柱建物6のピット5・7埋土中からは、弥生時代終末期と思われる土器小片を確認しており当該期に属する可能性があるが、ピット562等からは古墳時代中期～後期と考えられる土器片を散見している。埋土の色調は大きく4種類確認したが、出土遺物との対応関係が掴めず、時期を明確にできなかった。

古墳時代の遺構として確実なのは、竪穴住居4のみである。先述のように、本住居からは移動式竪

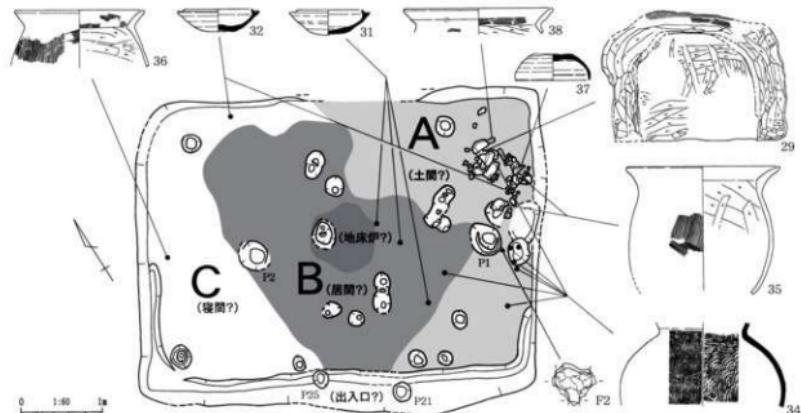


図47 竪穴住居4間取り想定図

が使用位置を留めた状況で出土した。また、床面の遺存状況が概ね良好で、須恵器や土師器等の遺物も比較的まとまった量が検出されている。本項では、これらを材料として本住居内の間取りについて一考してみたい。まず、床面を形成する土質の相違により、A・B・Cと3つの範囲に分類した(図47)。Aは貼床(図26中⑧層)の施された範囲で、表面が固く締まる。住居内北東～東部分を占め、北東部隅に竈が位置する。32は搅乱のため若干動いていると思われるが、竈周辺には土師器壺、須恵器壺・壺蓋・壺身が置かれていたのであろう。床面検出遺物のほとんどがこの範囲に収まる。Bは平均で深さ10cm程掘り込まれ、図26⑨層が充填される範囲である。Aエリアのようなしまりは無い。住居内の中央部を占め、地床炉と思われる焼土の広がりが中心に位置する。Cは住居内西側の範囲で、基盤層であるVI層上面を直接床面としている。BとCの土質は近似しており、掘り込みの意図については判然としないが⁽¹⁾、両者を区別する意識は存在したと推測する。また、Bは住居南東壁の際まで広がり、その近くには浅いピット21・25が間隔1m程度で並ぶ。梯子穴の可能性があり、入り口と想定する⁽²⁾。以上から各範囲の空間利用状況について推察すると、Aは竈を中心とした厨房、物置等のいわゆる土間、Bは炉を中心とした居間的な場所⁽³⁾、残るCは寝間となろうか。古墳時代における竈の導入により、堅穴住居の空間構造の中心が繩文時代以来の炉から竈に移行し、大きく変容することが指摘されている⁽⁴⁾。動産的な移動式竈の使用位置を推定できる例は少ないが⁽⁵⁾、類例の蓄積により当該期住居内の空間利用の実態に迫れるものと思われる。今後の課題としたい。

(加藤)

2. 移動式竈について

古墳時代中期(5世紀代)の堅穴住居には竈が造り付けられるようになり、炊飯形態に変化が生じる。こうした不動産的な竈に加えて、持ち運び可能な竈形土製品(移動式竈)が出現する。古墳時代後期(6世紀)には、畿内を中心に西日本で多数出土し、東日本でも関東を中心に出土例が増加している⁽⁶⁾。山陰地域は造り付け竈の検出例が少ない一方、移動式竈が出土する地域として知られる⁽⁷⁾。本節では従前の研究成果をふまえつつ、鳥取・島根両県の移動式竈について概観してみたい。

時期や形態がある程度明らかな代表例に限定し、地域、時期別に並べた(図49)。山陰地域における移動式竈の初現は、須恵器陶邑編年⁽⁸⁾ TK208、TK23型式併行期頃に求められる。鳥取県園第6遺跡では、時期は下るが(陶邑MT85併行期)、畿内の初期須恵器共伴例に形態が類似した竈(図49中7)が出土しており、朝鮮半島系遺物の可能性が指摘されている⁽⁹⁾。6世紀後半になると出土量は増加し、出雲6B期(陶邑TK48併行)以降、徐々に出土量を減らしながら8世紀前半頃まで一定数みられる。その後両地域とも8世紀後半～9世紀代の資料を散見するが、その頃に収束していくものと思われる。

分布状況であるが、鳥取県は因幡・伯耆の両地域で出土している。ただ、山間地域の様相については調査例が少なく詳細は不明であり、今後の調査を待ちたい。

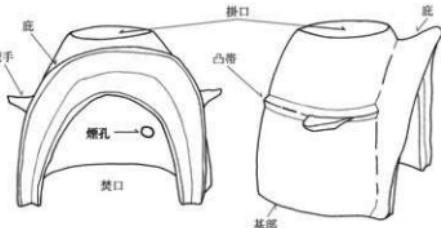
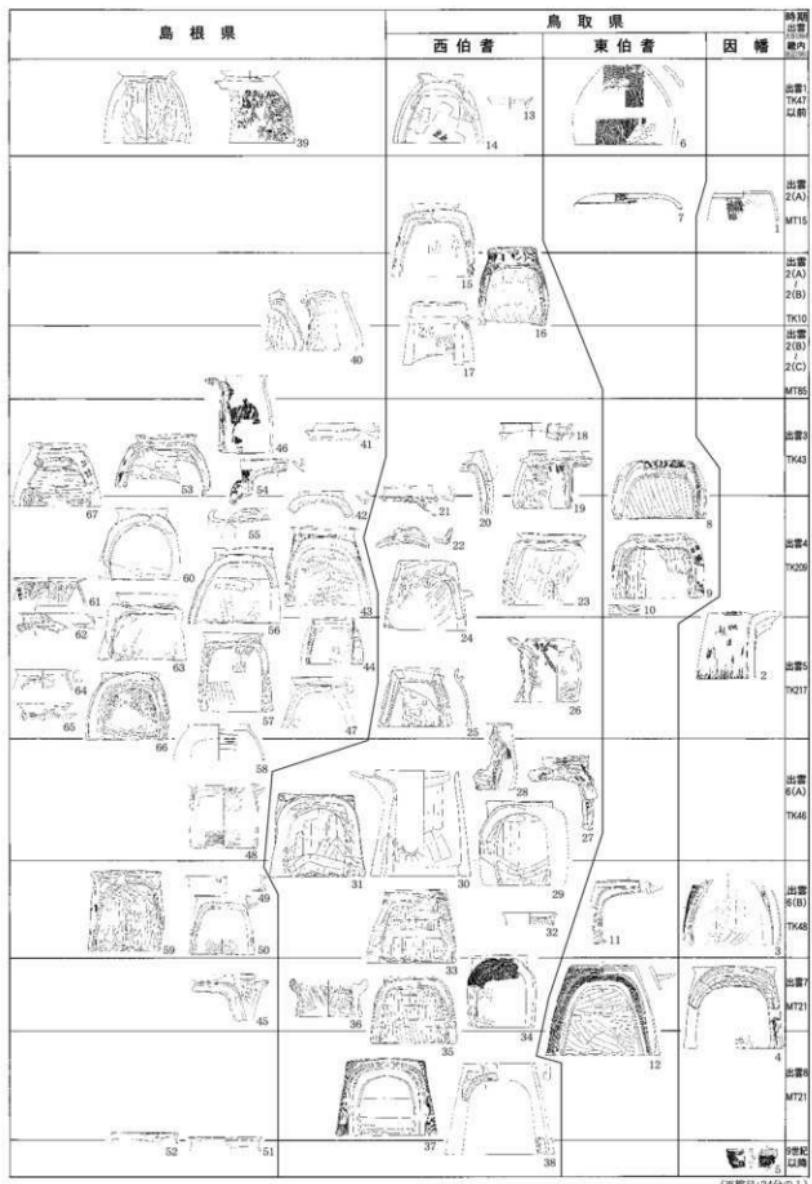


図48 移動式竈部位名称 (近澤1992をもとに作図)



島根県では安来市、松江市とその周辺（東出雲町、玉湯町、宍道町）、西部出雲地域（出雲市、斐川町）、出雲南部地域の一部（木次町）、石見中部の海岸部（江津市）に出土例がある。石見・出雲の山間部は造り付け竈が設けられ、移動式竈の出土が無い地域である。中国山地を隔てた広島県北部の影響との指摘がある⁽¹⁰⁾。

出土する遺構は、①堅穴住居・テラス状遺構・掘立柱建物及びその周辺、②旧河道・大溝等、③古墳副葬品がある⁽¹¹⁾。山陰地域では一部古墳の周溝等からの出土があるが、ほとんどが①・②に該当し、①が多数を占める。先述したように山陰では造り付け竈を採用する地域が限られるため、炊飯具としての活発な使用が想定されるが、検出された住居の総数のうち移動式竈が出土した住居の数は、甕や瓶形土器に比べかなり少ない⁽¹²⁾。加えて、他地域では堅穴住居内で造り付け竈と共に伴する例がみられることや、正倉院文書、延喜式等の史料記載より非日常的な祭事での使用を強調する説があり⁽¹³⁾、現状では竈の明確な性格付けは困難である。島根県域、伯耆地域では土製支脚との共伴例が多数みられる。竈と土製支脚は甕や瓶等を支持するという使用方法や用途が重複すると思われるが、サイズ的にセットでの使用は難しい。ハレとケの調理においてこれらを使い分ける可能性も指摘されている⁽¹⁴⁾。

移動式竈は、基本的に図48の部位からなる。庇部の仕様により「付け庇」と「曲げ庇」の2系統が知られているが⁽¹⁵⁾、山陰地域では付け庇系のみがみられ、煙孔は確認されていない。掛口端部の形状に特徴があり、土師器甕口縁部に類似した断面「くの字」状を呈するものがみられる⁽¹⁶⁾。以下、掛け口端部の形状に着目し3タイプに分類する。

A類：掛け口の立ち上がりが内傾または直立する。（図49中2、8、12等）

B類：掛け口が外方に屈曲し、くの字状を呈する。（図49中14、23、39、61等）

C類：掛け口が外反しながら立ち上がり、如意状を呈する。（図49中25、56、66等）

形態的な変遷は、体部形状の漸移的な変化が認められる。導入期（出雲1期、陶邑TK47併行期前後）から陶邑TK217併行期頃までは体部が丸みを帯びるもの（39、9、25等）が多いが、以後体部が直線的な例（30、37等）が主体となる傾向が確認できる。掛け口形態については、各地域に点的な例外はあるが島根県内は先の分類のB・C類、鳥取県内では因幡・東伯耆がA類、西伯耆はA・B・C類全てを確認できる。西伯耆は、島根県と鳥取県東部（因幡・東伯耆）との折衷的な様相を示している点は興味深い⁽¹⁷⁾。時期的な変遷は完存する資料が少ないため詳細な検討ができないが、大枠を述べたい。

導入期は西伯耆～島根県内ではB類、東伯耆、因幡ではA類が出土する。その後、島根県内ではB類が出雲3期以後C類と併存し、出雲4～5期頃に減少し、以降はC類が主体となる。因幡・東伯耆では点的な例外を除きA類が卓越する。TK23併行の倉吉市夏谷遺跡出土竈（6）は掛け口の内傾度が強く、小さな庇が焚き口上部に付き以後の例とやや一線を画するが、良好な後出資料が無く詳細な変遷過程を現状では辿れない。7世紀後半～8世紀前半期の資料は器壁が薄い造りのものが増加し、厚み6、7mm程の例もみられる。西伯耆の出現期は島根県内と同様B類がみられる。古墳時代中期後葉に比定される米子市研石山遺跡例（14）の庇は焚き口上面にのみ付く。やや時期が開くが、陶邑MT15～TK10併行の米子市長砂第3遺跡資料（15）は焚口側部の中位程まで庇が付く。以降の資料では庇が基部まで巡り、変遷が窺える。ただ、この庇の変化が当地域で普遍的なものか、他地域でも見られるかどうかは資料が少なく現時点では判断できない⁽¹⁸⁾。MT85併行期には、B類に加えてA・C類が出土する。体部に突帯が巡り、把手が付くものが含まれ、米子市、西伯郡会見町で主に出土している。突帯や把手は畿内、山陽地域でみられる属性であり、TK217併行期頃まで散見される。安来市山ノ神

遺跡出土例（40）の体部には突帯が巡り同様な特徴を有し、鳥取一島根県境付近に本タイプは主に分布すると思われる。TK217～TK48併行期以降はB・C類が減少し、A類が主体となる。導入期から6世紀代頃の折衷的な様相から、古墳時代終末期以降は東伯耆～因幡地域のAタイプへと変遷することが窺える。

山陰地域出土の移動式竈について形態的特徴を中心に概観してきた。破片資料が多く詳細な検討にはほど遠いが、近年出土例が増加しており、更なる検討が可能になると思われる。また、6世紀後半の出土数増加は竈の普及拡大を示すと思われ、土製支脚の出現期とも重なることから炊飯形態変化の画期と捉えられている⁽³²⁾。安来平野～松江周辺では、出雲4～5期に集落構成主体が堅穴住居から掘立柱建物へと変化し、炊飯形態の画期とほぼ連動することが分かってきており⁽³³⁾、興味深い。今後このような視点から各地域の検討が進めば、移動式竈についても新たな知見が得られると考える。

(加藤)

註

- (1) 福岡県甘木市宮原遺跡等の古墳時代中期～奈良期の堅穴住居では、貼床下に一段深く掘り込まれる範囲が存在する。ただ、住居中央部分ではなく、周壁との間に認められるもので本例とは異なる。
福岡県教育委員会 1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-46- 宮原遺跡Ⅲ (AII・D地区)』等
- (2) 都出比呂志 1989『堅穴式住居の立体構造』『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- (3) 浅川滋男 2001『堅穴住居の空間分節』『堅穴住居の空間分節に関する復元研究』奈良国立文化財研究所
床面の硬軟から住居内利用状況を考える研究がいくつか為されており、出入口～住居中央に位置する炉の周囲が固く、壁際が柔らかい傾向を示している。一方、炉の周辺が柔らかい例として、板敷きによる揚床の痕跡を残す住居（縄文時代）が紹介されている。本遺跡例ではそうした痕跡は確認されていないが、可能性として注目される。
- (4) 前掲（3）文献
- (5) 例えば、鳥取県福成早里遺跡のテラス状遺構（SS33）では直径40cm、深さ5cm程度の被熱範囲があり、竈を据えた場所の可能性が指摘されている。島根県浜山池遺跡では掘立柱建物（SB-08）等において径40～50cm、厚み約3cmの被熱した粘土貼りがあり、竈床と推定されている。同遺跡では竈が多量に出土しており、注目される。ただ、両例とも竈が被熱範囲に接して出土したわけではない。
- (6) 財團法人大阪府文化財センター、日本民家集落博物館 2004『カルチュアはっとりNo.3 シリーズ ここまで分かった考古学 竈形土器の語るもの』日本民家集落博物館企画展示資料
- (7) 杉井 健 1993『竈の地域性とその背景』『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
なお、本節において「山陰地域」とは島根・鳥取両県のことを示し、長門・但馬地域は含めていない。
- (8) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- (9) 鳥取県教育文化財団 1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』
- (10) 岩橋孝典 2003『山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について』『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター

時 期	島 根 県			山陰地域の移動式竈 地域別分類変遷表			※ 表中番号は図40中に対応	
				鳥 取 県				
	A類	B類	C類	A類	B類	C類		
TK47山前	39			14			6	
WT15				16	16		1	
WT85		17						
TK43	11							
TK209	81	21	21	23	24	9	2	
TK217	62	26	26	25				
TK46	64	46						
TK48	59	33	32	31			3	
WT21	51	37		17			4	
9世紀以降	62						5	

- (11) 近澤豊明 1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版

(12) 移動式竈の出土数が増加する6世紀後半～7世紀前半頃の資料からいくつか例を示す。鳥取県八橋第8・9遺跡で堅穴住居総数23棟のうち7棟、鳥取県上種第6遺跡で全17棟のうち4棟、鳥取県百塚第5遺跡で全17棟のうち1棟である。

(13) 稲田孝司 1978「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会

(14) 前掲(10)文献 因幡地域は土支脚出土が希薄な地域で、秋里遺跡や桂見遺跡等で散見される程度である。

(15) 前掲(13)文献 「付け庇」は焚口周縁及び周辺に粘土を貼付け庇とし、「曲げ庇」は焚口の切り口上部を前方に折り曲げ庇とするものである。

(16) 前掲(11)文献 この形態の竈は山陰、北陸を中心とした日本海側に分布の中心があるようである。

(17) 前掲(10)文献 本稿分類のA類が東部型、B・C類が西部型に該当する。

(18) 石見中部の江津市半田浜西遺跡例(図49中67)でも庇が焚口上部に付く例(B類)が報告されているが、6世紀後半と時期が下る。当地域周辺においても資料の増加が待たれる。

(19) 前掲(10)文献

(20) 島根県教育委員会 1997『石田遺跡Ⅲ』

山陰地域の移動式窯 出土遺跡一覧

山陰地域

道 路 名	所在地	株式会社	時 期	番 号	分類	備 考	道 路 名	所在地	株式会社	時 期	番 号	分類	備 考	
福岡谷ノ上	淀川町	A区池原外	不明	-	A		福岡谷	淀川町	MT85～平成京町	TK217以降混在	-	A		
		A区忍野	TK217	-	C					TK217～	-	C?		
福岡柳谷	淀川町	A区忍野上層	6世紀後半～7世紀代	-	A					MT21混在	-			
小町石楠ノ上	岸本町	SD11	不明	-			小町	マノカシヤマ	木子市	CB・C7・D7 7世紀上層	TK217～			
京堀	箕面町	SD02	6世紀後半	19-07	A	安葬・把 手	京堀	木子市	造構外	不明	-	-		
天王原	箕面町	FKCSL-02	6世紀中葉	17	A	安葬		SS-02	TK217～TK46	-	A	羽庭?		
天萬十井前	箕面町	SD20	6世紀中葉以降	21	C	安葬		SS-02	TK46	-				
		SI 3	TK217	-	-			SS-02	SI-3	TK217～TK46	-			
		SS19	TK209	-	-			SS-4	MT21?	-				
		SS18	7世紀後半?	-	-			SS-6	不明	-				
		SI 6	理土七郷	-	-									
福塚早里	西鶴町	SS21・22	TK217	-	-									
		SS29・30	TK209	-	-									
		SS31	TK217～TK46	-	-									
		SI12	TK209	-	-									
		SS33	理土上層	5世紀後半以降	-	-								
古谷鍬神社	木子市	造構外	不明	-	C?									
今在家下井ノ上	木子市	造構外	不明	-	C									
吉市カハラケ田	木子市	SD40	古墳後期～奈良 期	-	B/C									
吉市宮ノ谷山	木子市	テラス15 集石1	8世紀前半?	34	A/C									
長砂第3	木子市	SI08	MT15-TK10	15	B									
石州府第4	木子市	造構外	7世紀中葉～後 奈良	29・30	A	挖手、エ チュア 士器出土								
		SI-11	TK209～TK217	-	-									
		SS-2	TK209～TK217	-	-									
越田第6(鶴)	木子市	SS-4	TK209～TK217	-	-									
		SS-8	TK217～TK46	-	-									
		SS-22	MT21	-	-									
		テラス状遺構3	TK217～TK46	27	A/C									
越田第6(南)	木子市	CB・C7・D7	TK217～TK46以 後	-	-									
		7世紀中葉	降 混在	-	-									

(寺町村名は2005年現在)

道 路 名	所在地	株式会社	時 期	番 号	分類	備 考	道 路 名	所在地	株式会社	時 期	番 号	分類	備 考	
石田	安来市	I・3 区土郡原	出雲 4期	-	B/C		福富 I	松江市	IKS005	出雲 6B期?	-			
石田Ⅱ	安来市	I-SKS001	出雲 4期	42	C					6世紀後半～	53	B/C		
高広	安来市	SX-01	出雲 4～5期	44	C					土郡原	1?			
山ノ神	安来市	建物3	出雲 3期	-	-		田中谷	松江市	加工段1	出雲 6B期	59	C		
		建物7	6世紀中葉	40	A/C					加工段4	出雲 6期?	-		
		建物6	7世紀末	45	A					久米	松江市	土郡原まり	不明	
五反田	安来市	建物11	TK217	-	C	造付け窓				久米B	松江市	SL-01	出雲 5～6期	57 C
		漢状遺構1	出雲 4期	43	B/C					米阪	松江市	西-KSD-3	不明	-
速見跡	安来市	II区包含層	出雲 3期?	41	C					イガラビ	松江市	堆積層	不明	-
日ノ日Ⅱ	安来市	造構外	不明	-	-					池ノ奥A	松江市	包含層	不明	-
春日シマン谷	東出雲町	第4号テラス	出雲 3期	46	C					矢田平所	松江市	加工段D埋土	6世紀末～	
		SB-17	出雲 6A期	48	B/C					土郡原	松江市	土郡原	8世紀?	-
		SB-22	不明	-	-					島田地	松江市	IKS003	不明	-
		加工段9	出雲 6B期	50	B/C									
池山地	東出雲町	土郡原2	出雲 5期?	47	B/C									
		土郡原3	8世紀初期?	-	-									
		土郡原4	6世紀後半?	49	B/C									
		土郡原5	出雲 6B期?	-	-									
		SB01	出雲 6B期	-	-					西 I	斐川町	段丘遺構 1	出雲 4期?	-
		SB02	出雲 6B期	-	-					段丘遺構 2	斐川町	段丘遺構 2	出雲 4～5期?	60 B
池山池古墳群	東出雲町	SB03	古墳後期～周	-	-					三田谷 I	出雲市	SL16	出雲 1期	39 B
		SB-17	出雲 6A期	-	-					II-KSD03	出雲 2期?	-		
		SB-22	不明	-	-					II-KSD01	出雲 2期?	-		
		SB02・03	6世紀後半～7世紀代	-	C									
勝負	東出雲町	加工段下方平坦面	不明	-	-									
		SB05	出雲 3期	-	-									
垂木	玉造町	SB08・09	出雲 3期	-	-					古志本郷 I	出雲市	C IX SK23	古墳後期～奈良	-
		SB10	出雲 3期	-	-					古志本郷 II	出雲市	C IX SD18	古墳後期～奈良	-
		東区包含層	不明	-	-					古志本郷 VI	出雲市	KKK十坑理土	不明	-
岩屋 II	玉造町	加工段 4	8世紀中頃	-	-					SD02	出雲 7世紀初頭～	64-65 B		
		井ノ木	壁屋	不明	-					堆積外	出雲市		前葉	
		竹ノ崎	六邊屋	不明	-					坂棚	出雲市	加工段1	B	
		御園ノ谷	富士	不明	-					坂棚	出雲市	出雲 4～5期?	63 B/C	
		吉田川 V	Y-I・I・砂レ・B	7世紀?	C					高浜 B	出雲市	出雲市	不明	-
		吉田川 V	右岸青灰色	7世紀前半～	-					小山	出雲市	出雲市	不明	-
		砂礫層 3	6世紀末	-	-					坂棚	出雲市	出雲市	不明	-
西川津謹	松江市	造構外	7世紀?	-	-					小山3点	出雲市	G IX SE08	不明	-
		土器潮り C	出雲 4～5期	56	C					下台合	出雲市	加工段 2	6世紀後半～	
		4AKS005	出雲 4期	55	C					土器潮り	出雲市	7世紀代	66 C	
福富 I	松江市	14B-KSB15	出雲 5～6 A期?	58	C?					坂棚	出雲市	出雲市	不明	-

図 版
PLATE

カラー図版 1

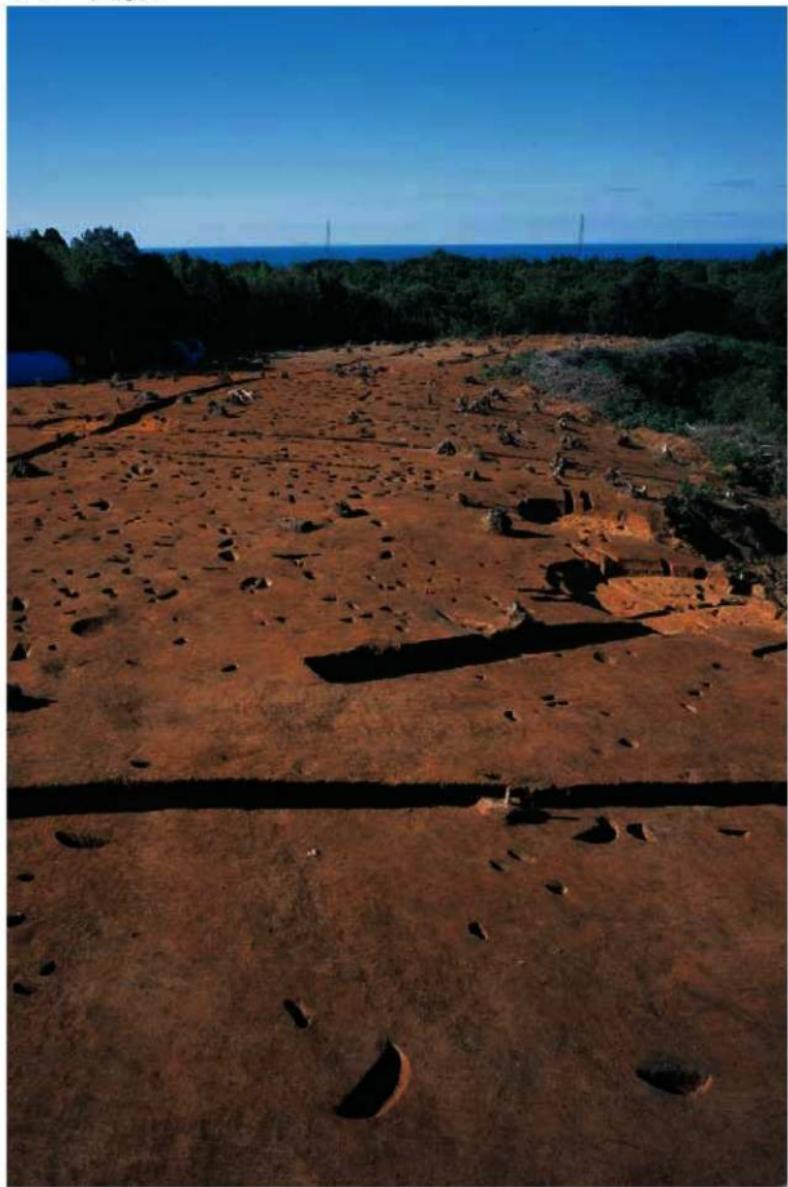


1 調査地周辺の地形（東から）



2 調査後調査地全景（左が北西方面）

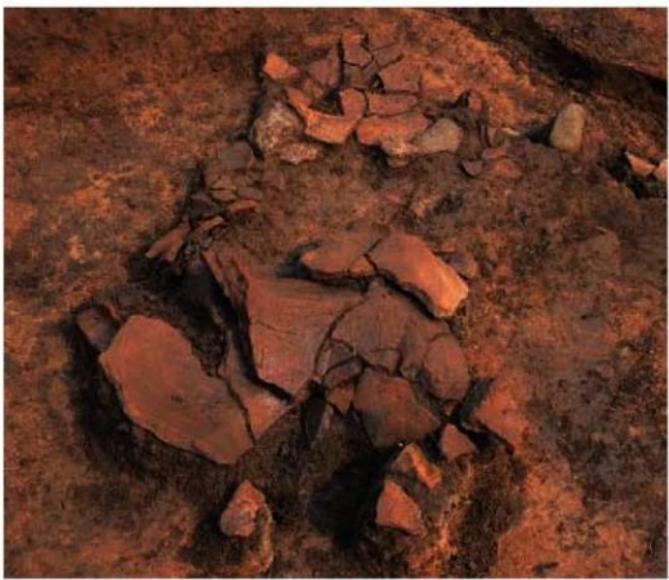
カラー図版2



調査地完掘状況（南から）



1 竪穴住居4遺物出土状況（南西から）



2 移動式窯出土状況（北西から）

カラー図版4



1 壺穴住居4 完掘状況
(南西から)



2 壺穴住居4
竪下塗土検出状況
(北西から)



3 壺穴住居4
貼床除去後完掘状況
(南西から)

図版 1



1 竪穴住居 1
土層断面状況
(南から)



2 竪穴住居 1 b
完掘状況 (西から)

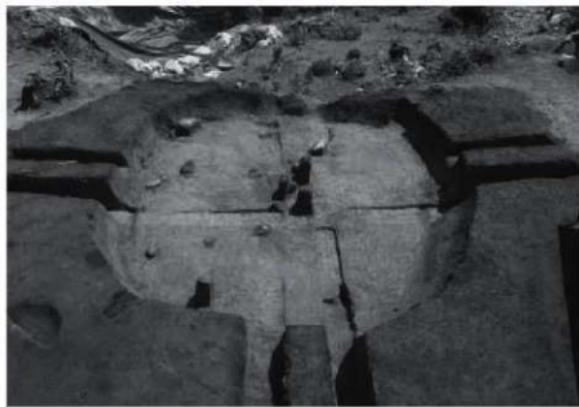


3 竪穴住居 1 b
P 13根石検出状況
(南から)

図版2



1 壁穴住居 1a
完掘状況（北西から）



2 壁穴住居 2
遺物出土状況
(西から)



3 壁穴住居 2
完掘状況（西から）

図版3



1 積穴住居3
遺物出土状況
(南西から)



2 積穴住居3
炭化材検出状況
(東から)



3 積穴住居3
完掘状況 (西から)

図版4



1 調査地中央部ピット群完掘状況（南東から）



2 調査地南側ピット群完掘状況（北から）

図版 5



1 挖立柱建物 1
完掘状況（北西から）



2 挖立柱建物 2・3・4
完掘状況（北から）



3 挖立柱建物 5
完掘状況（北から）

図版6



1 挖立柱建物 6
完掘状況（北から）



2 挖立柱建物 7
完掘状況（南東から）



3 竪穴 1 完掘状況
(南東から)

図版 7



1 溝 1 完掘状況
(東から)



2 溝 2 土層断面状況
(南西から)



3 溝 3 完掘状況
(西から)

図版8



1 土坑1・2・3土層断面状況（東から）



2 土坑2完掘状況（東から）



3 土坑1完掘状況（南東から）



4 土坑4完掘状況（西から）



5 土坑5完掘状況（北から）



6 土坑6土層断面状況（南から）

図版 9



1 土坑7完掘状況（東から）



2 土坑10・11完掘状況（南西から）



3 土坑8土層断面状況（北から）



4 土坑8・9完掘状況（北から）



5 土坑12完掘状況（西から）



6 土坑13土層断面状況（東から）

図版10



1 土坑15炭化材検出状況（北から）



2 土坑14土層断面状況（東から）



3 土坑14完掘状況（北東から）



4 土坑16底部炭・焼土検出状況（南から）



5 土坑17底面炭検出状況（西から）



6 土坑18土層断面状況（西から）

図版11



竪穴住居4出土遺物

図版12



1 穹穴住居4出土移動式竈（1）



2 穹穴住居4出土移動式竈（2）



3 穹穴住居2・4出土鉄製品

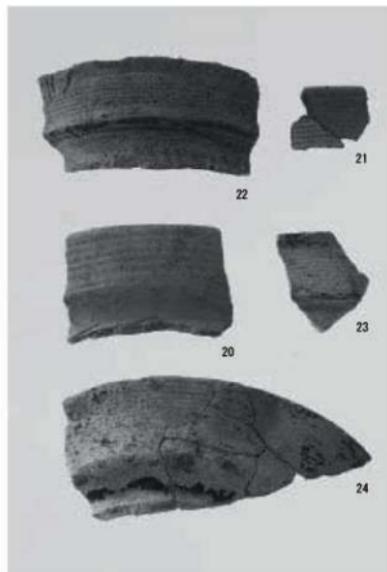


4 穹穴住居4出土鉄製品

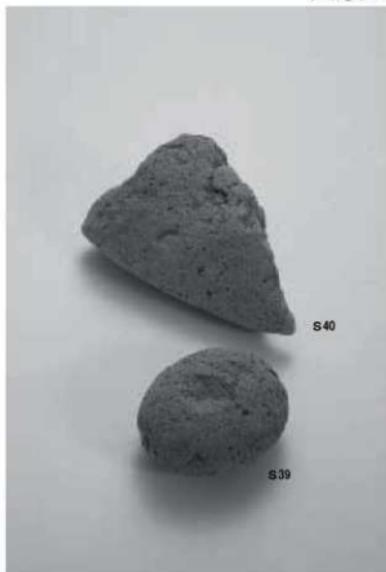


5 穹穴住居4出土鉄製品X線写真

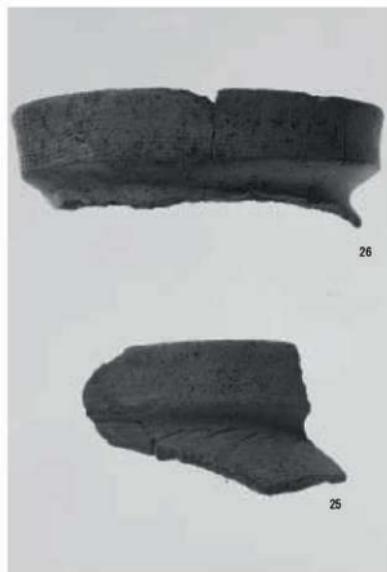
図版13



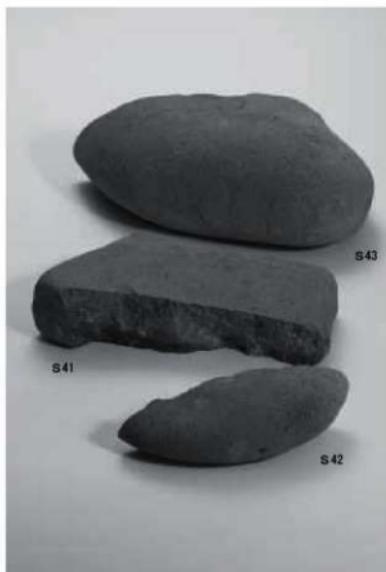
1 竪穴住居1出土土器



2 竪穴住居1出土石器



3 竪穴住居2出土土器



4 竪穴住居2出土石器

図版14



F 1

1 竪穴住居 2 出土鉄製品



F 1

2 竪穴住居 2 出土鉄製品 X線写真



27

28

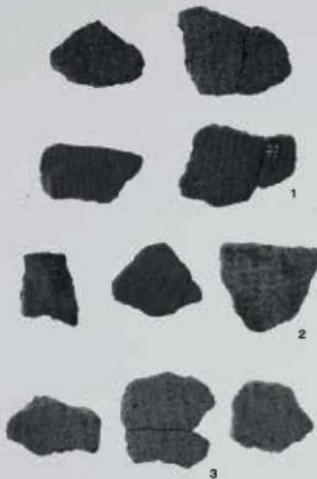
3 竪穴住居 3 出土土器



S 45

S 44

4 竪穴住居 3 出土石器

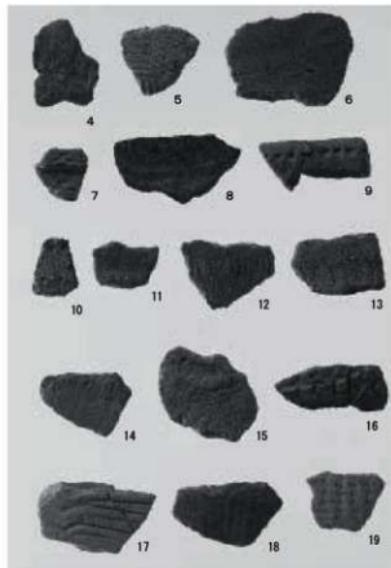


1

2

3

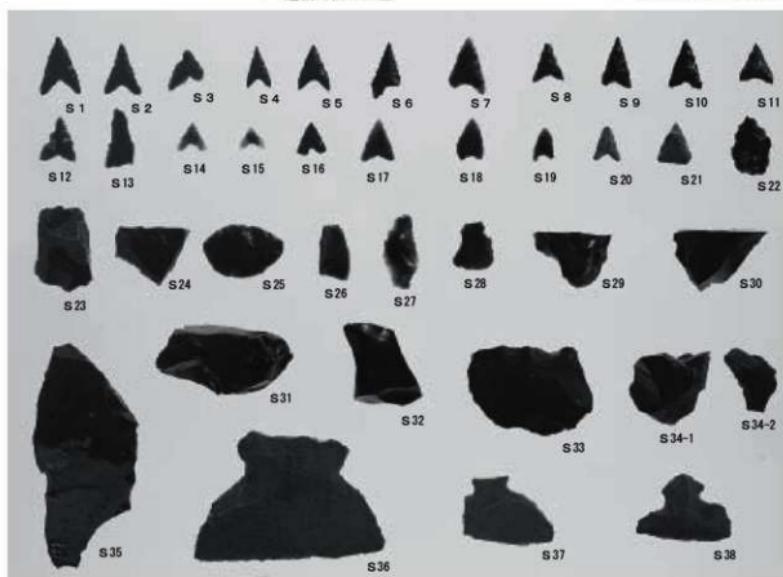
5 土坑 1・2・3 出土土器



1 造構外出土土器

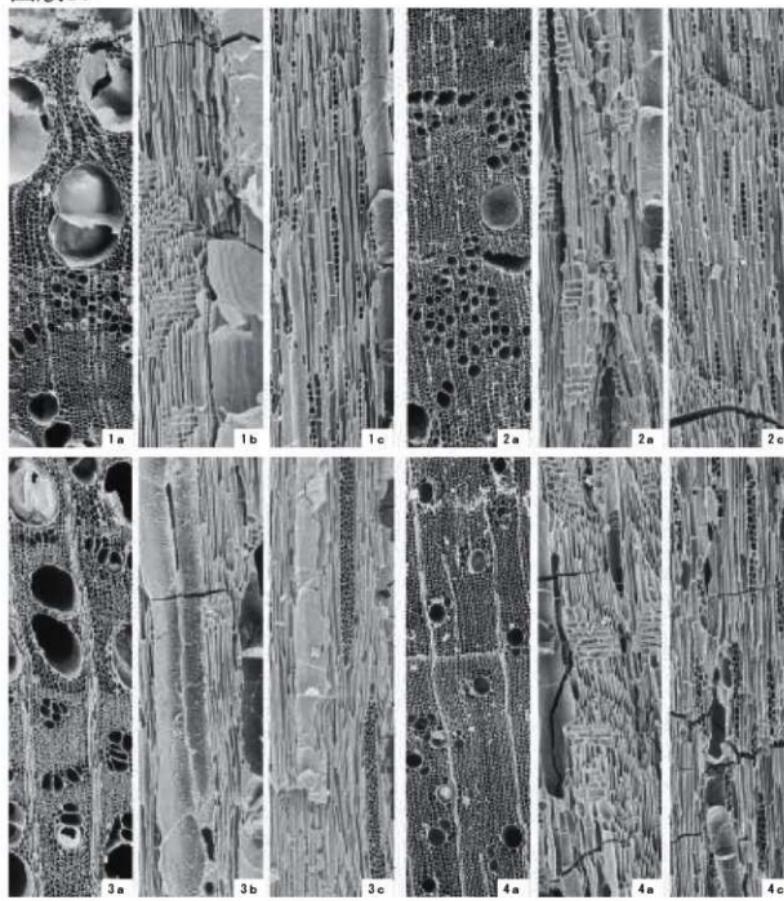


2 造構外出土石器（1）



3 造構外出土石器（2）

図版16



1. クリ（試料3）
2. スダジイ（試料2）
3. ヤマグワ（試料6）
4. クスノキ科（試料9）

a : 木口, b : 径向, c : 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

報告書抄録

ふりがな	なわなかうねいせき							
書名	名和中畠遺跡							
副書名	一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	IX							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	103							
編著者名	加藤 裕一 木山 清貴 日置 智							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005年(平成17年) 3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なわなかうねいせき 名和中畠遺跡	とつとりけんさいほくぐん 鳥取県西伯郡 なわちょうおおあざなわ 名和町大字名和 あざなかうね 字中畠1083ほか	31387	311	35° 30' 09"	133° 30' 29"	20040405 ～ 20041027	9340m ²	一般国道9号(名和淀江道路)の改築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名和中畠遺跡	集落	縄文時代早・前・中期		土坑		土器、石器		—
		弥生時代終末期		竪穴住居		土器、石器、鉄器		—
		古墳時代後期		竪穴住居		土器、石器、鉄器		移動式竈が良好な状態で出土
		時期不明		掘立柱建物、竪穴、土坑、溝		土器、石器		—

鳥取県教育文化財団調査報告書 103
一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX

鳥取県西伯郡名和町
な わ なかうねいせき
名和中畠遺跡

発 行 2005年3月25日
編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地
電話（0857）27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団
印 刷 日ノ丸印刷株式会社